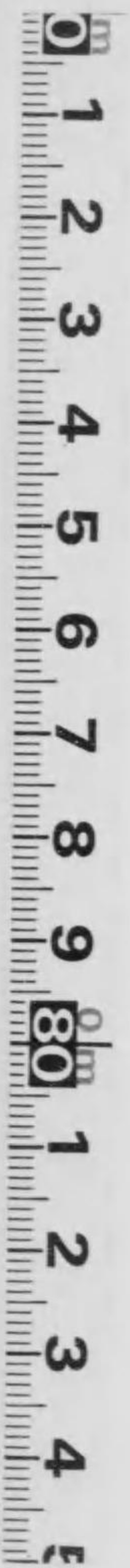


60
285



始



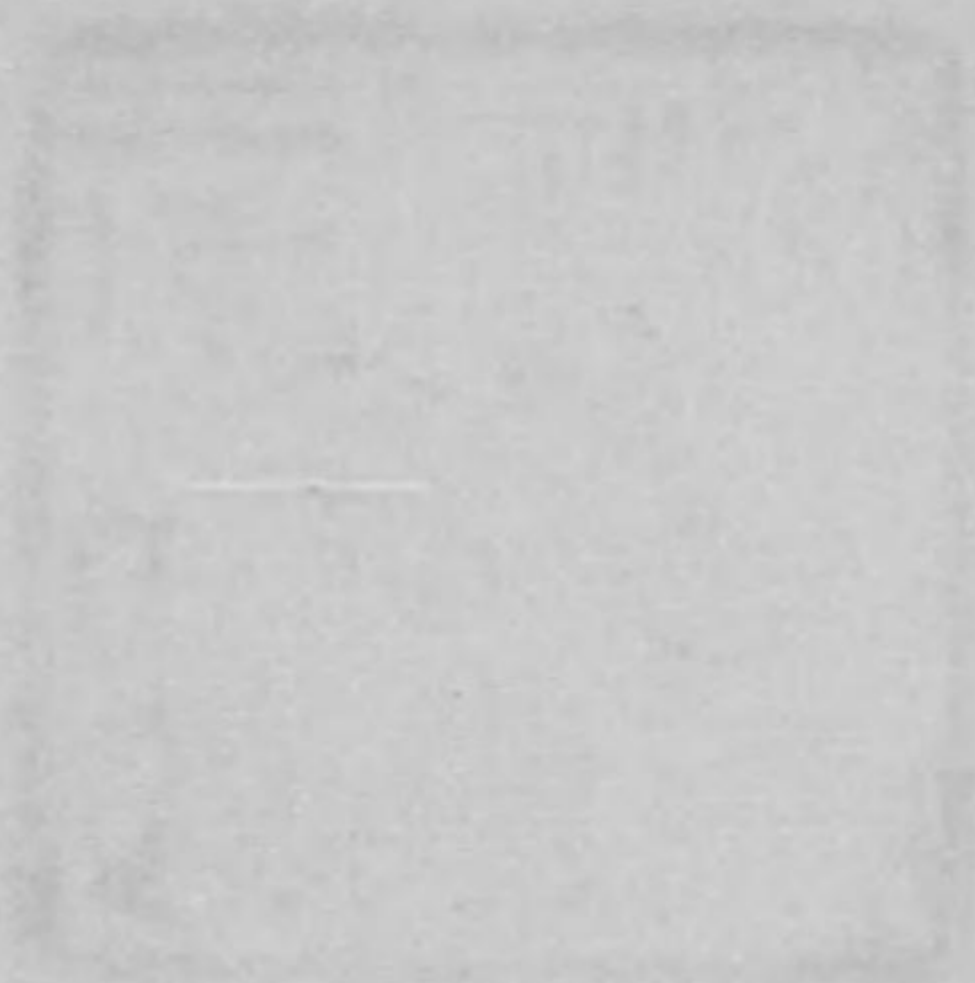


一乃母高書

即為
學之
哲學

大正
14. 10. 6
内交

大澤謙二先生肖像





大 冢 嘉 二 次 生 肖 像

60-285

恩師東京帝國大學名譽教授
醫學博士

大澤謙二先生

に此の小著を奉る

著

者

この小冊は、
大正十二年
三月
東京
丸の内
丸の内
丸の内

醫學と哲學改版の自序

恵あまれき春の光に、久しい間枯木となつて横はつて居た柳の舊株が、再び新しい芽を吹きました。芽は吹いても、柳は所詮柳です。美はしい花も咲かねば、甘い果も實りません。唯、舊くして新らしく、眞率に、素直に、風來れば風に靡き、月照らせば月を印し、露置けば露を宿す位が、關の山であります。

茲に、恩師大澤謙二先生の、東京帝國大學教授在職二十五年に滿ち玉へる祝賀の記念として、筆を執つた本書が、今又た、再び、世に出づる様になりました。此の間、吾が恩師には老いて益々健やかに渡せられて、今猶ほ昔の如く、暖い春の光となつて、私を惠み、私を導き玉はることを、心より感謝し、歡喜致すと共に、此のつまらない舊い柳の、新しい芽生に、露さなり月さなり、風さなつて、興趣を添へられんことを、ひたすら大方の讀者諸賢に

二
お願い致す外、序さなすべき何等の辭をも有たないのであります。

永井潜識

序

吾人此の世に生存するものは、皆人生觀を有す。唯教育の度合と性情の異なるによりて、其の考ふる所は人々同じからず。男子には男子の人生觀あり、婦人には婦人の人生觀あり、政治家・實業家・學者・軍人・宗教家・等、各自の教育・性情・職務等に隨つて夫れ々々皆人生觀を有す。故に人生觀は各自の主觀的狀態によりて定まるものなり。然るに吾人の生存する世界は、各自の個性に超越して存在し、所謂自然法によりて活動するものなり。吾人各自の人生觀に従つて、其の目的を達せんとするときは、必ず自然法の幫助に依らざる可からず。然らば則ち一は吾人の目的を達するの手段として、一は自然界に對する好奇心の満足のため、爰に自然科学の研究起るに至れり。斯の如くにして吾人の思想は主我系統と主自然系統との二大別を生ずるに至れり。

三

今、歐洲に於ける思想發達史に就て、此れを見るに、一方には、ソクラテース・プラトーン・アリストートル等の系統を引ける所謂哲學史あり、他の一方にはデモクリタス・エピクラーラス・ルクレシアス等の系統なる物理學史ありて、思潮の二方面を代表するもの、如し。然るに近世に至りてガリリチ・ガセンツ・ニュートン等の輩出後、自然科學は長足の進歩をなし、歐洲人の人生觀を一變するに至れり。哲學は此れに反し宗教と聯合して歴史的人生觀を保留し、守勢の位置に立てり、又歐米に於ける現時の人生觀を東洋人の人生觀に比較するときは一は物質的即主自然系統に傾き、一は主我系統に傾く者の如し。此等二大思潮は、古來學理の上に於て又實際の生活上に於て屢、争闘を生ぜし如く、現時に於ても亦屢、争闘の種々なり人をして道を誤らしむる原因となること少からず。此等思潮が果して調和せられ得べきものなるか。若し調和せられ得べきもの

なりとすれば、如何にしてなされ得べきかは、吾人の前に横る所の大問題なり。

宗教家は宗教を以て此の大問題を解決せんとし、教育家は人を教育し、各自をして此等の思想を能く咀嚼せしむるの能力を養はんとするもの、如し。然るに今學理上より此れを見るときは宗教及教育は學理の應用なり。其の根本たる學理不定なるときは、其の應用如何に巧なりと雖も、何んぞ能く其の功を奏するを得んや。學理研究の必要此所に存するなり。學問上より此れを見るときは、此の問題は、畢竟自然科學と哲學との調和問題にして、哲學者此れを試むるときは哲學に偏し、科學者此れを試むるときは科學に偏す。今日に至る迄満足なる解決を得る能はざる所以なり。今後若し種々なる學者輩出し、同問題を解決せんことを、試むるものあらば、漸次此等の思想をして、互に相接近せしむるを得べしと

雖も、其の解決の速かなるに然らざるは、其の方法宜しきを得るに然らざるに關すること、少からざるなり。

此等二大思潮は、畢竟人生の二方面にして、此れを調和せしむるの方法は、先づ人を研究するを以て至當となす。人を研究する學は、生理學・心理學・社會學・文學・歴史等、其の數多し。雖も、就中生理學と心理學とは、最も基礎的のものを見るを得べし。故に先づ生理學と心理學との調和を試むるを要す。是れ既に生理的心理學の研究によりて、大に其の歩を進めたり。雖も、前途尙ほ遑遠と云ふべきなり。

又世界歴史の上より此れを見るときは、歐米の思想と、東洋の思想とは人生の兩面を表はすものと見るを得べく、此等思想の調和は文明史上の一大事業たるべきなり。現時我邦の状態を見るに、日本は東洋の一島國にして、所謂東洋流の思想は、先天的に國民

の腦裏に備はると同時に、過去四十年間に、西洋の思想を容れ、此れを同化し、西洋文明の何物なるやは、先づ、了解したるものと見るべきなり。日本今日の文明は實に東西思想の聯合の結果なり。此等の事情より推して將來を考ふるに、將來にも亦、日本は東西思想を調和するに、最も適したる國にはあらざるなきか。

余の尊敬する朋友永井潛君、此度、醫學と哲學なる書を著し、普通世人の著眼とは異り、醫學と哲學とは密接の關係あることを論ぜらる。畢竟自然科学と哲學との關係を、主として歐洲の醫學史上より、論ぜられたるもの、如し、其内容は本論によりて讀者の了解せられんことを望む。惟ふに哲學と科學と、元來異なるものにあらず、自然界に對する好奇心・安心・立命・利用・厚生等の動機よりして、自然現象を観察し、或は人の運命を考察して、宗教となり、哲學となり。自然科学となり、醫術となり、自然力の利用となり、

機械の發明となる等の、多様な結果を得たるものなるべし、而して各個人は、皆各個性を有するが故に、自己の運命に就て憂慮すること深き人は、速かに安心の境に達せんとするの念切にして、科學的研究の結果を俟つの暇なく、或る信仰により、若くは獨斷的に人生の運命を定め、此れによりて安心立命を得んとして、宗教家となる。好奇心強くして、自然現象の説明を試みんとするものは、自然科學者となる。或は利用厚生の念強き人は、自然力を人生に利用する方法を案出し、人の經濟的生活を豊ならしめんことを務むる等のことにより、人の思想多様に別れ、従つて研究の方法も亦、種々に別れたるものなり。斯の如くにして、終には醫學と哲學との如きは、全然異りたるものなるかの如き思ひを生ずるに至りたるものなるべし。然るに此等多様の研究は、畢竟人生を豊ならしむるの方法にして、歸する所は皆一なるべきは、殆

んど疑ふべからざるが如し。永井君の著書の如きは、實に此の眞理を尙ほ一層明かならしむ上に貢獻する所少からざるを信ず。故に一言を述べて序文となす。

元良勇次郎識

醫學と哲學の卷首に書す

回顧すれば二十五年の昔余が郷里備後なる松永に老儒長谷川櫻南先生の管理に關せる漢明館と呼べる漢學塾ありき。其頃此處に安藝の竹原より入塾し來れる一童兒あり、齡甫めて九歳にして能く五經を暗んじ才學優に先輩を凌ぎ塾中稱して神童と云ふ。此神童を誰とかなす。即ち永井潛君其人なり。君の從兄馬越篤太郎君亦來りて塾にあり。篤太郎君常に余が寓に出入し語次君の事に及ぶ。余は君が有爲の材を以て時世に後れたる教育を受けつゝあることを慨し篤太郎君を介して父君に忠告するに宜しく漢學塾を退かしてめて正當に小學校の普通教育より次第に進みて専門教育を受けしめ以て他日の大成を期すべきことを以てせり。

父君の教育に熱心なるや、直に來りて余を松永の寓に訪ひ初對面の挨拶を終うるの後先づ余が忠言を謝し、直に論歩を當時の教

育に向け小學教育者の學識淺薄にして到底兒子を托するに足らず寧ろ學德兼備せる漢學の師に就かしむるの勝れるを説くこと切なり。余爲めに世界の大事より教育の變遷を説き普通教育の缺く可らざること並びに小學教育者の學力淺薄なるは教育の悪しきにはあらず教師其人を得ざるにあるを以て宜しく其教師を聘し完全なる小學教育を施さしむべきことを痛論す。此の如くにして我語り彼談じ、終に夜を徹したることあり。當時余は十八の一書生のみ、父君は歸而立を過ぎ既に羈黨に重なるの人たり。然るに父君の言を容るゝに昏ならざるや翻然從來の主張を棄て潜君をして渡明館を退き小學校の教育を受けしむ。是れより余は父君と忘年交を締し他日種々の規箴獎勵を受け處世上少からざる裨益を得たり。後余の廣島師範學校に訓導となるや、潜君亦余が寓に來り附屬小學校に生徒たり。當時余は、實に君の小學教育の師たりしなり。

爾後余は東上し君は福山中學校に移り東西相隔れり。雖も永井家と我家との交情及び君と余との關係は益々親密を加へ凡そ君が一身の進退余の與り聞かざることなし。君東京に來り第一高等學校に入り進みて醫科大學を終うるの間、余は或は東京に在り或は長野に在りて、集散一ならずりきと雖も、余は居常君が進歩の著しくして中學以來殆んど常に級中の首席を占むるを見聞して己が兒子の名譽を博取せしが如くに喜を禁ぜざりき。特に大學に在るの間殆んど毎歲特待生の名譽を有らしを知り眞に余が先見の空しからざりしを察し深く自ら喜べり。

余が母余が妻亦深く君を敬愛し、君を見ること他人を以てせず。喜を共にし悲を慰め常に君の身に幸あらんことを希へり。君の歐行を命ぜらるゝや一夕家人と共に別宴を開く。余が母七旬自ら菜を摘み鷓肉の羹を作りて君を饗す。蓋しなまりに因みて君が名聲

を博取せんことを祝福せしなり。果然、君は余等の囑望に背かず、其月沈原大學に在るや夜以て日に繼ぎ孜々として學術の研究に従事し許多の得易からざる業績を齎らして歸れり。君の歸りし時余偶、病みて東京病院に在り。君の來りて病室に入るや、余は先づ涙流れて禁ぜず、眞に言ふ所を知らざりしなり。嗚呼舊知相逢感孚此の如きもの豈に偶然ならんや。抑も君が余及び余が家人をして敬愛此の如くならしむる所以のもの唯其學識の優れたるさ少時より深き關係あるに由るか。然り。然りと雖も君が資性の溫良にして事に忠に恭謙にして人に厚く、父母に孝に兄弟に友なる、眞に現時得易からざるの人たるに由らすんばあらず。余は實に余の舊弟子たる親友に君の如き人物を得たるを以て誇とするものなり。是より先き君の大學を出づるや余は勸むるに生理學の著述を以てす、蓋し生理學は人類學的科學の研究に基礎を與ふるものにして

て自然科學中重要な地歩を占むるに係らず邦語を以て記されたる好著殆んど無し。假令一二の人身生理學ありと雖も生物界全體を對象とせし所謂一般生理學の著は絶えて無しと云ふも可なり。是れ余の特に君に勸告せし所以なり。君此言を空うせず渡歐前後數年の間辛苦研鑽を重ねて一大著述をなし、出版日あらざらんぞ。然るに君歸朝の後東京醫科大學に仙臺醫學專門學校に講坐を有し、且つ各種醫學會の講演に雜れ日も足らず。未だ此著を公にするに至らざるは君を知れる者の竊に遺憾とせる所なり。圖らざりき這回君は恩師大澤謙二君の在職二十五年の祝典に捧げんが爲に別に稿を起し「醫學と哲學」と題する一大冊子を草して之を公にするに至らんとは、君の余に大澤博士に捧ぐる論文を草せんとせしことを語れるや僅に數週の前のみ。今や君の送れる巻を把りて讀下すれば上下三千年世界の文明國に現はれたる醫學と哲

學との關係、説きて要を得たるを見る。然かも其説述の巧なる人をして讀みて厭くことを知らざらしむ。是れ君に在りては精餘の業績にして其本領を發揮せしものと見る可らざるも他人に在りては優に一原著として世に問ふに足れり。余は此趣味多き好著を贏ち得たるを喜ぶと共に實に君が勤勉の過度にして其健康を害せざりしかを氣遣へり。幸にして其益強健なることを知り欣喜措く所を知らざるなり。

今や余は君が囑に應じて此書に序するに當り二十五年來の感想油然として腦に溢れ言ひ知れざる喜を感じぬ。是れ余が此の如き著書の巻首に記す序文として其體を失せることを自覺せるに關せず交情の経過を絮説して憚らざる所以なり。君が處女作たる本書に對して余の喜や此の如し。況して故山に在す君が嚴慈の喜は如何なるべきか。余は實に君の如き兒子を有する父君を欽羨し君の

如き兒子を生める母君を敬重して止まざるなり。想ふに遠く獨逸に在る篤太郎君も亦此書に接して余と感を同うするならむ。君よ冀くは能く身體の健康を保ち益研鑽を進めて廣く人類と國家とに寄與すると共に君の嚴慈と君の舊師にして親友たる余をして益喜を加へしめよ。

抑も世に神童ありて神翁なしとは古來人の言ふ所たり。然るに君既に神童の名を得、絶えざる進歩を以て青年期を経過せり、過去を以て未來を推さば其神翁たること亦疑なしとす。余は君の嚴慈と共に百歳の壽を保ち神翁たるの君を見んことを樂しむ者なり。

高島平三郎識

『醫學と哲學』序文

Alle Naturwissenschaft ist Philosophie, und alle wahre Philosophie ist Naturwissenschaft.

Alle wahre Wissenschaft aber ist Naturphilosophie. Ernst Haeckel. (1896.)

哲學は、眞理を攻究するものである。人類の手で企てたる所の研究・觀察・思索・認識の結果を綜合して、以て宇宙は何か、人生は何かを解釋せむことをつとむるのが、すなはち哲學の本領である。哲學の歴史を讀むで見ると、時代によりて、固より學者の所見に相違はあるが、しかし歸著する所は、凡そ此の如くである。さすれば、眞實の哲學は自然科学であると言つても差支は無い。又すべての自然科学が哲學である、すべての眞實の學問が自然哲學であるといふことも、決して不當の言とすべきでは無い。

斯ういふやうな見地からして、醫學と哲學との關係を研究する

こゝは、頗ぶる面白い問題で、近頃世間の學者を驚ろかしたるヘツケルの「宇宙の謎」生活の不思議などの生物學的哲學は、この方面にての先鋒とも見るべきものであるが、その外にも獨逸のウナルトマン、メーヒウス、フェルウオルン、佛國のメチニコフなど、醫界の大家で、道般の問題に手を著けたものは已に尠なくない。しかし親友永井潜君が、このたび、其師大澤博士在職二十五年祝賀のために、著はされたる「醫學と哲學」は、以上のものは全く別で、これは歴史學上から、兩個の學問の關係を研究せられたるものである。固よりこれまでの諸家の醫史の中には、處々に哲學と醫學との關係は説いてあるが、しかし永井君のこの書の如くに纏つたものは見當らぬ。我々はこの點に於て、まづ永井君の功績を稱揚せればならぬ。

永井君が、専門に攻究せらるる學問は生理學で、固より觀察と試

驗とで、個々の自然的現象を認識せむことをつとめらるることは勿論であるが、しかし此の如き研究によりて得たる認識を、綜合して、これを一個の燒點に集むることをせれば、その學問の效能は十分發揮せられたとはいはれない。それで尠なくとも哲學的思索若しくは論理的思索といふものは、その専門の學科の攻究の上が必要である。哲學の攻究の法則も同様で、哲學をもつて眞理を研究するの學問として、『あらゆる學問の女王』とせむには、其攻究は必ず論理的思索に基づかねばならぬ。さすれば、此の如き法則にて研究せらるべき眞實の哲學は、已に前にも言つた通り、自然科學の中に屬すべきものとして差支ないのである。

兩個の學問の關係が、此の如く親密である所から、生氣說對器械說の如き、身體對精神の如き、一二の問題を捉へ來たりて、醫學史上よりこれを見るに、醫學と哲學とはつまり同一の點に歸著

三

すること、明かにわかる。しかし、既往二千年の歴史に涉りて、秩序的にこれを叙述するといふことは、誰人にも出来るといふ次第ではない、必ずや永井君のやうな達識の生理學者で、側ら醫學と哲學とに通じた人の力に頼られば、成就せぬことである。我々はこの點に於て、永井君が我が學界のために奮て此の如き重任に當られたることを感謝せねばならぬ。

この書には、已に元良博士の序文があり、高島先生の序文もあつて、著者の經歷人物及びこの書の内容を證明するには、十分である。謫劣余が如きものが、此書に對して序文などを書くといふことは嗚呼がましいわけであるが、永井君とは同郷同學の親しみもあり、殊に永井君が此書を捧げらるる所の大澤博士は學者の模範として余の常に欽仰する所で、從てこの書に序文を書くといふことは、余に取りて光榮の至であるから、敢て自から攜らず、つ

まらぬことを書き立てて、これを序文とした次第である

富士川 游謹識

目次

第一	緒論	一
第二	總論	七
第一編	古代に於ける醫學と哲學	一
第一章	太古	一
第二章	古代希臘	四
第一	自然哲學者時代	七
	ミレートス學派	八
	ピタゴラス學派	二
	エレア學派	三
	ヘーラクライトス	四

目次

エムペドクレース 二六
 アナクサゴラス 三四
 アトム論者 三六
 折衷説 四四
 摘要 四七
 第二 ヒッポクラテース時代 四九
 ヒッポクラテース及び其の學徒 四九
 プラトーン 五九
 アリストテレース 六五
 摘要 八一
 第三 ヒッポクラテース以後ガレーンに至る迄の時代 六三
 アリストテレース以後に於ける希臘哲學の大勢 六四
 アレキサンドリア時代の醫學 九二
 羅馬時代に於ける醫學 九八

第四 ガレーンの學説 一〇三
 第五 古代の醫學及び哲學に於ける綜覽 一一

第二編 中世紀 二七

第三章 中世紀に於ける思想界の大勢 二七
 第四章 中世紀に於ける醫學 三三

第三編 近世紀 三三

第五章 近世紀に於ける大勢 三三
 第六章 十六世紀に於ける醫學と哲學 三五
 第七章 十七世紀醫術に於ける醫學と哲學 三六
 第一 十七世紀に於ける哲學 三六
 經驗學派 三六
 唯理學派 四七

第二章 十七世紀に於ける自然科學の進歩……………二六一

第三章 十七世紀に於ける醫學……………二六三

第八章 十八世紀に於ける醫學と哲學……………二九三

第一 十八世紀に於ける思想界の大勢……………二九三

第二 十八世紀に於ける自然科學の進歩……………二九五

第三 十八世紀に於ける醫學……………二〇九

十八世紀醫學の大勢……………二〇九

第一期 醫學系統學派時代……………二一一

第二期 ハルラー及び其の時代……………二一七

第三期 ハルラー以後に於ける十八世紀の醫學……………二三三

(一) 神經病理說……………二三三

(二) ブラウンの學說……………二三四

(三) 生氣說……………二三八

第九章 過渡時代に於ける醫學……………二五〇

第一 酸素治療法……………二五〇

第二 動物電氣說(二名ガルバニスムス)……………二五二

第三 動物磁氣說(二名メスメリズムス)……………二五三

第四 ホメヲパチイ……………二五九

第五 頭骨相學(二名フレノロギイ)……………二六二

第十章 過渡時代及び其の以後に於ける哲學……………二六六

第一 カント哲學の梗概……………二六六

第二 カント以後に於ける近世哲學……………二七四

カント以後に於ける思想界の大勢……………二七四

理想主義……………二七九

(一) フイヒテ……………二八〇

(二) シエリング……………二八一

(三) ヘーゲル……………二八四

(四) ショツベンハウアー……………二八九

(五) カント以後の理想主義に於ける提要……………一九三

實在主義……………一九五

 ロツチエ……………一九六

積極主義……………二〇一

 (一) コント……………二〇一

 (二) ミル……………二〇三

 (三) スベンサー……………二〇四

 (四) 提要……………二〇八

唯物論……………二〇九

第十一章 十九世紀に於ける自然科学の進歩……………二一一

第十二章 輓近醫學に於ける實驗生理學……………二三八

第十三章 身體と精神……………二七三

 第一 自然界認識の界限……………二七三

 第二 身體と精神とに關する諸學說の綜覽……………二七六

(I) 身體と精神との性質上の關係……………二七六

 (一) 二元論……………二七七

 (二) 一元論……………二八二

 (甲) 唯物論……………二八三

 (乙) 無差別說……………二九一

(II) 身體と精神との作用上の關係……………四〇六

 (一) 心身相互作用說……………四〇七

 (二) 心身竝行說……………四二二

 (三) 心身相互作用說と心身竝行說との批判……………四二五

 (甲) 精神作用と身體作用との不等……………四二六

 (乙) 自然界に於ける完結せる因果律……………四二三

 (丙) エネルギー不滅則……………四二九

 (丁) 精神作用に對する物質の相關……………四三三

結論

- 第一 醫學と哲學の相關……………四三
- 第二 生活現象の解釋に關する思想の變遷……………四八
- 第三 精神的一元論……………四五二

附記

四五九

人名索引

一—八

事項索引

九—一七

挿畫目次

一	チエンナー……………	六
二	ヒポクラテース……………	四九
三	ヒポクラテース……………	五〇
四	ソークラテース……………	五一
五	プラトーン……………	五九
六	アリストテレス……………	六六
七	アリストテレス……………	六七
八	ガレーン……………	一〇四
九	古代に於ける骨格、動脈系、靜脈系の解剖圖……………	一三
十	一四八五年代の刺絡……………	二三
十一	パッア大學大講堂……………	二四
十二	ベザーリウス……………	二三

十三	ベザーリウス(アムステルダムに於ける油繪).....	一六
十四	ボローナ大學の講堂.....	一七
十五	ボローナに於ける解剖室.....	一七
十六	ボローナ大學に於ける解剖學教授の光景.....	一七
十七	レオナルド・ダ・ヴィンチ.....	一六
十八	レオナルド・ダ・ヴィンチの筆に成れる妊婦胸腹部内臓の解剖圖.....	一六
十九	パレー.....	一六
二十	パラツエルズ.....	一六
二十一	ペーコン.....	一六
二十二	ホップス.....	一六
二十三	ロツク.....	一四
二十四	ヒューム.....	一四
二十五	デカルト.....	一四
二十六	スピノツア.....	一五

二十七	ライブニッツ.....	一五
二十八	ハーベー.....	一四
二十九	ハーベーが一六一六年に血液循環の講義をなせし原稿.....	一五
三十	ハーベーの血液循環に関する著書の表紙.....	一六
三十一	ボレリー.....	一七
三十二	マルビーギ.....	一七
三十三	レウエンホーク.....	一六
三十四	レウエンホークの毛細管の圖、同氏の顯微鏡.....	一六
三十五	ステノ.....	一七
三十六	フアブリチオ.....	一八
三十七	グラーフ.....	一八
三十八	スワンメルダム.....	一八
三十九	ヘルモンント.....	一八
四十	シデナム.....	一八

四十一	サントロ	一八九
四十二	ジルビウス	一九〇
四十三	ボンネー	一九五
四十四	ダーキン(エラスムス)	二〇一
四十五	リンネ	二〇五
四十六	ラボアシエー	二〇九
四十七	ラボアシエーと其の夫人	二〇九
四十八	ブーアハーベ	二一一
四十九	ホフマン	二一一
五十	ハルラー	二一七
五十一	ブリーストレー	二二一
五十二	ハンター	二二四
五十三	スバランツアーニ	二二六
五十四	ヴォルフ氏[發生學原理]の挿畫	二三〇

五十五	モルガーニ	二三二
五十六	ケルン	二三五
五十七	ブラウン	二三五
五十八	ビネー	二四二
五十九	ビシヤー	二四二
六十	メスマル	二五四
六十一	ハーネマン	二五九
六十二	ガル	二六一
六十三	ファイヒテ	二六〇
六十四	シエリング	二六一
六十五	ヘーゲル	二六四
六十六	ショッペンハウアー	二六九
六十七	コント	二七一
六十八	スペンサー	二七四

六十九	リービッヒ	三三三
七十	ヘルムホルツ	三三四
七十一	ダーキン(チャールズ)	三三六
七十二	ラマーク	三三七
七十三	キュビエー	三三八
七十四	サン・イレール	三三八
七十五	ヴォレス	三三九
七十六	ハックスレー	三四〇
七十七	ヘッケル	三四一
七十八	ド・フリリス	三四二
七十九	ヴィズマン	三四三
八十	シュライデン	三四四
八十一	フークの顕微鏡	三四三
八十二	シュワン	三四四

八十三	ウイエルヒヨウ	三四五
八十四	パステーヤ	三四六
八十五	コッホ	三四四
八十六	メチニコフ	三四五
八十七	エールリッヒ	三四五
八十八	リストナー	三四六
八十九	ミュルラー	三四六
九十	ベヤナー	三四六
九十一	マシエンディ	三四九
九十二	ヴェーベル	三四〇
九十三	ルードウイヒ	三四〇
九十四	パフロフ	三四一
九十五	メンデル	三四〇
九十六	フィシャー	三四一

醫學と哲學 序論

九十七	ペーヤ……………	三六
九十八	デュボア、レーモン……………	三三
九十九	ロキタンスキ……………	四六

第一 緒言

題して醫學と哲學と云ふ。蓋し、醫學、殊に基礎醫學の中心と稱すべき生理學の發達の歴史を叙し、併せて、其の哲學に對する關係を述べんと欲するにあり。

醫學或は曰はん、醫學は疾病を論ずれば足る、漫に思索を事とする哲學の如きは、捨て、省みずして可なりと。嗚呼是れ醫にして而して未だ醫の本領を解せざる者なり。哲學者或は言をなすものあらん。哲學は實に一切を超越す、醫學の如きは、徒らに形骸の末に拘るもの、之を考察するも、將た何の得る所ぞと。嗚呼是れ哲學者にして而して未だ哲學の眞義を解せざるものなり。混沌たる太古、人は自を知らず、他を知らず、人智稍進みて、始めて自己を意識し外界を認識するに至るや、漸くにして生命の奇を異し、自然の妙に驚く、此の奇異の感、即ち是れ哲學思想の胚胎にして、さらに進みて生命及び自然なる、二つの大なる謎を解かんとするに至りて、哲學は茲に生れ出でたるなり。かるが故に、世を代へ時を改むと雖ども、哲學的攻

究は、依然として其の針路を此の二方面に向ひて進め、之れを内に省みては人生觀を求めんとし、之れを外に移しては世界觀を造らんとす。而かも前者は主にして後者は従なり。技を演ずる者は前者にして、後者は單に其の舞臺たるに過ぎず。畢竟するに世界觀は人生觀を造らんが爲の前提に外ならず。故に曰く、哲學の究極の目的は「生とは何ぞや」てふ問題に歸著す。翻りて之れを醫學に考ふるに、其の濫觴たる、病を忌み、死を恐れ、永く生を享樂せんとするにあるや言ふを俟たず。而かも機械を修理せんと欲せば、必ず先づ、其の機械の動作する所以を明かにせざるべからず。醫學の方針は、一に醫學の指南に従ひ、而して醫學の研鑽は、生命を知悉するに至りて極まる。醫學と哲學とは、其の道程を異にすと雖ども、其の歸する所や一なり。斯の如くにして、猶ほ且つ、醫哲相關せずと言ふを得べきか。

醫家また論をなす者あらん。醫學と哲學と、其の終極の目的を同じうすと言ふは即ち好し。然れども、醫學は己に自然科学てふ堅實なる立脚地を得たり、將た何を苦みてか、哲學を知るを要せんやと。而も是れ未だ其の一を知りて二を知らざるの言なり。自然科学の司る所は外的なり。現象界なり。物質界なり。其の範圍たるや五官の到達する外に出づる能はず。縦全エーテルと云ひ、「アトム」と云ひ、「エネルギ

何故に醫家は哲學を要するの必要あるか。

」と云ひ、是れ等超感覺的のものを假定して、其の研究に力むと雖ども、而かも是等のものゝ作用するや、物質界に於ける定律を脱する能はず。畢竟、之れによりて以て現象界を理解せんが爲の助となすに過ぎず。然れども、吾人は物質と共に、之れを意識すべき或るもの、即ち所謂精神てふ方面あることを忘るべからず。精神てふ方面は内的なり、超越的なり。非物質的なり。之れが研究は、獨り自然科学の到底能くする所にあらず。然らば即ち之れを爲すの道如何。曰はく、内省的思索によりて、之が解釋を求むるの外あるなし。而して斯くの如きは正さに是れ哲學の力むべき範圍に屬す。故に曰く、生命を知悉する所以に於て、醫學と哲學との相須つや、兩輪の離るべからざるが如しと。

難する者さらに問ひて曰く、醫學と哲學との相關を論ずるや、己に之れを諒とす。然れども何が故に好みて歴史の舊を叙し、骨董を玩ぶの愚に倣ふかと。嗚呼是れ何等思はざるの甚しきや。學術發達の歴史的研究は、實に、其の學問の因りて起る所以を明かにし、思想變遷の歷程を釋ね、據りて以て之れが根本的解釋を期する上に於て、無比の價值を有するものにあらずや。恰も是れ發生學の研究を俟ちて、始めて、成體に於ける完全なる形體上の知識を望み得るが如し。況んや又、史的の考覈

學術發達の歴史的研究の價値。

は温古知新の點に就て、莫大なる利益あるに於てをや。羅馬は一日にして造らるゝものにあらず。凡そ一世の偉業は、如何に天才の出づるありと雖も、決して一朝一夕にして之れを爲し得るものにあらずして、其の由りて來たる所以の路を尋ねるときは、歴然として争ふべからざるものあるなり。

蒸汽機關は、實に現代文明の最大利器なり。而して之れが備を造りしは、ワット及びステイブンスンにあらずして、實に二千年の昔に於けるアレキサンドリアの數學者ヘロンなりしなり。進化論は近世學術界に於ける一大發揮たり。而かも此の思想は、耶蘇降誕前五百年、希臘の哲學者たるエムペドクレスに於て、其の源を發し、次でライブニッツよりシェリング、ヘーゲルを経て、終にダーキンに至りて、其の大成を告げしものと知らずや、原子説は輓近自然科學の唯一の基礎たり。而かも之れを創めしものは、希臘の自然哲學者たるロイクッポス及びデーモクリトスにして、近代に至りて、ダルトン之を敷衍ししものにあらずや。物質不滅の原則は、希臘の自然哲學者に於て、其の始を開き、勢力不滅の大原理は、デカルト及びライブニッツが、夙に之れを唱へたりしを見ずや。更に適切なる例を醫學に求めんか、種痘の發明は、實に萬古不朽の功績なり。而して是れ夙に、支那人、婆羅門教徒、土耳其人等の經

験によりて知り得たる知識にして、十八世紀の始に於て、在土耳其、英國公使の夫人によりて、其の方法を歐洲に傳へられ、英醫サットン兄弟の如きは、夙に之れが方法の改善に苦心し、終にヂェンナーに至りて大成せられたるものにあらずや。偉大なる思想は、世紀より世紀を通じて、隱約の間に生き延ぶるものなり。而して此の偉なる思想を捉へ、大なる問題を齎らして、是れを吾人に告ぐるものは、實に學術發達の歴史なり。獨り之れのみ止まらず、學術の歴史は、實に人類文化史の鏡なり。人間思想の發展は、如何なる順序を取りて表はれしか。智徳の進歩は如何なる原因に由來ししものなるか。凡そ這般の問題は、悉く此の鏡中に映出せらるゝものにして、吾人は之れによりて始めて、眞に「人なるもの」を理解することを得べし。

「生とは何ぞや」。是れ實に人類が有する最高にしてまた最後の問題たらすんばあらず。人世百般の事物、一として其の歸趣を茲に求めざるはなし。古哲の「己れを知るは最も大なるものを知るなり」と云へるは、蓋し這般の謂に外ならず。蓋しあらゆる生物の中、最も百尙なるものは即ち「人」なればなり。

予頑鈍自から拙らず、敢て身を科學の研究に委ねんと欲す。豈に好みて空論に趨り、實驗を忽にするものならんや。茲に此小著を草して、恩師の左右に獻せんとす

る所以のものは、試験管を握り、顯微鏡を窺ふの間、私かに、此の至高の問題を忘れざらんとする微衷を洩らさんと欲するのみ。

第二 總 論

(一)

人文發展
の三大
期。

ヘーゲル曰く、人文の發達に、三大時期を劃することを得べし。第一期は、最も原始的狀態にして、人類は、よく自然を感知すれど、未だ之れを思考するに至らず、自己を以て全く自然と融合せしめ、兩者の間に毫も乖離を認めざりし時となす。第二期に至りては、人類の叡智漸く發達するに従ひて、知識的慾望は頓に勃興し來り、嘗だに自然を感ずるのみならず、また之れを考ふるに至らしめ、自己と自然との間に劃然たる區別を設け、自己を以て大宇宙に對する小宇宙となし、自然と相對立し、相争闘し、早く其の束縛を脱せんとして、徒らに超自然的の幸福を憧憬し、茲に於てか懷疑・煩悶・失望相踵ぎて至る。第三期に及べば、始めて自然と自己との間に於ける真正なる關係を自覺し、自己は大宇宙に於ける主要なる一組成分にして、また其の法則によりて支配せらるゝ者なれば、寧ろ自然と融和するに如かずとなし、徐ろ

に自然界を観察して、其の大法則を發見せんと力むるに至ると。ヘーゲルの此の言果して眞なりや否や。未だ驟かに之れを斷定すること能はずは雖ども、人智發展の歷程に遡るとき、人をして、往々此の説に首肯せしむるものなきにあらず。試みに之れを太古の口碑に徴し、現今未開の人種に覈ふるに、彼等の有する唯一の知識は、殆んど自己でふ範圍に限ぎられ、而かも頗る淺薄粗糲なるものにして、如斯き幼稚なる知能は、未だ以て眞正に事物を比較攻究するの域に達せず、自己を推して直ちに自然界に及ぼし、以て之れを説明し得たりと満足す。されば一つの懷疑なく、一つの煩悶なく、彼等の眼には、咲く花も、彼等と同じく笑ふ如くに見ゆるなり。風に鳴る樹木も、何事をか囁ぐ如くに聴ゆなり。日も、月も、行く雲も、流るゝ水も、みな、彼等と同じく生命ある如く感ずるなり。一言にして盡くせば、彼等は自然を人化せずんば止まざるなり。(anthropopathetische Naturauffassung) 而も其の際詩人が自然を擬人 personifizieren するとは、全く其趣を異にし、彼等は眞に自然界を以て、自己と一樣なる活物と感ずるなり。之れを個人の發達に比すれば、正さに小兒の時期に相當す。夫の小兒が人形を遊ぶを見るに、之れを懐き、之れと語り、之れに食物を與ふるは、即ち自己を推して人形に及ぼし、之れを自己と同様なる活物となせる

代。詩。歌。時

代。懷。疑。時

による、吾人は假りに、此の時代を呼びて、詩歌時代と言ふことを得べし。人智漸く發達するにつれて。思索考慮の念願、頓に熾んとなると雖ども、其の知や、未だ以て、全事物を理解するに足らず。茲に於てか、懷疑煩悶遺る所を知らず、或は懼れ、或は驚き、或は憤り、漸く自己以上の力、即ち或は惡魔、或は神の存在を認め、凡てを、之れに託せんとするに至る。此の時期を名づけて、宗教時代、若しくは懷疑時代と言ふも妨なかるべし。之れを個人の發達に就て見るに、正さに少年並びに青年期にあり。さらに進めば、即ち成人に比すべきものにして、健全なる理性に基づきて、自然を観察し、自己と自然との關係を明かにし、確固たる論據によりて之れを理解せんとするに至る。吾人は之れに、理性時代なる名目を與ふることを得べし。醫學と哲學との關係を論ずるに際しては、須からく、上叙の思想開展の大綱を眼中に置かんことを要す。

代。理。性。時

(II)

歴史的物事の變遷は、必ずしも年代の區劃と相隨伴するものにあらず。史家は東羅馬帝國の滅亡を以て、古代と中世とを劃し、文藝復興期を以て、中世と近世とを

醫學史に於ける
近世の醫學史
の要

醫學と哲學

分つ。而して是れを哲學の歴史より云へば、古代と中世とを劃するものは、希臘哲學の衰亡、基督教義の勝利の結果として、「スコラ哲學の現出せる時代にして、次に、中世と近世とを界するものは、「スコラ哲學の頹廢と共に、健全なる新思潮の發現しし時にして、是れ正さに文藝復興期に一致す。さらに轉じて醫學の歴史に就きて見るに、ヒポクラテースによりて基を据ゑられし希臘醫學が、ガレーンに至り全盛の極に達せしまでを、古代とし、「アラビヤ人及び僧侶の手によりて腐敗せられたる希臘醫學が、文藝復活の氣運につれて、漸く改革の緒に就かんとしし時を以て、中世と近世との限界となす。斯く其の區劃の目標たるべき大變動が、醫學に於ても、哲學に於てもまた、殆んど時を同じうする所以のものは、決して、偶然にあらずして一に是れ、氣運の然らしむるに因るなり。殊に文藝復興期の如きは、政治上に、社會上に、思想上に、根本的改革の行はれし時代にして、史家は、之れを人類の再生と云ふ程なれば、萬般の事物に於て、此の時期を以て、中古と近世とを分つべき一段落と爲すべきは、固より當然のことに屬す。

近世紀に入るに及びては、哲學並びに自然科學、隨ひて、醫學もまた、頓に生氣を帯び來たりて、其の進歩發達實に驚くべく、幾多の學說、幾多の發見、相駢馳し、

近世紀に於ける醫學發展の要

相紹繼し、相駁ち、相應じ、千波萬波競ひ起つての觀あり。一々之れを敘説せんことは、固より、容易の業にあらず。以下、世紀に順ひて、之を臚列ししは、單に便宜を旨とせしのみ。然れども又、醫學並びに哲學に於て、各世紀に従て、之れに特色を與ふるものなきにあらず。先づ、醫學に就きて云はんには、十六世紀の特色は、舊說の破壊、解剖學の改造にして、之れを代表せる者は、バラツエルス、ベザール、即ち是れなり。十七世紀の特長は、生理學の驚くべき進歩にして、之れが代表者は、即ちハーバーなり。十八世紀に於ては、ハルラーの刺戟性說、次で生氣說、醫界を占有し、十九世紀に入りて、醫學は始めて各方面に於て大成せられたり。次ぎに哲學に就きて見るに、十六世紀の特色は、過渡の時代にして、新思想漸く舊思想を取りて代はらんとししも、未だ新哲學を組織するに至らざりしが、十七世紀に入るに及びて、近世哲學の根源たる二大潮流は涌出ししなり。其の一は、ベーコンによりて、新たに掲げ出だされたる歸納法にして、是によりて、哲學的思索は新研究方法を與へられ、獨斷を排して經驗を尊ぶの風潮を促がし、ロック、バークレー、ヒュームを経て、終に、一切の智識の成立を、感覺に基づきて得たる經驗によりて説かんとする、所謂經驗學派と稱せらるゝ一大系統を喚起し、而して其の根據地は、主として英國に

近世紀に於ける哲學發展の要

ありき、之れに對して他の一派は、デカルトによりて創められたる、唯理學派の大思潮にして、其の特色は、吾人の先天的に有せる理性に隨ひて、最も明瞭に、且つ判然と思考したるものを以て、攻究の出发点となし、漸次に究理の歩を進めしにあり。而して此の思想を紹述して、さらに獨創の見を立てたるものを、スピノツア、及びライブニツツの哲學となす。次ぎに十八世紀の思想界に於ける特殊なる現象は、啓發思潮の汪溢ししことは是れなり。啓發思潮とは、哲學が、自然科學に於ける長足の進歩と相提携して、是れ迄に得たる學術智識を、世に普及せしめんと力めしことを云ふ。而して之れが中心を形ち造りし者は、實に佛蘭西にして、其の當時極端なる唯物論盛んに唱導せられたりき。十八世紀の後半に於て、カント出で、近世哲學の二大潮流を綜合し、批判哲學を組織し、が、彼れ逝きて後、十九世紀に入りて、哲學は再び幾多の學派に分かれ、カント哲學に見えたる唯心的方面を主張しし唯心學派と、次に、専ら、其の實在的方面を敷衍しし實在主義と、並びに、新カント學派、唯物論、積極論等の各學派並び起るに至れり。

以上を醫學並びに哲學發展に於ける歷程の大綱となす。以下本論に入り、序を追ひて是れを細説せんと欲す。

第一編 古代に於ける醫學と哲學

第一章 太古

凡そ醫を學ぶや、自から順序あり。必ず先づ、解剖生理病理等の基礎醫學を修め、次で實地醫學の理論を了へ、始めて實地に移らざるべからず。然れども、之れを古代の醫學に徴するに、其の發達の序次、正に相反せり。是れ自然の趨勢にして、要求は發明の母なればなり、されば太古の人類にありては、醫術の濫觴は、早く已に其の影を表はしゝなるべし。然れども、醫學に至りては未だし、哲學に於けるも亦た然り。哲學思想の胚胎ししことは、夙に之れを、太古人類の間に見ることを得しならんも、眞純なる哲學に至りては、固より未だ是れあるなし。思ふに、太古人類の有しし心的内容は、頗る幼稚なる哲學的、科學的、將た宗教的思想の、相混淆せる、極めて原始的のものたりしや、疑ふべからず、然れども吾人はこの幼稚なる人類思想に於て、十分なる注意を拂はざるべからざる者あるを見る。何んぞや。他なし、太古人類に於て、早く已に精神てふ觀念の胚胎ししことにして、隨ひて二元論

起る特異なる運動、即ち搏動是れなり。而かも勞働若しくは恐怖に際しては、搏動及び呼吸の運動は、意志に關係なくして、著るしく亢進するを見ては、彼等は是等のものを以て、一個獨立せる生物にして身體に宿り居るものと考ふるは、最も見易き自然の趨勢なり。然り、彼れ等の幼稚なる繪圖、或は口碑に徴するに、彼等は呼吸氣を以て、往々飛翔せる鳥として、之れを言ひ表はし、ものさへありき。然り而して人一度死すれば如何、シルラアは歌ひて曰はく。

Seht, da sitzt er auf der Matte,
Aufrecht sitzt er da,
Mit dem An-tand, den er hatte,
Als er's Licht noch sah,
Doch, wo ist die Kraft der Fäuste,
Wo des Atems Hauch,
Der noch jüngst zum grossen Geiste
Blies der Pfeife Rauch?
Wo die Augen, falkehelle,
Die des Renniers Spur

Zählen auf des Grases Welle,
Auf dem Thau der Fuir?
Diese Schenkel, die behender
Fliehen durch den Schnee
Als der Hirsch, der Zwanzigender,
Als des Berges Reh!
Diese Arme, die den Bogen
Sp nnten streng und staff!
Seht, das Leben ist entflohen!
Seht sie hängen schlaff!

(Schiller, Nadowessiers Totenlied)

死が持ち來たしし變化の中、原始人類が感知し得る者は、唯五官の達し得る外形に止まるのみ、見よ、死者は其處に横はれり。其の顔、其の手、其の脚、依然として生時に異なるを見ず。而かも彼れ、今や動かす、語らず、視ず、聽かず——而して温なし。彼れは今や氷の如く冷やかとなれり。二六時中止むことなかりし搏動は、今や去りて其の影を留めず。呼吸の氣、何處にか行ける、寂として復た之れを見ず。

温、搏動、呼吸の消失は、是れ即ち原始人類が、生者と死者とを區別する最も主要なる標準なりき。

二元説の
製作者は
人間に注し
て其の注し
文主は即ち
「死」なり。

精神は最も
観念は五官
的物質的
なり。

温、搏動、呼吸なる三者は、各獨立せる生活體にして、體内に宿り、其の存在は生命を保ち、其の消失は、死を來たすものとせば、此の三者を以て、あらゆる生活現象の根源となし、生體を活かし、外界を感知し認識し意識するものとなすは、最も自然に起るべき考なり、如斯にして身體に對して、外より之れに宿り、之れを主宰すべき精神てふものゝ存在すとの觀念は、始めて醸成せられたるなり。されば身體に對して別に精神ありとなす二元説は、畢竟するに、人間自己の製作に係り、其の注文主は即ち「死」なり。

如斯にして醸成せられたる精神なるものが、極めて單純なる、五官的物質的のものにして、且つ同一體内に多數の精神を宿し得ることも亦た毫も怪むに足らず、されば、吾人が現今精神に對して有する觀念の如く、之を以て形以上の、非物質的のものにして、一個體に唯一のものとなすに至りしは、後世のことに屬し、上述せる如き精神に関する原始的觀念の進化によりて、成りしことを忘るべからず。今之れを、現今の未開人に就きて見るに、南亞弗利加の東部に住する「トンガ人」は、



ジェンナー (Edward Jenner)

一個體に
於ける多
数の精神。

勇氣てふ精神の坐位を、脾臓に歸せり。又合衆國ダコタ地方の、「アメリカ印度人は、犬の肝臓を食ふことによりて、犬の有する勇氣を自己體に取り入れ得るものと信ぜり。ニユギネアの土人は、智慧ありし人の腦に、石灰を塗りたるものを、自己の額に擦り込むことによりて、自己の智慧を増し能ふものとなせり。スマトラ島の西岸にあるニアス島の土人は、酋長の死なんとする時、其の嗣子は、父と同様なる勢力を得んがために、父の最後の呼吸氣を吸ひ取り、以て其の精神を受け継ぎたりとせり。其の外、亡者の腎臓の脂肪を食ふが如き、或は腐敗せし屍體の滲出液を飲むが如き、或は近親の者相寄りて、亡者の口角にある泡沫を、自個の身體に塗るが如き、何れもみな、これによりて、亡者の有しし精神を、自體に受容せんとするに外ならずして、一として彼等の有しし精神てふ觀念が、有形的、物質的、五官的のものたるの證左たらざるはなし。

多數の精神が同一個體內に宿るてふ考も亦た、現時の未開人に於て、屢見聞する所なり、一二の例を擧げんに、「エスキモヲ人は、呼吸の精神 Atemseele 及び影の精神 Schattenseeale なる二様の精神を認め、又印度の高原に住む「ホンド」Khond 種族は、四種の精神ある者と信じ、其の一は神に行きて恩恵を蒙り。其の二は特殊の種族に

行きて、之れが繼續を司るものにして、地上に止まり、其の三は、生時に犯しし罪惡の輕重に従ひて、種々なる靈魂輪廻 *Seelenwandelung* をなし。其の四は身體の解類と共に消滅に歸すべきものとなせり。

斯く原始人類は、多數の精神の存在を認めしも、後代にいたりて、自意識 *Selbstbewusstsein* なる者が、種々なる精神的行動の中心を形成し、多様の間に、自から統一あることを認め、之れに因て、精神を以て唯一不二なるものとなす考を起し、は、知識の進歩せし結果にして、一に思索に基くなり。然れども、太古に於ても、早く已に、多數の精神を統一せしめんとする傾向なきにあらず。已に述べし如く、始めは、搏動を以て、體內に宿れる一個の獨立せる精神と考へしが、其の所謂搏動精神 *Pulssele* の中、最も顯著なるものは、心臟の搏動なり。加之、偶、野獸を斃し、或は敵を殺して、其の胸腔を開くに際し、他の部に於ける搏動は、已に全く靜止せしにも關らず、心臟のみは、依然として搏動を繼續しつゝあるを見、且つ又、顚顚部並びに橈骨部に於ける搏動にありては、其の部位に於て、何等特殊なる形器の認むべきものなきに反して、心搏動の部位に於ては、特有なる肉塊として、心臟なる臓器の存在せるを見て、益、之れに重を置き、直ちに之れを以て精神の中樞と見做し、は、

多數精神を統一せしむる傾向

精神と心臓

當然のことにして、後代に及び、埃及人の如きもまた、心臟を以て感情及び思考の坐位となし、今日に至るも猶ほ、情の象徴として、心臟を適用するは、其の遼源實に茲に胚胎せり。

人智更に啓け、觀察力益、加はるにつれて、死の直接の原因は、心臟運動の靜止夫れ自身にあらずして、其の結果として起れる血行の杜絶に基くことを知り、茲に於てか血液に向ひて重大なる意味を附與し、血液精神 *Blutseele* なるものを認むるに至れり。ニユーギネア島の土人たる「バプア人の如きは、現時と雖も、猶ほ此の考を有す。また夫の有名なるモゼスの經典中には、肉を食ふことを許すも、血を食ふことを嚴禁して、「肉は食ふべし。然れども血は穢なり。肉と共に之れを取ること勿れ」と命令し、今日と雖も、猶太人は、依然として此の戒律を勵行しつゝあるが如きは、其の理由蓋し茲に基づくなり。

精神と血液

血液と共に、精神として、原始人類の間に主要なる地位を占むるは、呼吸氣なり。殊に、温かき呼吸氣が、外に出でて冷却し、凝集すると同じく、血液もまた、外に出づれば温氣を蒸散せしめ、凝固すれば、死血となる。されば、血液を活かして、體內を循環せしむる者は、此の温氣なり。而かも此の温氣なるものは、呼吸によりて

精神と呼
喚氣。

身體に出入する者なりとの考を起し、終に呼吸氣を以て唯一の精神と見做すに至るなり。夫の希臘語の「プシヘー」Psycheの如き、「プノイマ」Pneumaの如き、拉丁語の「アニマ」Animaの如き、其外、此の二つの母語より導かれたる諸國語に於て、並びに梵語、「ヘブリウ語」、「スレーブ語等に於て、何れもみな、精神なる語は、其の語源を、空氣、息、呼吸、若しくは蒸散性等の語に發せざるなきを見れば、如何に此の考察の眞に近きかを證するに足るべし。以下叙述せんとする如く、希臘醫學に於て、多大なる意義を有せる「プノイマ説」の如きも、畢竟、茲に胚胎ししや、また疑を容れず、且つまた、横隔膜を傷つければ、忽ち呼吸を止め、死を來たすを以て、古代に於て、此の膜を以て精神の坐位と考へしも、職として之れに因る。

體外に於
ける精

以上述べし所によりて、原始時代の人類に在りては、精神なるものは獨立して身體内に宿り(二元説)之れによりて生命が成立し、精神去れば忽ち死を來たすものなること、明かとなれり。次に起るべき疑問は、然らば即ち體外に去りし精神は、よく獨立して存在し能ふか否か。若し果して生存し能ふとせば、如何なる形を取りて表はるゝかの問題なり。然り而して精神が身體を離れて生長し得るものと考に、大なる證據を與ふる者は、夢及び夢魘 *Alpdruck* 即ち是れなり。身體は正さしく牀上

靈魂不滅
説。靈魂の遊
行。

に靜臥せるにも關らず、夢は時空の束縛を脱却して、瞬間にして千里の遠きに遊び、或は嘗て見ざりし山川を見、或は已に死したる友人と面晤す。茲に於てか、益、精神の獨立して存在することの考を固うし、殊に、亡者と再び相語るが如きに至りては、死者の形骸は已に地に歸するも、魂魄は長へに世に止まり、時に相逢ふものと説明するの外なきを以て、茲に靈魂不滅説を出だすなり。已に靈魂を以て不滅なるものとせば、其の不滅なる靈魂の結末を附けざるべからず。茲に於てか靈魂の遊行 *Seelenswanderung* 若くは靈魂輪廻 *Seelenwanderung* の説を生む。凡そ是等思想の由りて來たる所、歴々として之を掌上に指すことを得べし。然り而して死者の靈魂の遊行せるものは、一種の魔力を有し、或は慶事をなし、或は災厄を與ふ。就中、亡靈は最も屢、疾病の原因たるものにして、未開人の醫者の務とする所は、一言にして盡くせば、此の亡靈を追ひ拂ふにあり。殊に變死者の靈魂が、他人の身體に憑きて、疾病を起さしむとの迷信は、今日文化人の間に於ても猶、一般に信ぜらるゝ所なり。*ゴロン* 諸島に於ては、捕靈網 *Seelenfänger* なる物あり。是れは、蹄狀をなせる數多の網繩にして、之れを、豫め敵の通行路に沿ひたる樹枝に懸け置きて、敵若し此の網を見るときは、其精神は此の網によりて捉へられ、重き病に罹ると信ぜらる。

靈魂輪廻

靈魂輪廻の説は、佛教、ブラマ教、ジャイナ教等何れも之れを主張し、亡靈が罪業の如何によりて、種々なる動物に化生すとせり。埃及人の如きは、三千年を経て、始めて、人の亡靈が再び人間として生れ出づることを得る者となせり。加之印度人は、人間の亡靈が植物に化生することを唱へたりしが、夫の生體變遷のことを論じて、進化説の基を窺めたる希臘の自然哲學者なる、エムペドクレースの如きもまた、之れと同様なる考を云ひ表はせり。

已に述べし如く、原始人類の精神てふものは、物質的・五官的のものなるが、果して然らば、體外に於て遊行せる精神は、如何なる形状を取りて現はるゝかと云ふに、種々なる生物無生物を以て之れに擬し、其の形状や一様ならず。然れども、要するに精神を以て、曳搖せる若くは飛行せる者と見做しし點に於ては、一致せるが如し。されば或は雲の行くを見て、之れを亡者の靈の飛び去るものとなし、或は種々の蟲類、殊に蝶及び鳥類を以て、最も屢生靈の形を顯せるものとなせり。夫の精神を意味せる希臘の「プンヘー」なる女神が、處女にして、背に蝶翅を有するものとして表はさるゝは、蓋し之れに由來せるなり。

以上は太古人類が有しし、極めて原始的なる精神てふ觀念の梗概なり。而して是

體外に於ける精神の形状

れ實に彼等が心的内容の殆んど凡てを占む。吾人は此の觀念に於て、獨り、醫學及び哲學の見地よりして、興味ある觀察をなし得るのみならず、宗教、道德、藝術等、人類の有するあらゆる心的方面は、一に此の混沌たる思想の中より胚胎し來たれるを見る。

『生とは何ぞや』てふ問題に對して、古代文化民族たる印度人及び埃及人等の有しし考は、何れも痛く宗教的に傾きたる點に於て、大に注目すべきことなきに非ざるも、要たるに又た殆んど上述の二元説の外に出づる能はざりしを以て、茲に暫らく之れを省略し、直ちに希臘時代に移り行かんと欲す。

第二章 古代希臘

希臘哲學
と醫學との
關係。

古代希臘に於ける醫學は、其の始、殆んど全く自然哲學者 Naturphilosophen の手に其の媒姆を託しつゝありしなり。蓋し自然哲學者が研究の對象としし所は、所謂宇宙學 Kosmologie なる者にして、大宇宙は如何にして成り立ちしか、如何にあるか、將た、如何に成り行くべきかの大問題たりしなり。されば宇宙に於ける最も顯著なる現象の一なる、「生命」てふものに對しては、熱心なる研究的態度を取り、獨り生理學上の問題のみならず、一般醫術に對してもまた、醫學が未だ獨立し得る迄に進歩せざりし以前にありては、哲學は常に此の問題を捉へ來たりて、己れが研究の領域となし、人體の生成發育は勿論、生活機能の常態及び其の障礙、氣候食物の影響等の問題に至る迄、一に自然哲學者を須ちて始めて其の解決を見る程なりき。ピッポクラリス出で、初めて醫學を哲學より分離し、之れに獨立の基礎を置きたりと雖も、醫學に於ける根本的思想は、依然として之れを哲學に仰ぎたりしなり。されば

希臘哲學
に於ける
四時期。物質研究
時代。人事考究
時代。

經驗を重んじて、理論を輕んずること、ヒッポクラテースの如きものに於てすらも、猶ほ且つ、有名なる彼れが盟詞中に、「醫家にして同時に哲學者たる者こそ、眞に神に近しとや言ふべけれ」 Denn ein Arzt, der zugleich Philosoph ist, steht den Göttern gleich. と説き、アリストテレイスは、「自然界の研究者は、又人體の健康及び疾病につきて、根本的の知識を有せざるべからず」と唱へたり。以て一般の趨勢を察するに足るべし。希臘の哲學史に四期を區別することを得。第一期は、主として自然界を以て、其の研究の目的としし時にして、其の注意は、主として客觀的なる物質界の上に注がれ、其の生成、轉化及び消滅を解決せんとするにありき。是れ即ち自然哲學者の出でし時代にして、吾人は之れを其の研究の對象に従ひて、物質界研究時代と名づくることを得べし。史家或は此の時代の哲學を呼びて、ソークラテース以前の哲學とも云ふ。第二期は精神的と物質的、形以上と形以下との區別、漸く明かとなり來りて、哲學研究の方針は、一轉して人事の上に向ひ、主として倫理道德等心性の方面に傾き、自然哲學者が、徒らに理論に馳せたるに反して、人生の實際方面に著目するに至れり。是れ即ちソフィスト學徒及びソークラテースの出でたる時代にして、之れを第一期に對して人事考究の時代と稱することを得べし。第三期は、希臘哲學

組織時代

正さに其の全盛の頂に達しし時にして、プラトーン及びアリストテレイス等、相踵ぎて出で、一大哲學系統を組織し、以て自然界の研究倫理道德の考察は言ふも更なり、尙ほ進みて論理、心理、美術、法律、社會學等、あらゆる方面に一貫せる基礎を造りたる時代にして、之を組織時代と云ふことを得べし。第四期は、希臘哲學衰頹滅亡の時代にして、希臘に於ける獨特の自治的社會制度は、アレキサンダー大王の諸都市を征服せし爲、根本的に轉覆せられ、希臘人民は、今や公の舞臺に立ちて活動するの自由を失ひ、爲に人心の萎微を來たし、其の結果は、著々として、此の期の哲學に於て表はれ來たれり。即ち人々の眼光、唯だ「自己」の外に出づる能はずして、敢て他を望むの勇氣なく、加ふるに、世態の變遷無常を觀じて、他の頼むべからざるを覺り、ひたぶるに、安心立命の地を、自己の心中に求めんとするに至り、茲に主として徳性を磨きて、其の目的を遂げんとし、所謂倫理時代なるものを起せり。而して其の代表者はストア學派なりき。さらに一轉して、宗教によりて、圓滿具足の境地に達せんとし、加ふるにアレキサンダー大王の遠征によりて、希臘文明を四方に傳播ししと同時に、東方の文物をも希臘に齎し歸り、希臘哲學は猶太の宗教思想によりて痛く影響を蒙り、人心甚だしく宗教的に傾き、哲學も亦た、漸く宗

倫理時代
及
宗教時代

教の奴隸となり終はらんとするの傾向を呈せり、是れ即ち宗教時代にして、所謂新プラトーン學派並びに其の先驅者は、如斯にして生れ出でたるなり。史家此の第四期を呼びて、アリストテレイス以後の哲學と稱す。而して其の行はれし年代は、大體に於て羅馬時代に相當す。

以下希臘に於ける醫學と哲學を敘するに際して、自然哲學者時代、ヒツポクラテース時代、ヒツポクラテース以後の時代、ガレン時代なる別を立てしは、暫く醫學發展の歷程を語るに便なる方法に従ひしのみ。而して是等の各時期を通じて、中世紀に至るの間、殆んど二千年の久しき、時に従ひ處によりて盛衰あり、政治的局面の變化に伴ひし文化中心の移動によりて、哲學及び醫學も其の根據地を變遷せりと雖も、而かも其の長日月間、一貫して能く命脈を保ちしものは、實に希臘醫學及び希臘哲學なりしなり。

希臘醫學
及
希臘哲學
の
命脈

第一 自然哲學者時代

已に述べたるが如く、自然哲學者の本領とせし所は大宇宙に於ける客觀的現象の

研究にありしが、其の思想の偉大豊富なる點に於て、將た其の世界觀中に、現今に於ける物理學化學の根本問題、及び生物進化論等の如き、最も進歩せる科學的思想を、早くも已に豫言せし點に於て、大に注目し値すべきものとす。而して自然哲學を、年代の推移と共に、思想の發展しし所に從ひて、種々の學派に區別す。以下敘を追ひて、此れ等各派の人々が、生命てふ問題に對して表はせる思想の一斑を述べんと欲す。

ミレトス學派

此の學派は、希臘哲學最古のものにして、其の主眼とする所は、宇宙形成の本原は、一物にして、其のものゝ變化によりて、萬物化生せしものと見て、其の本原たる唯一物は、果して何物なりしかを確定せんとするにあり。而して其の際、彼等の思索は、未だ比較的幼稚なりしを以て、理論に於て其の本原を追跡するよりも、寧ろ單に、五官の到達し得べき範圍内に於て知り得る諸物の中、各種の状態に應じて最もよく變化し易きもの、例へば水の如き、空氣の如きものに於て、其の本原を求めんとせり、

ミレトス學派の本原

タールレス

タールレス (Thales von Milet, 紀元前六二四……五四三) は、水を以て唯一本原と見做

アナキシマンドロ

の力、即ち神を宿し、磁石の鐵を引くは、此の靈氣に基くと云へり。タールレスの友人にして、日時計の發明者なる、アナキシマンドロス (Anaximandros) は、以爲らく、水の如き已に一定の性質と形とを取りたるものを以て、萬物の根源となすは、大に信じがたし。水は所詮水たるを免れず。萬物の根源たるべきものは、凡てを其の中に含有せるものならざるべからず。茲に於てか、彼れは、「アパイロン」(ἀπειρον) 際限なしと云ふ意義なる、茫漠無邊際に瀰漫せる、且つ名狀すべからざるものありとなし、之を以て萬物成生の本原とせり。「アパイロン」が、先づ自己の運動によりて、其の内部より、寒熱及び乾濕なる、互に相反對せるものを分離し出だし、其の寒なるものが、乾濕二物と結合して、宇宙の中心即ち圓壙狀の大地を造成し、又た熱せるものは昇りて天體をなす。而して太陽の熱によりて、地上に於て水陸を分ち、次で水泥中より最初の動物を生ず。人類も亦た、始めは、魚に似たる形を具へ、水中に遊遊せしものなりと云へり。彼れの弟子たるアナキシメネース (Anaximenes von Milet) は、師説によるときは、如何にして斯の無際限なる「アパイロン」より、萬物が化生せ

アナキシメネース

しかとの、困難なる問題起るべきを以て、再びタールスの見地に立ち歸りて、凡てを包圍せる空氣、即ち「*πνοίαι*」*πνεύμα*を以て、宇宙の本源となし、其の濃厚と稀薄とによりて、萬象を起すとせり。即ち火は空氣の薄くなるより生じ、之に反して空氣濃くなれば風となり、さらに凝りて雲を起し、尙ほ進めば水を生ず。水よりさらに地を生じ、岩石植物もみな如斯にして成る。而して動物を活す所の精神も亦た實に空氣なり。何んとなれば、呼吸止めば動物は直ちに死するが故なり。彼れが空氣を以て宇宙生成の本原とせる第一の理由は、蓋し茲に基づきしならん。(如何に原始時代の精神に關する思想が、茲に再び復活せられしかを見よ。)

ヒッポン (Hippon 紀元前約五五〇)の唱へたる醫學説も亦、恐らくタールス若しくはアナキシメネースの所論に基づきしものゝ如し。彼れ曰く、精液の濕氣凝りて精神を生ず。病は濕氣の過不及より起るものにして、老人の身體乾枯し、遲鈍となるも全く之れが爲なり。婦人もまた精液を分泌す、されど、こは胎兒を造る爲に役立つものにあらず。胎兒に於ては、最初に頭部、最後に爪を生じ、胎兒の形成に要する日數は六十日乃至四十日を通常とすれど、時として四ヶ月に及ぶことありとせり。

ピタゴラス學派 Die Pythagoräer

ピタゴラス
學派の本
館

其の主唱者はピタゴラス (Pythagoras aus Samos. 紀元前五八四—五〇〇)なり。此の學派の所説は、著るしく宗教的に傾けると、且つ數に重を置きしとを以て特色となす。要するに、數は萬物の根源なりと云ふにあり。恐らく彼等の數なる者は、空間を占むる點と同一視すべき者にして、今日吾人の唱ふる抽象的の數にはあざりしが如し。彼等は生靈の不死を信じて、靈魂輪廻の説を唱へ、肉體を以て精神の牢獄なりとなして、之れを賤みたり。

ピタゴラスは、自から醫術を施したり。彼は動物體の構成及び生殖のことを研究し、あらゆる動物體は精液より形成せらるゝものにして、腐敗せる物質より自然に發生することなしと云へり。是れ實に後世に於て一大問題となりたる、自然發生説に向ひて、最も早く否定の斷案を下ししものと云はざるべからず。

後世彼れの學説を紹介したるものを、ピタゴラス學徒と稱し、學派と云はんよりも、寧ろ一種の教義的團體の如き觀を呈したり。而して其の目的とする所は、畢竟するに、神祕主義と論理主義とを結合して、實生活を指導せんとするに在りき。

エレア學派 Die Eleaten

エレア學派の本學

ミレイトス學派は、單に五官の到達すべき範圍に於て、萬象の本原を求め、以て一元説を唱へ、ピタゴラス學徒は、數を以て其の根本となし、而かも五官の達すべき現象界を以て出立點となししが、茲にエレア學派の出づるありて、始めて雜多の現象界より、之れに共通普汎なる抽象的概念を造り、之れを以て萬物の本體となせり。其の抽象的觀念とは、「有」Seinと云ふことにてありき。

クセノフアス

此學説の創製者は、通常クセノフアネース (Xenophanes, 紀元前五七〇—四七〇) と稱せらるれど、明瞭に此の主義を唱へ出だししは、バルメニデース (Parmenides, 紀元前約五一〇年に生る) なり。只だ前者は彼れの宗教的觀念と、ミレイトス學派の一元説とを結び附けて、萬有即一、是れ神なり、神は永久不變不動なりと唱へ、以てエレア學派の先驅をなししのみ。彼れは空氣を以て精神なりと云へり。

バルメニデースの哲學

バルメニデースは、萬物に於て其の變化差別の相を除き、終に「有」と云ふことこそ、萬物をして存在せしむる所以の本性なれと説きたり。彼れ曰はく、「非有なるものは有ることなし、何んとなれば、「非有即ち無きものは考ふべからざればなり。されば

萬物を實に在せしむるものは「有」なり。

物の存在する所以は必ず「有」なり。「有」はまた無始無終なり。何んとなれば、「無」より「有」を生ずることなく、また「有」が「無」となることなればなり。「有」にはまた過去なく將來なし。何んとなれば、曾てありしものは有るものにあらず。また將さにあらんとするものも、有るものに非ざればなり。「有」はまた、變化なくして一切平等なり。何んとなれば、「有」と云ふことの外に、「有」をして「有」たらしむるものなければなり。斯くて彼れは、物體の本性たるべき「有」は、無始無終、不生不滅、平等不變のものとなし、個々物に於て、吾人が日常生滅轉化を認むるは、畢竟感覺の誤謬にして、理性より見れば、唯一、平等、不變、不滅なる「有」なるものが、即ち實在を意味するものとなせり。是れ實にデカルト哲學の先驅とも稱すべきものなり。乃ち彼れによりて、始めて感性 Sinne と理性 Vernunft との區別が明瞭に言ひ出だされたるなり。如斯くにして彼れは、ミレイトス學派が、萬物は一原物質の變化によりて成れりと説きしに反對して、一なるものが變化すべき理なし、不變化、不生滅のもの。是れ即ち萬有の本體にして、物をして物たらしめ、實在せしむる所以なりと説きたる所、吾人は彼れに於て、哲學思想の一大進境を認めざるを得ず。

バルメニデースによれば、人間は其の始め泥土中より生成せし物なり。發生の際、

「有」は無始無終、不生不滅、平等なり。

バルメニデースの發生説

男性の胎兒は右の睾丸より出で、子宮の右半に宿り。女性兒は之れに反す。また生殖の際、男性の精液過多なれば男性。之れに反すれば、女性の胎兒を造るものとなせり。

上記のエレア學説を紹繼して、更に之れを大成せしは、パルメニデースの弟子たるツエノン Zenon 及びメリッソス Melissos なり。

ヘーラクライトス Herakleitos

(紀元前約五〇〇)

ヘーラクライトス學派は、一本原物の變化によりて、萬物化生すと説きたれど、さらに進みて、然らば如何にして一なるものが、變化して萬物を生ずるかに就きては、十分なる説明を與へざりしなり。而してエレア學派に於ては、ミレイトス派の一元説を容れたれど、其の一なる物が、變化して、よく萬物を生ずとの説を否み、物をして實在たらしむる所以の本性は、そが一にして、而かも不變化、不生滅なる點にありとし、事物に於て、轉化生滅ありとなすは、是れ吾人感覺の誤謬に基づく物とせしが、ヘーラクライトス出で、世界に表はるゝ變轉生滅を、誤謬にあらずして實

ヘーラク
ライトス
哲學の特
色。

際と認め、且つ一面に於てはミレイトス以來の一元説を許容し、此の兩方面を調和して、一元にして而かもよく萬物を化生し、百般の變轉を現はす所以を述べ、以て先きにミレイトス學派の言ふべくして云ひ得ざりし所を補へり。

萬物流轉
イ。

彼れが所説の中心をなす者は、「パンタライ」 *πανταλαι* 即ち「萬物は絶えず化成流轉す」 *Alle Dinge sind in stetem Werden begriffen* と云ふ思想なり。即ち萬物は絶えず一方に於て生成せられつゝ、同時に一方に於ては滅却せられつゝあるなり。若し不變不動のものあれば、そは吾人の誤謬に基づきて、單に外觀上然か見ゆるのみ。活眼を以て見れば、是れ亦實は變遷流轉しつゝあるなり。其の關係は、恰も水を盛りたる桶に、一方より水を入れ、他方より水を出だすとき、若し注入する水の量と、射出する水の量とが相等しければ、槽中に於ける水準は終始異なることなく、一見すれば毫も變轉せざるが如くなると同じ。然れども此の際と雖ども、桶中の水は、絶えず新舊相代謝しつゝあるなり。斯く流轉しつゝあればこそ、物をして物たらしめ、活動を起さしむるなり。

因轉化の原

然らば即、如斯基絶えざる流轉は、如何にして起るか。彼れは之れに答へて曰く、萬物に於ては、反對せるもの互に結合せらる。即ち生ある者は必ず死あり。若き者

は必ず老ゆ。斯くして事物には、常に反對の傾向相互に作用し、絶えず相争ひつゝある者なるが故に、茲に變化を生ず。已に變化を起す、茲に於てか、一原物質よりして、能く萬物を生ずることを得るなり。また事物に於て、斯く反對の傾向互に作用せるにも關らず、一見之れが外に表はれざる場合あるは、恰も張りたる弓の如く、相反せる作用(力)の釣り合ひに基づく。彼れは之を、「隠れたる釣り合ひ」と名づけ、宇宙間の調和は、一に之れによりて保たるゝものとせり。

然らば即ち一原物質とは果して何ぞ。彼れは之を「火」に求めたり。夫の焰を見よ。絶えず變轉して、須臾も止む時なし。物來たれば皆な變じて火となり、再び煙となりて飛び去るにあらずや。吾人は茲に最も明かに、生滅流轉の状を見ることを得べし。火にして熱を失へば水となり、水さらに熱を失へば茲に地を造る。之に反して地、熱を得れば水となり、さらに進みて火となる。如斯くにして、萬物常に化成變轉するなり。

世界は神の創造せしものにあらず。また人の手に成りしものに非ずして、無始無終の永久なる火なるのみ、此の火や、彼處に消へ、此處に點じ、種々の階段を経て、絶えず相流轉す。されば、世界は一つの調和せる、且つ必然的に起れる、生成と滅

萬物の本
源は火な
り。

世界の現
象は必然
的機械的
に起る。

靈魂説。

却との轉換に外ならず。

人並びに動物に於ける靈魂は、火氣より成立して大空に瀰蔓せる生氣 *Lebensluft* なるものが、體に入りて成る。人死する時は、生氣は體より飛散して、再び舊の生氣と合一す。されば靈魂は、火氣多くして、乾燥せる程、愈完備し、從ひて叡知高し。之れに反して、水分多くして、火氣少なき程益々遲鈍なり。又たよく活動を保持する爲には、絶えず五官及び呼吸の作用によりて、外界に於ける光線及び空氣中より、生氣を體内に攝取せざるべからず。而かも吾人の五官なるものは、極めて不完全にして、到底正確なる認識作用を営み得るものにあらず。されば、人生は夢幻の如く、將た悲むべきものなり。何んとなれば、出産は必ず死滅を伴ふものなればなり。斯く吾人は果敢なきものなれば、せめては徳を磨き法に遵ひ、成るべく圓滿なる生涯を終へんことを力むべしと説けり。

吾人は彼れが所論中に、物みな反對の傾向に趨ると云ひ、絶えず流轉すと説きたる點に於て、後代に於けるヘーゲル哲學の影の、ほの見ゆるを認むれど、ヘーゲルは、變轉を説きて、寧ろ厭世觀に傾き、ヘーゲルは變遷即ち進化と論じて、樂天觀に入れり。

エムペドクレース Empedokles.

(紀元前四九五—四三五)

エムペドクレースの哲學の特色。

已述の如く、エレア學派は、萬物一原物質より生ずるものと見て、一なるものゝ變化して、差別を生ずべき理なし、物をして實在たらしむる以所は、即ち其の平等、不變、不滅なる點にあり、吾人が日常現象界に於て轉化差別を見るは、畢竟誤謬に基づくものと説き、ヘーラクライトスは、一元説を採用しつゝ、而かもエレア學派と正反對の所説を唱へ、物の本性は、それが絶えず變化流轉する點にあり、變化なしと見ゆる場合こそ、實は誤謬にして、萬物時々刻々に轉化生滅し、一なる物より千種萬態の現象を起す所以を説明せり。此の相容れざる二説を、巧みに調和して、一方には、不變不滅なる元素の存在を許容し、且つ一方に於ては、生滅、變化、流轉の現象を、誤謬にあらずして、事實と認め、茲に従來の一元論に代ふるに、多元論を以てし、宇宙間の萬象を説明せんとししもの、是れ實に嶄新卓拔なるエムペドクレースの哲學思想となす。

彼れ以爲らく、有より無を生じ、無より有を生ずることなし。換言すれば、世に

元素説の鼻祖。

絶對の生滅なるものあるべき理なしと主張せし、パルメニデース(エレア學派の創立者)の説は、眞理なり。然れども、實世界に於て如實に見らるゝ、生滅流轉の現象を、悉く皆吾人が感覺の誤謬に歸し、全然差別變化を否むに至りては、エレア學派の説く所、餘りに牽強に陥らざるなきか。吾人は、宇宙形成の根本たる原物質の、不變不滅を承認しつゝも、猶ほ宇宙に於ける差別變化の現象を、事實として説明すべき道を見出し得るにあらずや。然らば則ち、其の道如何。曰はく、不變、不滅なる原物質を、一種と見ずして、多種と見て、是等の原物質の離合集散によりて、萬物を形成すと考ふことは是れなり。乃ち縱令ひ宇宙形成の原物質なるものは、終始依然として、不生滅、不變化のものたりとするも、是等のものが、絶えず相集合し、或は相分離すること、換言すれば、其の組み合わせ方の如何によりて、世界に於けるあらゆる變化差別の現象を遺憾なく説明し得るなり。斯くして、彼れによりて、今日の「元素」Elementeに於てふ觀念、即ち不變不滅の物にして、其の離合によりて、萬物を形

地水火風は「萬物の根」

ち造るものなりとの觀念は、始めて唱へ出だされたるなり。

彼は地水火風佛説の所謂四大の説と全然暗合すの四つを以て、上叙の如き性質を具有せる原物質と見做し、之に「萬物の根」なる名稱を與へたり。是等の元素は、本

來不變不滅のものなるが故に、絶對的に云へば 宇宙間に存する物質には、生滅あることなし。(最近科學の基礎をなせる物質不滅則に關する根本の思想が、早くも已にバルメニデースによりて唱へられ、次でエムベドクレースに至りて明瞭に云ひ表はされたるを見るなり。)然れども、元素の集合によりて一物體が生成せらるゝ時は、人は之れを「生」と云ひ。之れに反して、一物體が元素に歸する時は、人は之れを「滅」と云ふなり。また其の生成解類に關與する元素の種類、及び量の如何によりて、萬般の變化差別を現するなり。

然らば則ち、四元素をして斯く離合集散せしむる以所は、果して那邊に存するか。彼れは茲に於てか、愛憎の二力を提げ來たりて、其の原因となせり。愛は即ち元素をして相親和し牽引せしむるものにして、憎は之れを争闘し反撥せしむるものなり。而して、茲に彼れは、ヘーラクライトスの説を採用して、此の愛憎の二力によりて、四種の元素が、絶えず集合し、或は離散しつゝ全宇宙を形成するものとなせり。此れを譬ふれば、元素は顔料なり。愛憎二力は畫工なり。而して此の兩者を待ちて描き出ださるゝ多様多種なる繪畫は、即ち宇宙の事象なり。

然り而して、此の愛憎の二力が、如何なる有様に於て元素に作用するかと云ふに、

愛と憎。

如何なる方法に於て一物に於て他物に及ぼす影響をば

同種類のもの相牽引し、異種類のもの互に反撥す。蓋し元素が相集合するや、單に機械的に混和する者にして、其の方法たるや、一物の竅孔に、他物の微小體が飛び來りて、之れに摻入するにあり。而して同種類の物にありては、其れより發する微小體の太さと、竅孔の太さとがよく適合するを以て、容易に相混和するによる。また鐵と磁石との如く、距りたるものゝ相牽くは、鐵よりも、また磁石よりも、相互に微小體を發出し、之れが自他の竅孔に入りて、漸次相接近するものとなせり。凡て如斯くにして一物が他物に影響を及ぼし得るものとす。

斯く四元素と愛憎の二力とによりて、萬物茲に成る。其の生成の狀如何と云ふに、先づ憎によりて離散せし物界の中央に、愛の力が入り來りて、萬物を吸引し、茲に大旋渦を起し、最初に、空氣と「エーテル」とを造り、後者よりさらに火を生じ、次に地を生じ、さらに旋渦運動のために、之れより水を分ち出だして海を造り、最後に、植物、動物、及び人類を造る。而して其の際、最初に不完全なるものが造られ、之れが愛の力によりて、相團結して、漸次完全なる高等のものに移り行きしなり。太初には、水泥中より、手足等の如き、體の個々の部分を生じ、是等のものが漸次に相ひ寄りて、種々奇怪なる生物を造りしも、其の中、生存に適する物のみ活き残り

エムベドクレースの創造説。

進化論の發端。

て、他は消失し、以て今日の如き生物を見ると説けり。是れ實に最近進化論の骨子をなせる、生體の變遷、及び自然淘汰なる二大論據を、大體に於て已に唱へ出ししものと云ふべし。彼れはまた大に解剖學を研究し、内耳を發見せり。其の他彼れは羽毛と魚鱗とを比し、植物に於ける結實と、動物に於ける生産とを較べ、比較形體學の端緒を開きたり。

彼れによれば、男女共に精液を存す。女性は寒にして濕、男性は暖にして乾なり。男女何れかの精液の多きに從ひて、胎兒の性は定めらるゝなり。また妊婦にして冷にして且つ水分富める食物を多量に攝取する時は、女兒を産む。而して子供の兩親に類似するは一に遺傳に基く。子宮内に於て、胎兒が造らるゝ際には、最初に心臓を生じ、最後に爪及び齒を生ず。全體の形成には四十日を要し、出産迄には、七乃至十ヶ月を算す。體の全面には竅孔ありて、呼吸は獨り咽喉に於て爲さるゝのみならず。又此竅孔によりて營まる。即ち血液が外表より内部に向ひて、一進一退するにつれて、空氣は喉咽及び竅孔より體内に入し、呼氣若しくは吸氣を生ずるなり。血液は數多の竅孔若しくは管を通じて全身を循環す。靈魂は血中に存在せり。(吾人は茲にまた、原始人類に於ける、血液精神の思想が、再び其の面影を現はせるを見る。)

エムペドクレスの生殖論。
呼吸論。

知覺論。

身體は竅孔によりて、同種類ものを牽引せんとする性あり。之によりて彼れは食物の吸收、及びに感覺の成立を説明せんとせり。例へば、光線來る時は、眼に於ては火性及び水性の微分子之れを迎へて、茲に視覺を起し。また音響は迷路によりて感ぜらるゝものなるが、其の際、竅孔を通じて内部に入り得るか否かは、一つに音の性質の如何による。斯く彼れによれば、感覺は同種類の物質が、相迎へて逢着する際に起るものなるが故に、獨り動物のみならず、植物もまた感覺作用を有するものとせり。

體質及び靈魂輪廻説。

彼によれば、宇宙間にある元素は、絶えず集合離散して、此れより彼れに流轉するものなるが故に、現に人體をなせる物質も、曾ては他の動植物體の一部分を形成せしことあるべく、隨ひて各人は、例へば「我は曾て鳥たりし」と云ひ能ふものとせり。且つまた靈魂輪廻の説を信じたり。

要するに彼れの所説は、從來唯だ一元論のみを主張せし自然哲學に於て、早くも已に多元論を唱へ、以て古代に於ける哲學思潮に一大轉化を與へ、延いてアナクサゴラスよりアトーム論者を出すに至りし點に於て、大に注意すべき價值ありとなす。

アナクサゴラス Anaxagoras.

(紀元前五〇〇—四一八)

アナクサゴラスの哲學綱領

エムペドクレースは、不變不滅なる四元素の存在を認め、此の離合集散によりて、萬象を生ずと説きたりしも、果して然らば、如何にして、此の四元素の離合集散が、無数の差別ある事象を生起するかに就きては、其の論ずる所未だ精細ならざる者ありしが、此の點に於て、さらに一步を進めて、稍、異りたる見地よりして、萬物生成の理法を明瞭に説明せんとせし者、是れ即ちアナクサゴラスの哲學なり。

彼れも亦、一面に於ては、エレア學派の唱へし如く、絶對の意義に於ける生滅なるもの、並びに非有なるもの、世界にあるべからざることを唱へ、一面に於ては、轉化差別の現象を以て、吾人の感覺の誤謬による者にあらずして、眞の事實と認め、此の兩者を、一原則の上より説明せんとしし點に於ては、エムペドクレースと其の根本的思想を同うせり。然れどもエムペドクレースが、僅かに四元素を認め、此等のもものが、單に牽引反撥の二力によりて、機械的に集合し、或は離散して、萬物を生ずと説きたる點に於て、彼れは未だ満足せずして、四種の元素に代ふるに、無數

の元素を以てし、而かも是等のものが、單に機械的動力に隨ひて集散するに非ずして、全智ある超絶的の或る動力の下に、支配せらるゝものとなせり。彼れ曰く、己に物質に離合集散の運動を與ふるからは、それは必ずや、物質以外に立ちて、之を支配する者たらざるべからず。況んや宇宙間の萬物に於て見らるゝが如き、規律ある、目的に叶ひたる運動に至りては、到底、之れを簡單なる機械的作用の結果として見るべからずと。

彼れ以爲らく、無より有を生ずることなし。然らば即ち宇宙間に現はるゝ千種萬別なる事物は、最初より各自之れに相當せる千種萬別の原物質ありて、之れより形成せられたるものに外ならざるべし。彼れは斯く相互に性質を異にせる、無数の原物質、即ち元素を呼びて、種子 *σπερματα* 或は *χρηματα* と云へり。是等の種子は如何に之れを分割し、又た集合するも毫も性質を變ぜず。例へば黄金の塊は如何に之れを分割するも、依然黄金の性質を保ち、銀塊は又た、依然として銀の性状を失はざる所以のものは、夫々黄金の種子、銀の種子ありて、之れが集合によりて一塊を成せるが故なり。而して是等無数の性質を異にせる種子は、太初以來依然として存在せる不滅不變の微小體にして、無限に分割し得らるゝものとなせり。

種子説

ヌウス

是れ等夫々特殊の性質を具有せる無數の種子は、宇宙創造の始に於ては、雜然として相ひ混淆し、隨ひて其の特性は互に打ち消され、宇宙は眞に混沌たる一塊に過ぎずして、一つとして定相を具ふるものあらざりしが、茲に一の超絶的全智全能の動力ありて、この混沌たる大塊を攝理し、雜然たりしものに秩序を與へ、混沌たるもの、中より夫々相等しき種子を撰擇して、茲に始めて特性を具ふる個々物分れ初めしなり。彼れはこの動力を精神即ち「ヌウス」*Nous*と稱し、之れを以て毫も他物と混淆することなく、隨ひて、よく他を動ずることを得れど、他に動かさるゝことなき、至純至粹の非物體的のものとなせり。

宇宙創成

彼れ天地創成を説きて曰はく、太初「ヌウス」によりて、混沌たる大塊の中央に、渦旋運動を起し、其の旋動は恰も水波の如く漸次に周圍に向ひて傳播し、之れによりて、先づ乾明薄暖の「エーテル」と、濕暗濃寒の空氣並びに雲霧とを分ち、重き空氣は中央に位し、「エーテル」之れを包む、次で空氣中より更に水陸を生ず。

生物の發

生物は空氣及び「エーテル」中に存しし生物の種子が、水泥に入りて發生す。生物を活動せしむる者は精神即「ヌウス」なり。植物も亦動物と同じく精神を具ふ。然れどもそは動物に比すれば遙に不完全なるものなり。人體に於ける感覺作用も亦、「ヌウス」

感覺論。

の營む所なり。而して彼れは、エムベドクレースが、感覺は同種類のもの相迎へて逢著するによりて生ずと説きたるに、全然反對して、相反する物が撞著することを以て、感覺の原因となせり。例へば體に熱ある故によく寒を感じ、吾人の眼は暗きが故によく明所を視るが如し。斯く反對のもの相撞著して感覺を起すが故に。其の實際に多少の苦痛を伴ふを免れず。睡眠は單に身體の休息に外ならず、精神は睡眠時と雖ども、依然として働きつゝあるものとなせり。

植物も亦動物と同じく呼吸作用を有す。

胎生論。

植物も亦た動物と同じく、呼吸作用を營みつゝあることを唱へたりしは、彼れを以て嚙矢となす。胎兒は精液の溫氣によりて形成せらる。(如何に溫氣に重きを置かを見よ) 精液を與ふるは、唯だ男子に限り、女子は單に胎兒を宿して、之が形態の生成をなさしむのみ。其の際第一に造らるゝものは腦なり。男兒は右の睪丸より子宮の右半に宿り、女兒は之れに反す。彼れは又た腦の解剖を行ひ、其の側室につきて記載せり。

病理説。

彼れの病理説に曰はく、急病は膽汁が肺肋膜及び脈管内に入るによりて起る。彼は又膽汁に黒色と黄色との二種を區別せり。刹那論 *Krisenlehre* を創製せしも亦た彼れなりと稱せらる。

アトム論者 Die Atomisten

ミレイトス學派に見たる、萬物一元なりとの思想は、エレア學派に於て其の極頂に達ししが、萬物皆な變化流轉せざるはなし、さればこそ、一元よりして能く千種萬態なる世界の實相を生ずるなれと説きたる、ヘーラクライトスの所論は、一元論より漸く多元論に移り行くべき伏線を示し、エムベドクレースの四元素説によりて、多元論は始めて形を取りて世に現はれ、アナクサゴラスの種子説に至りて、益其の發展を見しが、遂に茲にアトム論の出づるありて、多元論は正さに其の頂點に達せり。

アトム論の綱領

アトム論の創唱者は、ロイキッポス (Leukippos, エムベドクレース、アナクサゴラス等と略年代を同うす) なれども、之を大成せしは、一にデモクリトス (Demokritos, 紀元前約四六〇) の功績なりとす。元來、エムベドクレースも、アナクサゴラスも、エレア學派と同じく、「非有即ち虚空なるもの」存在を否認せる點に於て、並びに彼等の所謂元素若くは種子てふものは、限りなく分割せられ、相混淆し能ふものとなしし點に於て、其の考察を同うせしが、若し其の説の如く虚空なしとせば、運動の

充實と虚空

現象を如何にして説明し得べきか。又た多數の元素が無限に分割せられ相混淆する物とせば、其の際元素たるの特性を消失することなきか。此二つの難問題を解決せんが爲めに、充實に對して虚空なるものゝ存在を承認し、且つ元素の分割性を否み、斯くて新たに多元論を唱へ出だしたるもの、是れアトム論の特色なり。

アトム論者によれば、世界は充實 das Volle 〃。虚空 das Leere との二つより成る。實充せる者は、五官によりて覺知す可らざる、不變不滅なる、又た一切他物の摺入を許さざる、隨ひて分割すべからざる微小體の無数の集合によりて成立す。而して其の際是等の微小體は、相互の間を虚空によりて隔てられつゝ、一塊團を形ち造くるなり。ロイキッポスは、この微小體に「アトマ」 (Atomoi) 礙性を有する緻密體と云ふ義なる名稱を與へたり、蓋し其のものが一切の摺入を拒み、分割すべからざるを指せるなり。「アトム」は凡て一様の物質より成り、唯た其の形状(方形・球形・多角形等)及び大小を異にするのみ、且つ不生不滅不變にして、他より侵さるゝことなし。然れども自由に場所を移動し能ふものなり。換言すれば「アトム」は運動性を有す。

斯く不生不滅不變の「アトム」より萬物生成せりとせば、世界に於ける雜多と變轉とは如何にして生起するかと云ふに、是れ唯だ「アトム」が其の運動性によりて離合集散

アトムの性質

世界の一切に於ける性質の變化は、物質上の差異より、機械的に説明するを得ざるを得。

醫學と哲學

四〇

するに基づくのみ。物体の生成すと云ふは、離散せし「アトム」が再び相結合すること。消滅すと云ふは、集合せし「アトム」が再び分離するに外ならず。物体に於ける大小形状等の差別は、之れを構成せる「アトム」の形状、大小、位置、排列による。一物が他物に影響を及ぼすことも亦た、「アトム」が、機械的に衝突・壓迫若しくは附著するによりて起る。又た鐵と磁石との如く、相距りたる二物体が、互に作用するに際しては、是等の物体より微小體を發出するによるなり。且つ凡ての「アトム」は、已に述べし如く一様平等の物質なるが故に、同じ容積を有するものは同じ重さを有すべき理なり。若し同一容積の物体にして、輕重ある時は、是れ一に「アトム」間に存する虚空の大小に基づくものにして、重きもの程、虚空を有すること少く、随ひて體質は緻密なり。堅さは物体に於ける虚空の配分如何によりて定めらる。其の配分が體の全部を通じて平等ならんには、柔軟なれど、之れに反すれば硬固となる。

色・音・嗅・味・觸の如き五官の性質は、上の差別は、單的主觀的の観に依るなり。

然らば即ち、物体に於ける色・音・嗅・味・觸等の五官的性質の區別は、如何にして惹き起さるゝか。「アナクサゴラス」は、本來性質を異にせる無数の種子ありとして、漸く此の難問に答ふことを得たるが、「アトム」論者の如く、各「アトム」を以て性質上同様なる物質と見做さば、如何にして如斯き性質上の差別を生ずるか云ふ問題に撞著

せずや。デモクリトスは之れに答て曰く、色・音・嗅・味・觸等の感覺は、單に五官によりて起されたる主觀的のものなり。されば是等の性質上の差別は、本來物体自己に具有せらるゝものにあらず。宜しく之れを、直接に「アトム」の集合の状態によりて惹き起され、随ひて物体自己に具有せらるゝ、輕重・硬軟・形状等の性質上の差別と區別すべしと説きたり。

「アトム」論の他の多なる點。希臘に於ける「アトム」論の對する同異。

以上は「アトム」論の概要なり。是に由りて見れば、此論が當時の多元論即ち「エムペドクレース」の四元素説、及び「アナクサゴラス」の種子説とは、大に其の趣を異にし、純然機械的に傾けるを見る。四元素説及び種子説にありては、元素に運動を起さしめ、之を攝理すべき動力は、原物質以外に存在せるものとせしも、「アトム」説にては、「アトム」自己體に於て其の動力を具有し、物界に於けるあらゆる現象は、機械的必然的に起さるゝものとなして、「アナクサゴラス」の「ヌウス」説に於けるが如き目的觀を斥けたり。其の點に於ては、此の「アトム」論は、近時の「アトム」論と大に一致せる所あれど、「アトム」を以て、全然一様なる物質と見做し、點に於て、之れと稍、面目を異にせりと言はざるべからず。

希臘の自然哲學者中、醫學に密接の關係を有することの深きは、恐らくデモク

心的作用
は特別の
坐位を占
む。

靈魂も亦
たアトム
による。

呼吸の作
用。

リトスの右に出づる者非ざるべし。彼れは、生物の研究に對して多大の興味を有し、就中人間を以て最も嘆賞すべきものとなして、熱心に之れが考究に力めたり。而かも其の解釋は、全く機械的物理的の見地に於てせり。彼れによれば、種々の心的作用は、夫々體の各部分に其の坐位を占む。腦は全身を主宰し思考の存する所。心臓は忿怒の居る所。肝臓は慾心の坐する所なり。靈魂も亦た「アトム」より成る。其の「アトム」は凡ての「アトム」の中。最も平滑にして、且つ球形をなし、隨ひて最も純正圓滿なるものにして、是れ即ち「火のアトム」なるが、このものは凡ての生物體、殊に人體に於て、最も多量に存し、體の各部に普及し、以て活動の本源をなす。されば、あらゆる生物は多少「火のアトム」を含まざるなく、隨て靈魂を具有せざるなし。是れ即ち體温を保つ以所なり。(如何に原始人類に於て見られたる温即精神なりとの考が再び茲に復活せられたるかを見よ)「靈魂のアトム」は、動き易くして、絶えず身體より分離せんとする傾向あるものなるが、呼吸氣は、一面に於ては其の分離を妨げ、一面に於ては空氣中に存する「火のアトム」を身體に給與して、其の減失を補償し、以て生命を永續せしむ。されば一朝呼吸止み、火氣の減失過多なるときは、死を來たすに至る。「火のアトム」は、獨り生體のみならず、諸物體、多少之れを含有せざるなし。

靈魂の作
用は一種
の運動な
り。

感性を理
性の區別
の。

胎生論。

故に萬物皆な靈魂を有し、唯だ其の量に於て程度上の差異あるのみ。靈魂の作用も亦た、一種の運動現象に外ならず。表象と云ひ、認識と云ふも、皆な之れに基づく。蓋し一物を感覺し認識すと云ふは、其の物體より發出する微分子が、五器官の竅孔より入りて、「靈魂のアトム」を振動せしむることによりて成り立つなり。例へば視覺の生ずるは、視らるべき物體より發生する「アトム」が、其の像を空氣に印し、此の像と、眼より發生する「アトム」が相逢ひて、之れを傳達し、「靈魂のアトム」に振動を起さしめ、其の際、相等しき「アトム」間に於て、相互に作用するものなり、斯くして起されたる感覺は不正確にして、決して信頼するに足らず。隨ひて事物の真相は、獨り理性の働によるの外なしと云ひて、明かに感性と理性とを區別せり。是れ即ち有名なる彼の感覺論なり。

生物發生に關しても亦、大に意見を述べたり。あらゆる生體は、水泥の中より成生せらる。人間にありては男女共に精液を分泌するものにして、合一の際、女性の精液過多ならば女性、之れに反すれば男性の胎兒を生ず、精液は最も「火のアトム」に富み、熾んなる活動性を有するものなり。胎兒にありては、最初に臍帶、次で腦を造る。

病理説。

デーモクリトスは自から醫術を施し、病理に關する多くの記録を遺せり。炎症を以て粘液の鬱堆に歸し、其の外疫病、象皮病、狂水病等に就て一個の説を立てたり。

折衷説 Eklekticismus

思想界に於ける一轉化。

西曆紀元前約五百年より四百年迄の間は、希臘哲學初期に於て最も活氣ありし時代にして、此の間、エムペドクレイス、アナクサゴラス、ロイキッポス、デーモクリトス等略年代を同うして相踵ぎて出で、各自獨創の見を立て議論を闘はししが、アトム論によりて其の極頂に達したる、物質界を純機械的に研究せんとする風潮は、正さに一段落を告げ、思想界は今や將さに一轉化を起さんとして、自然哲學は漸く衰頹の期に入り、創作の氣風全く止みて、只だ僅かに舊説の彼是を取りて、之れを折衷補綴するを以て能事となすに至れり。

是等折衷學派と見做すべき者の中、醫學の開發に直接の關係を有するものを擧ぐれば、アルクメイオン、及びデオゲネスの二人となす。

アルクメイオンの生物説。

アルクメイオン (Alkmaion von Kroton) は、ピタゴラス學徒とも稱すべき者にして、哲學者にして同時に醫家なりき。彼れは眼の解剖につきて貢獻する所あり。腦を以

て精神の中樞となし、觸覺を除きたる外の五器官よりは、管狀の通路(神經を指す)によりて、腦に連絡を保つものとせり。彼は又た脈管を検して、血液を輸送するものと、然らざるものとの別を立てたり。是れによりて推察するに、彼は已に屍體解剖を行ひて、死後空虚となれる動脈管と、血液を有せる靜脈管とを區別せしや、疑ふべからず。且つ頭部を以て凡て脈管の源となせり。氣管の存在も亦た已に知る所となれり。男女兩性の精液の合一によりて、胎兒を生じ、並びに其の何れかの量の過多なることによりて、胎兒の性別が定めらるゝものなりと説くことは、彼れも亦た、他の哲學者と其の考を同じうしたりき。且つ又た疾病を以て身體内に於ける元素(乾濕寒暖甘苦等)の過不及に基づくものとなせり。

デオゲネスの活物論。

デオゲネス (Diogenes von Apollonia 紀元前四四〇—四二五) は、ミレイトス學派の一元論に、アナキシメネースの空氣を以て萬物の本源となす説と、アナクサゴラスの「ヌウス説とを結び附けて、空氣を以て、精神ありて且つ一切の活動力の源となせり。彼れ以爲らく、萬物若し其の本體を同じうするに非ずんば、一物が他物に變移し、或は互に相渾融し、或は一物より他物に影響を及ぼすが如き現象は、到底之れを説明すること能はず。されば多元論は誤謬なり。且つ又た宇宙の萬象に於け

る秩序調和は、單に機械的作用のみにては、之れを起す以所を理解する能はず。必ずや知慮ある全能力を俟たざるべからず。殊に人間及び動物に於ける生活現象の如きにありて然りとせず。

空氣は活
動の本源
なり。

茲に於てか彼は、其の本源を空氣に求めて之れを得たり。空氣は細微稀薄にして、能くあらゆる物體に侵入し、殊に生活體にありて、空氣は、一部は生前に母體より、一部は、生後呼吸によりて、絶えず之れを攝取し、靈魂となりて血液と共に脈管内を循環して、體の各部に於ける生活、運動、思考等を司るものなり。されば脈管は常に空氣と血液との混合物を容る。

太初、氣中の輕暖なる物騰りて天をなし、重濕なるもの下りて地を生じ、水泥中より更に生物を生ず。而して輕暖なる天は熱によりて旋動を起し、日月星辰の運行茲に於てか成る。

人體に於て、彼は肝及び脾に屬する二大脈管を記載し、之れを脈管系の主幹となせり。大動脈、大靜脈、頸動靜脈に就きては、不正確ながら述ぶる所ありたり。脈搏も亦た彼れの注意して研究せし所なりき。又た腦を以て思考の中樞となし、苦樂健疾等の原因を、血液に混する空氣の量の過不足に求めたり。

摘要

希臘自然
哲學に於
ける要
綱。

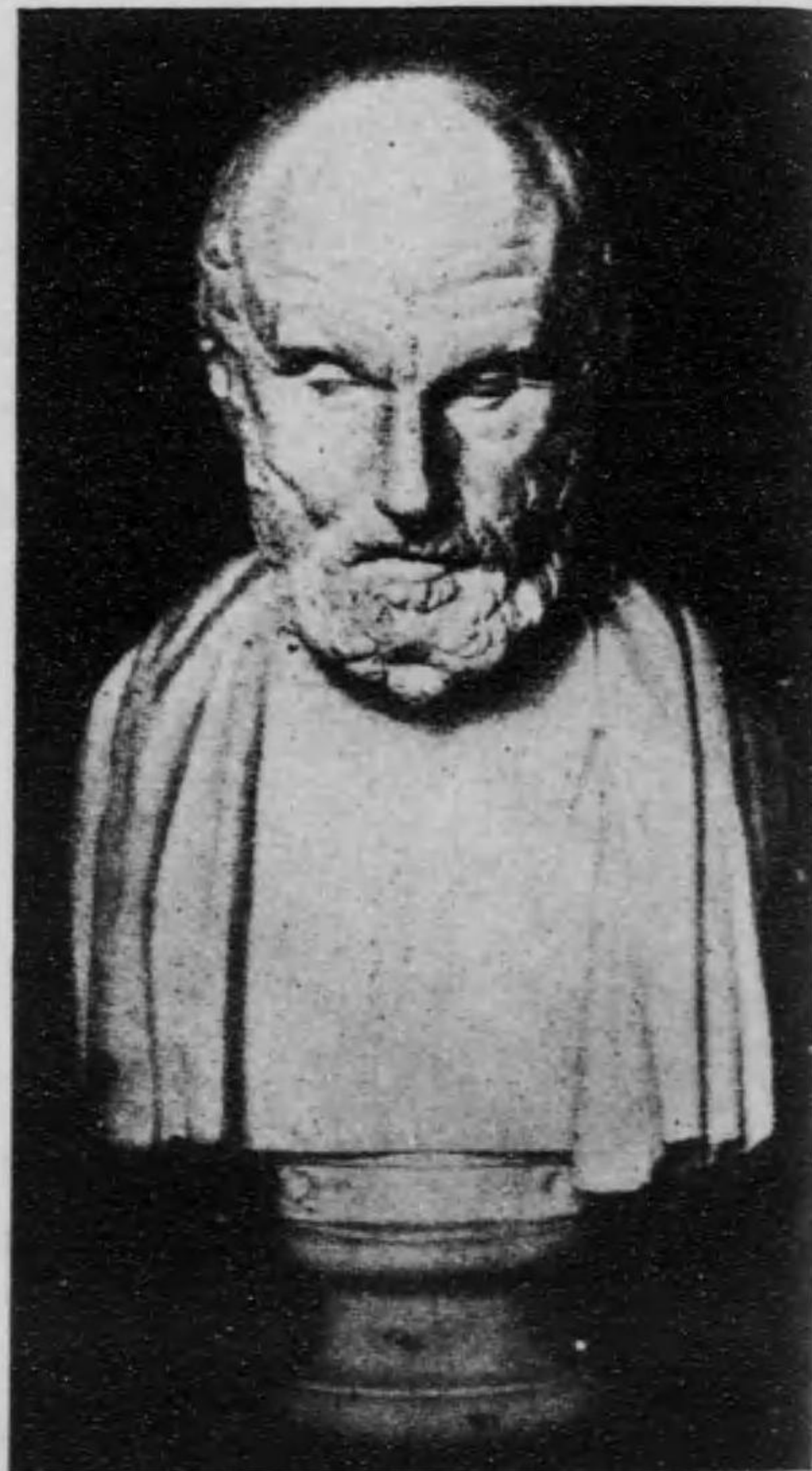
希臘に於ける自然哲學の大勢は、以上述べ來たりし所によりて知らるゝ如く、一言以て之れを覆へば、其の研究の對象となれる者は、客觀的なる宇宙の萬象にして、而かも其の解釋は、物質的、物理的、機械的の立脚地に於て、之れを求めたりしなり。縱ひ、往々にして其の説く所非物質的なる力及び知識に互ることなきに非ざりしも、其の根據となり主位たりしものは、常に物質界、客觀界の研究にして、力及び知識論は其の餘論として導れたる客に過ぎざりしを以て、純然たる非物質的なる精神界の研究と稱すべき、論理學、心理學、倫理學の如きは、未だ見ることを得ざりしなり。

而して其際、自然哲學者が研究の原則と爲しし所の者は、常に物理的、機械的理論にして、獨り物質界に於けるのみならず、心的現象を説くに當りても亦、全然此理論に準據せり。彼等は靈魂を以て、或は溫熱を有する火若しくは空氣となし、或は體表に於ける微竅により、或は呼吸氣によりて體中に攝取せられ、血液と共に循環して身體の各部に生活現象を生起せしむるものとなし、隨ひて萬物を通じて皆な

靈魂も亦
た物質
にして其
作用は
機械的
なり。

原始人類
の復
活
思
想

靈魂を有するものとなせり。又知覺に際して靈魂の作用を説明するにも、或は同一の元素相迎へて茲に感覺を起すと云ひ、或は反對するもの相撞著して感覺成ると唱へ、或は物體より發生する微分子が、體の微竅より入りて、靈魂の原子に振動を起さしめて、知覺認識を生ずと云ひ、一として物質的機械的たらざるはなし。然り而して物質的なる溫又は空氣を以て、靈魂の根源となして、生活現象は一に之に因りてなるものとせし點に於て、將た萬物皆な靈魂を有せりと説く^{ヒポクラテース}物活説に於て、吾人は太古人類に於て表はれたる原始的思想が、たとひ其の論據とする所は往時に異なりたりとするも猶ほ明に茲に復活せらるゝを見ては、人類の思想發展を研究する上に於て、實に少なからざる興味を覺ふるなり。又已に述べしエムベドクレースの愛憎二力の如き、殊にアナクサゴラスの「ヌウス」の如きに至りては、其の説く所大に非物質的精神的に近づけりと雖も、未だ以て全然物質の範圍を脱却せし者と云ふを得ず。エムベドクレースは、愛憎二力を以て、地水火風と同様に空間に存するものと説きたるを以て、或る史家は、愛憎の二つを地水火風と相並らびて、六元素と解釋せしものさへありし程なりき。又た「ヌウス」の如きも、之れを以て諸物の中最も精微純粹なるものとなりと云ひし、アナクサゴラスの言に徴するも、直ちに之れを



ヒポクラテース (Hippokrates)



ヒポクラテース (Hippokrates)の古き像
(アテーン博物館蔵)

以て純然たる非物質的の物なりと断定することを得ざるなり。

要するに希臘に於ける自然哲學者が、「生とは何ぞや」てふ問題に對して取りたる研究的態度を視るに、生命を以て物質界に於ける一現象となし、全然物質的機械的の説明を與へたり。而して原始人類が自己を推して外界の萬物に及ぼし、之れを解釋し得たりと満足せしに反して、自然哲學者にありては、外界に於ける現象を捉らへ來たりて、之れを内に及ぼし、以て一般の生活現象を解決せんと試みたるが如し。

第二 ヒッポクラテース時代

ヒッポクラテース及び其の學徒

醫道の鼻祖と稱せらるゝヒッポクラテース (Hippocrates 紀元前四六〇——三七七)の
出でしは、希臘哲學に於ける物質界考究時代の末期に屬す。彼以前にありては、醫學は殆んど自然哲學者の手中に歸し、醫術は専らアスクレピアス殿堂を中心とせる僧侶の營む所たりしが、彼れ出づるに及びて、始て醫の學術を取りて他より分離し、一大系統を組織して、之に堅固なる基礎を置き、以て醫學の獨立を圖りしなり。時

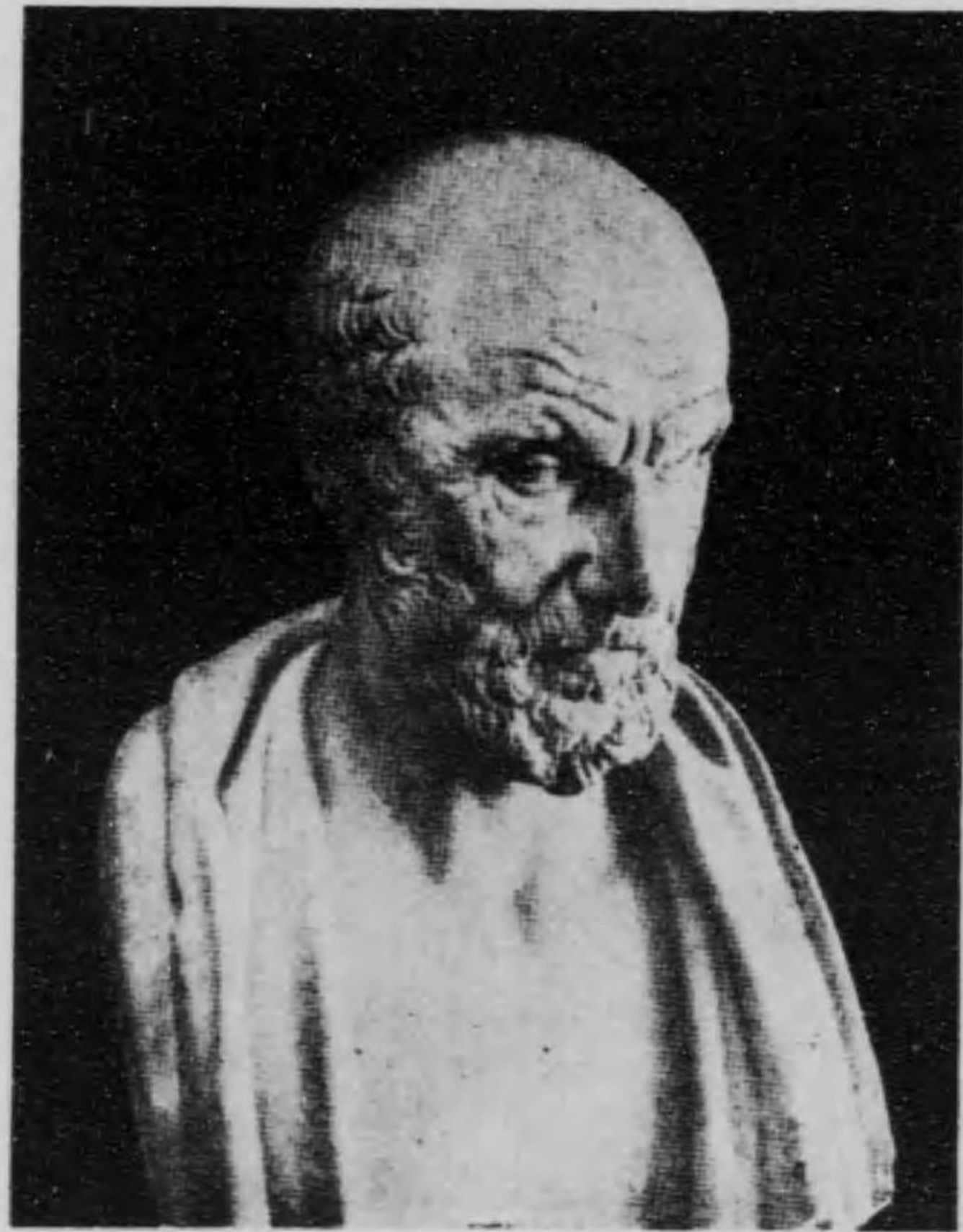
ヒッポクラテースの時代に於ける希臘の思潮

ソフィストの出現及び其の業務

醫學と哲學

正さに希臘の自然哲學は、その精華を開き盡くし、其の結果として、一般に科學的研究は著しく其の歩を進め、天文、數學、生理、解剖の諸學の如きは、漸く獨立せる學科として研究せられんとし、是れと同時に、學理によりて知り得たる所を、一般に實地に應用せんとするの傾向を來たし、哲學の如きも、専ら其の眼孔を人事の上に注ぐに至れり。ヒッポクラテース出で、實驗醫學の基礎を鞏めしも、畢竟此の氣運に乗じたるなり。

斯くして哲學が、人事研究の時代に入りて以來、最も早く表はれし者は、所謂「ソフィスト」なり。此の時に當りて、希臘は、波斯戰勝の餘威を挾みて、アテーンは世界の牛耳を執り、政治、法律、文藝、美術、辯士として正さに隆盛の頂に達し、一般教育の程度も亦た大に高まりたり。斯る社會的狀態の下にありて、最も名譽ある位置と目指されし者は、政治上の舞臺に活動するにありしが故に、人々の著眼は自から社會人事の上に傾き、加ふるに社會主義は、今や其全力を逞しくして、凡てを支配し、門閥出所の舊慣を打破し、才幹衆に擢んずるものは、何人も一躍して青雲に達することを得るに至りしより、人々皆な競ひて處世の法に爛らひ、人心收攬の道を講じ、辯を磨き、論を練り、以て中原の鹿を争はんとするに至れり。而して此



ヒッポクラテース (Hippokrates)

懷疑的及
破壞的
傾向

プロタゴ
ラスの
主觀的
知識論

の社會的要求に乗じて、之れに必要な教育を施すべき専門家を出だすに至りしが、時人之れを呼びて「ソフィステース」(即ち知識ある人と云ふ義)と云へり。されば「ソフィスト」と稱せしものは、決して一貫せる學説を奉ぜし學徒の名目にあらずして、唯だ雜然從來の研究によりて得られたる結果を、折衷補綴するの徒に過ぎず。隨ひて一の定説確論を立つるなく、且つ先きに自然哲學者が、機械的に宇宙の萬象を解釋せし反動として、漸く之に對して懷疑の念を起し、しかのみならず、パルメニデース、ヘーラクライトス、エムペドクレース、デモクリトスの如き、何れも吾人の五官を以て、不完全にして誤謬ある者と見做ししより。終に人間の全般の知識なるものに對して、果してそが信頼すべきものなるや否やを疑ひ初むるに至れり。其の結果は、延いて實社會の事に波及し、一切の舊慣、制度、道德、宗教を疑ひ、甚しきに至りては、之れを無視せんとするの傾向を生じ、其の末流に及びては、徒らに詭辯を弄して、破壊を事とするの忌むべき弊風に陥れり。夫の「ソフィスト」中の泰斗と稱せられし、プロタゴラス (Protagoras 紀元前四八六——四一六) の、有名なる語なる「人間は萬物の尺度なり」(Der Mensch ist das Mass aller Dinge) 及び「自然界は一物として善なる者なく、又た惡なるものもあらず」(Gut oder schlecht ist Nichts von Natur

との二句は、實に「ソフィスト」に於ける懷疑思想を、最も明瞭に言ひ表はししものなり。この故に彼等によれば、知識なるものは、時と處と人によりて皆な相ひ異なる者にして、世に不易なる眞理てふものは存在せざることとなり了はれり。

斯くて「ソフィスト」の末流が、徒らに、知識に對しては、懷疑的となり、道德制度に對しては、破壊的となり了はれるを慨き、茲に起ちて此の弊風を一掃せんとせし者、是れ即ちソクラテース (Socrates) 紀元前四六九——三九九) なりき。

ソクラテースの哲學の本領

彼れは此の目的を達せんが爲に、眞知識とは果して如何なるものなるかを明かにし、之れを根據として、更に倫理及び道德に堅固なる基礎を與へ、以て社會の安寧秩序を樹立せんとせり。彼は先づ、「ソフィスト」が其の玉條と頼める、プロタゴラスの知識論たる、「吾人の知識は全然主觀的のものにして、恰も互に異なりたる色眼鏡をかけて、外界を望むが如く、十人十種なり。従て眞と云ひ將た善と云ふも、果して何を以てか之れが標準となすべきぞ」と云へる説を、打破せんが爲めに、萬人に通じて遍通不易なる事物の眞相を看取すれば、其の知識は各人に共通にして、是れ即ち眞知識なりと教へ、斯くして其の研究の歩を進め、以て道德論に及ぼしたるもの、是れ彼れが哲學の特色なり。

眞知識は何ぞ



ソクラテース (Socrates)

先づ自己
を知れ

されば彼が著眼は、須臾も道德倫理の實際を離れず、自然哲學者が宇宙の成立天體の運動等を論ぜしを以て、寧ろ本末を轉倒せるものとなし、常に「先づ自己を知れ」と云ひて、自から誠めたりき。

斯く哲學界に於て、堅實なる意志を以て實際的道德論を唱へ、眞理の爲に従容として毒杯を傾くることを辭せざりし大ソークラテースと、時を同じうし、處を同じうして、經驗を尊び、空理を斥け、醫學を獨立せしめて健全なる基礎の上に置ける、大ヒッポクラテースの出でたりしは、抑亦た氣運の然らしむる所にして、兩々照らし來りて、更に一層の偉觀を添ふるものなくんばあらず。

「生とは何んぞや」てふ問題に對して、ヒッポクラテース自身は、敢て獨創の見を立つるなく、彼れの生理説として傳へらるゝ所の者は、恐らく其の大部分は、彼れの學派を奉ずる人々の間に於て、始めて唱導せられし者なるべし。其の説に曰く、萬物を形成する物は、地水火風なる四つの元素なり。是れ明かにエムペドクレースの説に基づけるなり。——是等の元素は、各其の特性を有し、地は乾、水は濕、火即ち「エーテル」は暖。風即ち空風は寒なり。人體も亦た宇宙間に於ける一物體にして之を組成するものは、右の四元素なるが、其の中、地性過多なる部分は固形體をな

ソークラ
テース
ヒッポク
ラテース
ス。ヒッ
ポク
ラテース
及び其の
學徒の生
理説。
四元素の
特性。

し、水性優れたる部分は液質を形成す。而して是れ等の體成分たる四元素を、結合綜攝するものは、火性なり。此のものは焰にあらすして、精微にして宇宙に瀰蔓し、よく萬物を結合して之れを活動せしむる「エーテル」に外ならず。而して之れに「プノイ」*πνοίμα*なる名を與へたり。此「プノイ」は、呼吸によりて空氣中より體內に攝取らせれ、心臟に於て其の坐位を占め、此處より脈管に入りて體の諸部に行き、以て諸生活機能を支配し、就中體液の分泌を營む器官の作用を調節するものなり。是れ即ち二千年の久しき、醫界に於て平手として抜くべからざる根柢を占めたる、「プノイ」説にして、其の淵源を自然哲學者に發ししや言を須たす。而して又呼吸即ち身體を活動せしむべき精神なりとの、太古人類に於ける原始的思想が、再び茲に現はれ來たるを見るなり。

體質の中主要なる物は液質にして、固形成分は殆ど何等の意義をも有せざるものなり。四元素の特性に隨ひて、液質にも亦四種の別を立つることを得べし。乾性を有する物は黒色膽汁 *schwarze Galle* なり。濕性を表はすものは黄色膽汁 *gelbe Galle* なり。暖性なるものは血液にして、寒性なるものは粘液なり。黒色膽汁は脾に於て、黄色膽汁は肝に於て、血液は心臟に於て、粘液は腦に於て、各自生成せらる。自然

四液の特性

哲學者は、早くも腦が思考の中樞たる事を唱へたるにも關らず。ヒッポクラテースは却りて之れを以て粘液を分泌すべき腺の一種と見做し、而かも其の際腦は、體の各部に於て造られたる粘液の過剰を、自己の中に吸収し、再び之れを篩骨の小孔を通して下垂せしめ、鼻汁として外界に排除するものと考へしなり。然れども、癩癩に就きて記録せし所によれば、之れに反して、腦を以て思考の中樞なりと説けり。

液體病理

四種の體液が混合の割合宜きを得れば、健康を保てども、然らざれば疾病を醸す。就中、粘液及び黄色膽汁の過不及は、最も屢病源をなすものなり。斯く彼等は液質に重きを置き、凡ての疾病の成立を、其の混合の不調和によりて説明せんとししを以て、之れを名つけて液體病理説 *Humoralpathologie* 或は惡液説 *Krauslehre* と云ふ。

體の液質並びに其の變化によりて成れる固形質は、食物によりて其の補償を受く。而も食物を變じて體成分となすに與りて力あるものは、「プノイ」の特性たる溫熱なり。一般に溫熱の作用する程度の如何によりて、種々官能を異にせる器官を生ずるなり。

心臟は生活機能の中樞にして、茲に位せる溫は、一面には、肝臟より右心室に入り來りし冷たき血液に活氣を與へ、又た一面には、肺臟によりて右心室内に入り來

用腺の作

一腦も亦た
なり。の腺

脈管。

りし空氣中より、「ブノイマ」を分ち取るの作用をなす。斯くして、血液は靜脈管により、又「ブノイマ」は動脈管によりて、身體の各所に到達するものなりとの記録あれど、(上述のアルクメイオンの説と併せ見よ)、是れ恐らくは、ヒポクラテース自己の所説にあらずして、アリストテレース以後に於けるヒポクラテース學徒の説ならんと云ふ。(アリストテレースの説を参照せよ)且つ又た心臟を以て一つの肉塊となし、其の左心室の壁の殊さらに肥厚せるは、之れによりて「ブノイマ」の放散を防ぐ爲となせり。各種の腺を以て、體內に生ぜし過剰の液質を吸収するの働ありと信ぜり。獨り腦は、上記の如く粘液を吸収して、再び之れを分泌するの作用あるのみならず、又た體の各部分に於て生成せられたる精液をも吸収し、之れを墨丸に送るべき働を有する者とせり。又た腎臟を以て、同様に體の諸部より液質を牽引して、尿を造るものと考へたり。

脈管につきては、初め凡ての脈管に「フレイベス」*phlebes*なる名目を與へしも、後中には血液を含有せる脈管即ち今日の靜脈管のみを「フレイベス」と稱し、其當時にありては、單に「ブノイマ」の通路と考へられたる今日の動脈管を、之と區別せんが爲に、「アルテリエ」と稱せり。「アルテリエ」*arteria* は本來氣管の義なり。

呼吸及び
發聲。

骨格筋肉
及び神經

生殖器。

視聽
及び嗅覺

呼吸につきては、肺を以て其の器官とせり。肺は海綿狀の構造を有し、五葉に分たるゝことを説きたり。喉頭につきては、記載する所あらざれども、會厭軟骨を以て、食時の際、飲食物の肺に入らざる爲に、氣器を閉塞するものとなし、又た發聲は、氣管中にある空氣の振動に基くものとなせり。

骨格殊に頭蓋骨につきては、比較的精細なる記載を遺せり。軟部乃ち筋肉を呼びて、「ムス」*mus* 希臘語「鼠」と云ふ字なり。筋肉 *Muskel*. *Muscle* と云ふ語は之れより起ると云へり。

神經と筋とを同一視し、共に「ノイラ」*νεῦρα* (神經 *Nerven*. 神經原 *Neuron*. 等の語は之れより導かれしなり)と呼べり。

生殖器殊に女性生殖器に就きては、正確なる記載を遺ししも、未だ卵巢につきては知る所なかりしが如し。乳汁の分泌を以て、懷妊時に於て、子宮が腸網膜の媒介によりて、乳房を壓迫する結果として生ずるものと考へたり。

眼球に就ては、鞏膜、角膜、及び眼の内容液を直接に包める精細なる膜なる、三種の膜質を區別せり。水晶體に就ては、未だ何等の知識をも有せざりしが如し。腦より分與せられたる液質ありて、眼の内部を充たす者とせり。視覺は或は瞳孔に物

像の映するに由るとも云ひ、或は又た眼と腦とを結合する管ありて、之れによりて、物像を映せる微分子が腦に進入して、之を起すとも唱へたり。聽官器に於ては骨様部と並びに鼓膜とを記載し、而して骨様部の反響によりて、聽覺を起すものとなし、或は又た内耳部は全く空虚にして、音が直接に腦に達するものとも説けり。嗅覺は、香氣を起すべき微小體が、篩骨板の小孔を通じて、腦内に入りて起るものとなせり。是等の記載に徴すれば、腦を以て知覺の中樞と見做ししや疑ふべからず。然り而して以上陳べし生理學說の中、果して何れを以てヒポクラテース自己の唱へし所となし、何れを以て、後代に至り、彼れが學徒の手によりて成就せしものとなすべきかに關しては、未だ驟かに之れを斷定し易からず。

斯かゝる間にソークラテースの哲學は、分れて三派の學徒を出だせり。其の一は即ちソークラテースの所論と、エレア學派の思想とを結び附けて、事物に普汎不易なる實相を觀取する眞知識とは、即ち「有」を知るにあり。此の知、即ち是れ徳なり。神なり。眞理なりと説きたるメガラ學派。Megarische Schule. 其の二は、徳行によりて得る主觀的満足、是れ即ち最大幸福にして、之れを得んとせば、宜しく外界に於けるあらゆる羈絆を脱却し、恬淡寡欲、世と相關せずして、本然の性を托げざるに

メガラ學派。



プラトーン (Platon)

クニツク
キユレ
ネ學派。

あり、知識を求めんとするも亦た愚なりと説ける、クニツク學派。 Kynische Schule
其の三は、キユレーネ學派 Kyrenische Schule にして、快樂を以て人間究極の目的と
なし、徳行も亦た之れを得んとするの一段に外ならずとなせり。されば此の究極
の目的に達せんには、必しも徳行によるの必要なく、手段の如何は敢て問ふ所にあ
らず。而して快樂の最も大にして且つ最も容易く之れに到達することを得るは、凡
ての制限を無視して、現在の肉體的快樂を恣にするにありと説きたり。畢竟するに
是れ等三派の學説は、何れも單にソークラテース教説の一面に偏して、全般を達觀
するの明なかりしによるものなるが、茲にソークラテースの門弟の一人なるプラト
ーン、及びプラトーンの弟子たるアリストテレース相踵ぎて起り、遂に二大哲學系
統を組織するありて、希臘の思想界は正さに其の隆盛の極致に達したり。

プラトーン

プラトーン (Platon) 紀元前四二九——三四七も亦た、ヒッポクラテースと殆んど時を
同じうしたり。彼れはソークラテースに就きて學ぶこと八年、師の歿後、師説の眞
意を紹繼し、更に眼を、前代自然哲學者の上に注ぎて、在來のあらゆる偉大なる思

想を捉へ來たりて、之れを熔冶渾融し、以て一大系統を立て、ソークラテースによりて、言ふべくして未だ言はれざりし所のものを大成せり。

プラト
ン哲學の
出立點の

プラトーン哲學の中堅を形ちづくる者は、其「デアレクチック」Dialektik 即ち「イデア説」Ideenlehre なり。已に述べし如く、ソークラテースは、「ソフィスト」の懷疑的破壊的暴風の爲に、舵を失ひて、歸著する所を知らざりし思想界の船に、燈明臺の光を與へ、以て社會の安寧幸福を圖らんとして、此目的に向ひて確實不易なる眞知識の存在を主張し、之れを根據として、堅固なる道德論を立てんとし、なり。彼れは斯くて、吾人の眞知識を以て、事物の普汎共通なる不易の眞相を看取するにありと提唱せしも、理論的に其の眞知識の成り立つ所以を證據立つることをせずして、直ちに刻下の急務たる道德論に向ひて躍進せり。プラトーンが研究の第一著手は、正さにソークラテースによりて等閑に附せられたる、此の眞知識の成立論に於て行はれたりき。

イデア
説。

プラトーンも亦、眞知識とは、事物に共通不易なる眞相を看取するにありとなす點に於ては、全然師説を紹繼せり。然らば如何にして如斯き眞知識を造り上ぐるか、是れ即ち彼が第一に解決せんとせし根本問題なりき。彼以爲らく、眞知識とは即ち

生滅界と
實體界と

事物に通有不變なる眞相を看破して、概念を形成するの謂に外ならず。然り而して斯の如き概念の形成に向ひては、吾人の五官によりて感覺せる所は毫も信賴すべき者にあらず。何んとなれば、吾人の感知する所のものは、轉變生滅須臾も止むことなき現象界にして、常に一つの極端より他の極端に向ひて趨り、事物の純粹圓滿不變なる眞相は、到底之れによりて見るべからざればなり。彼れは茲に明かに自然哲學者によりて唱へられ、プロタゴラスに於て最も明晰に喝破せられたる感覺不信任説と、ヘーラクライトスの流轉説とを採りて、相結び附けたるなり。然らば即ち眞知識は果して何れの處にか求むべき、曰はく、宇宙の萬物には、斯く轉變生滅極まりなき現象界、即ち、彼れの所謂生滅界 *γένεσις καὶ φθορά* の後に於て、不生滅、不轉變、無始無終の實體界 *οὐρανία* を存す。而して五官によらずして、獨り理性によりて、此實體界を達觀する。是れ即眞知識なりと説けり。吾人は茲に、彼れが、*παρμενίδης* によつて唱へられたる不生不滅不易の「有」、即ち萬物の本體なりとの思想を捉へ來りて、之をソークラテースの眞知識説と結合し、「有即ち實體界を看取する、是れ即ち眞知識なり」と斷し、以て有即ち實體界と、「非有即ち生滅界とを、對照せしめたるを見るなり。而して彼が所謂「イデア」とは、即ち此の實體界を代表するものなり。

イデアの本質

されば事物の真相は、此の「イデア」なるものに於て示さるゝ者にして、「イデア」とは五官によりて認知すること能はざる、個々の物體を超越して之れより離れて存在し、之れに普汎共通なる真相を與ふる、不變不滅のものなり。例へば花も美なり。月も美なり。雪も亦た美なり。而かも雪や、月や、花や、其れ自身が「美」と稱すべきものにあらずして、是等のものに共通不易なる永遠の「美」なるものが存在して、始めて雪月花をして美ならしむるなり。此の共通不易の「美」を認むることは、五官のよくする所に非ずして、靈魂の理性の對象たるべきものなり。而して之を名づけて「イデア」(Idea) と呼びたるなり。然らば此の永久不變なる「イデア」界、即ち實體界と、流轉變化極まりなき生滅界との間には、如何なる關係あるかと云ふに、プラトンは、後者を以て前者の影像と見做したり。

由是觀之、「イデア」とは、エレア學派の認めて萬物の本體となせる「有」とは、少しく面目を異にし、絶對的の一元を指すにあらず、美なる物には之に共通なる「美」の「イデア」あり。醜なるものには之に普汎なる「醜」の「イデア」あり。而して個々の「イデア」互に自他の關係を有し、其の下級なるものは、高級なるものに從屬して以て連絡を保つ。而して「イデア」の中、最も位高くして、凡てを支配し、統一を保つものは、即ち「善」

善のイデアの目的論的大成

「イデア」(Idee von Guten) にして、換言すれず是れ即ち神明なり。

茲に於てかアナクサゴラスの「ヌウス」説に、其の萌芽を發したる目的論 Teleologic は、彼れによりて始めて明瞭なる形式を取りて生れ來れり。彼れ以爲らく、現象界は實體界即ち「イデア」界の幻影に外ならず。換言すれば、前者の原因たるべきものは即ち後者なり。而して「イデア」が其の原因となりて、個々物をしてそが現在ある如くあらしむる所以(原因)のものは、畢竟其をして善美たらしめんが爲なり(目的)。茲に至りて彼れは、原因と目的とを全く同一視せしなり。隨ひて個々の事物の在るは、各其の宜しきに適し且つ目的に叶ふにあり。而して各の事物に於て、宜しき所あるは、即ち全體を通じて善なる所ある所以にして、是れ即ち「善」の「イデア」ありて、之れを統一支配するに基づく。彼れは如斯き目的觀を以て一切の事物を觀察し、後世をして長く目的論の渦中に投ぜしめ、科學の發達に大なる障礙を與へたり。

要するに彼の「イデア」説は、自然哲學者の所説が、終始物質的機械的の範圍を脱却すること能はざりしに反して、物質を超絶せる或る者の存在を認め、却て此の非物質的のものを以て事物の真相となし、物質界を以て其の幻影となし、斯くして最も明瞭に、且つ大膽に、超感覺的の實相界と、感覺的の現象界とを區別しし點に於て、

後代の哲學思潮を研究するに當りて、多大の意義を有するものなれど、直接に、自然科學及び醫學に利益せし所は、僅小なりと云はざるを得ず。殊に彼れが目的論の如きは、却て嚴正なる因果律の研究を對象とせる科學の發達を阻碍せしや、頗る大なり。

プラトンの宇宙創成歌
宇宙の靈
天地萬物皆な活物なり

星辰の神力

彼れ宇宙創造を説きて曰く、太初、造物者——彼は之を「デミュルゴス」と呼べり。——ありて、純なるイデア界を代表し、此のものが混沌として未だ定相を具へざる物質と相混じて、以て最初に「宇宙の靈」*Weltsiele*を造れり。此宇宙の靈是れ即ち諸物の根本にして、先づ之れより地水火風の四元素を形成し、天地次ぎて割れ出でたり。而して天行の極めて正しき規律ある、四季の節序を誤らざる、思考意識等の心的作用の起るあるは、みな宇宙の靈の之れに宿るによる、されば天地萬物悉く皆活物なり。就中日月星辰は、造物者が自から手を下して、創造せしものにして、不死不滅、且つ人智以上の精神を有し、火氣より成立す、是れ即ち既成の神なりと説けり。アリストテレースも亦、星は靈智を具へ其の影響地上に及ぶと云へり。而して如何に是等の思想が、新プラトーン學派を経て、占星術等の神祕的、非科學的迷信を惹起せしかは、後に至りて陳ぶる所あるべし。

プラトンの生物論
理性及び意慾

生物は日月星辰の如き既成の神が、造物者の意志を承けて創作せし物なり。故に死を免かれず。唯だ精神の一部のみは、造物主より直接に受け得たる所なるを以て、隨ひて不死不滅なり。精神の中、理性は不死なれども、意慾は死滅すべきものなり。理性 *Vernunft* の坐位は、五官器と共に頭部にあり。意 *Willie* の坐位は、胸部殊に心臓にあり。慾 *Begeerde* の坐位は、腹部にあり。慾は意の媒介によりて、理性の支配を受くるものなるが、肝臓は其の媒介に際して主要なる働をなす。

心臓及び肺

心臓は脈管の中心にして、血行は茲に生起す。肺は外界より「*プノイマ*」及び飲食物を取りて、心臓を冷却する作用あり。飲食物の一部分は、食道を通じて、腹腔に入る。肺を出でし飲料は、腎を経て膀胱に入る。肝臓は大にして滑澤なり。中に膽汁を造る。脾臓は病によりて生ぜし不潔物を吸収す。故に病に際しては膨大し、癒ゆれば再び縮小す。骨髓は重要な物にして、骨及び其他の軟部を形成する根源となる物なるが、就中、殊に大切なるは、精液を造るべき脳髓なり。食物の消化は、「*プノイマ*」によりて取られたる熱の作用による。

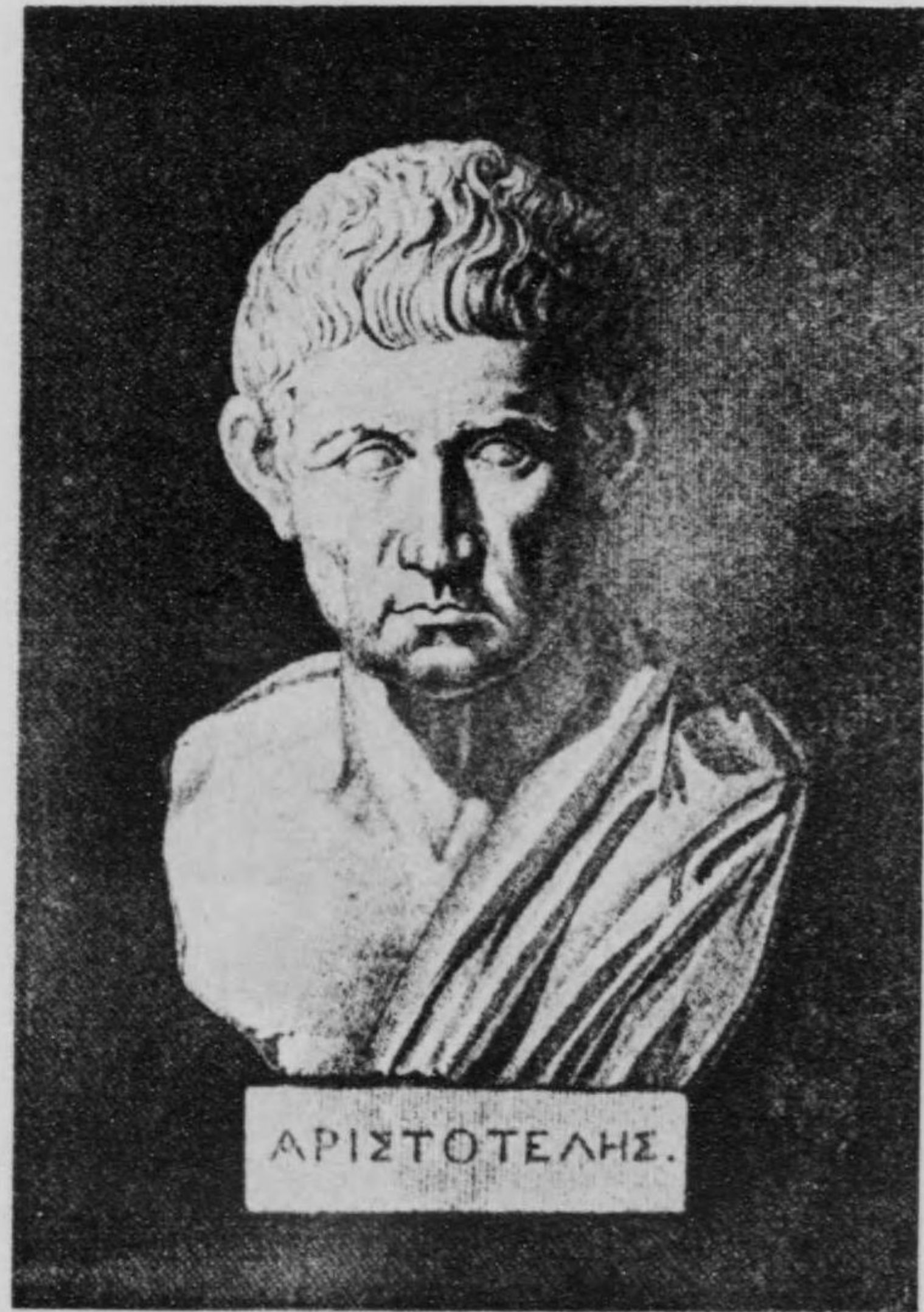
肝。
脾。
骨髓及び脳髓。

アリストテレース

プラトーンの哲學よりも、更に偉大なる影響を科學及び醫學の研究に寄與せしは、アリストテレス (Aristoteles 紀元前三八四——三二二) の哲學なりとす。彼れも亦た、ソークラテースの思想に基づきて、眞知識を以て共通不易なる事物の眞相を知るにありと爲し點に於ては、其の師たるプラトーンと根本の意見を同じうせしも、プラトーンが個々物以外に、別に、「イデア」なるものありとなし、之れを以て事物の眞相と見たる點に於ては、全然反對の態度を取りて、痛く之れを批評し、「イデア説の云ふが如く、「イデア」を以て、全然個々物より離れて存在するものとせば、「イデア」と個々物との關係を論ずること大に困難にして、例へば物質界に於ける生滅變轉の現象の如きも、如何にして、毫も動力を有せざる「イデア」が之を生起する原因となるべきか、將た如何なる方法によりて「イデア」が物體に分布關與するか等の反問を掲げ、其の外尙ほ「イデア説」に存在する多くの弱點を擧げ、「イデア説」が、如斯き弱點を起す所以は、畢竟「イデア」即ち本體を以て、事物を離れて存在すと見做ししより起る者となし、茲に於てか彼れは、個々物の本體を以て、「イデア」の如く抽象的なる、物體を超越せる概念と見ずして、各物體内に存在し、其の個性と相離れざる通有性と見做し、之れによりて、個々物の眞相、即ち彼れの所謂實體^{ウツツ}を理解せんとせり。斯く實體は、



アリストテレス (Aristoteles)



・アリストテレース (Aristoteles) ・

素相説。

個々物と離ることなくして、其中に存在するものなれど、斯く云へばとて、彼れは個々事物の現象其の物を、直ちに實體と見たるには非ず、五官の誤謬多くして頼むに足らざること、並びに感覺界の變轉極まりなくして、之によりて到底真相を觀取する能はざること。隨ひて事物の真相は、獨り思索によりて、超五官的のものに於て、之れを求むべきこととなせるは、プラトーン及び他の哲學者と異なることなし。彼れ以爲らく、變化すと云ふ以上は、其れ以前に變化せざる者存在せざるべからず。又た轉化^{エテレン}すと云ふからには、其れに先ちて轉化せざる未發の状態あらざるべからず。而かも其の際二様の關係を考へざるべからず。一つは即ち變化を受くべき一面にして、他は即ち變化を與ふべき一面なり。彼れの素相説は、之に基づきて始めて唱道せられたるなり。其の説に曰はく、實體なるものは、事物の内^{イナ}に存在すれど、一時に己れを實現するものにあらずして、漸次に其の實現を起すものなり。此の實現、是れ即ち變化と云ひ、生滅と稱せらるゝ所以のものに外ならず。而して其の際變化を蒙むる者に「素」 *εἶδος*, Stoff, 變化の原因たるべき者に「相」 *εἶδος*, Form なる名を與へたり。素と相とは、本來相離れたるものにあらずして、素は相とならんとする前提若しくは階段にして、素の變化によりて相が漸次に己れを實現するものなり。換

素は相の未發の狀態なり。

成るべくして未發の狀態にあり。實現せらるゝこと Wirklichwerden des Möglichen 即ち是れ變化生滅の現象なり。彼れは斯くて、獨り個性と本體とは相離れざるものとなししのみならず、又た本體と變化の現象とを結び附けたり。

相は「イデア」に相當し、非有に匹敵す。

言すれば、素は即ち相の未發の狀態なり。例へば茲に一個の鶏卵ありとせんに、こは即ち一の素なり、而して之れに伴ひて一匹の鶏となるべき相は、既に其の中に存在するが故に、時を経るに従ひて、相が素を變じて己れを實現するものにして、世の所謂轉變とは、即ち之れを指すものなり。換言せば、成るべくして未發の狀態にある性が、實現せらるゝこと Wirklichwerden des Möglichen 即ち是れ變化生滅の現象なり。彼れは斯くて、獨り個性と本體とは相離れざるものとなししのみならず、又た本體と變化の現象とを結び附けたり。

由是觀之、相は即ち事物の真相にして、遍通不易なるのみならず、事物に於ける究極の目的を示し、且つ此の目的を現實せんが爲の助力たるべきものにして、プラトーンの「イデア」即ち「有」に相當すべく、之に反して素は其の生滅界即ち「非有」に匹敵す。唯だ其の主要なる差別は、素と相とは、相離れずして、共に事物の中に存在するものなれど、「イデア」は超絶的にして、「非有」即ち個々の事象と相離るゝものとなせること、是れなり。斯くて彼れは、プラトーンの「イデア」對「非有」の二元論を變じて、互に相離るべからざる關係を有する素相の一元論となせり。

斯く相は素の究極の目的にして、且つ之れを動かす者と見て、其の目的の現實せ

テアリストの目的論の進歩哲學。

らるゝこと、是れ即ち事物の變化生滅の現象なりと説きたるが故に、彼れの所論は純然たる目的論となれり。即ち彼によれば、事物をして然からしむる所以の原因は、斯くあらしむべき目的の存在することゝなれり。隨ひて又た事物に於けるあらゆる變遷は、それが或る目的を追ひて開展し行くことにして、此點に於て彼の哲學は進化哲學となれり。而してこの目的論が、大に後代を誤らしめしは、又た言ふを待たず。

彼れ更に素相の關係を敘して曰く、斯く素が相を實現せんとする、是れ即ちあらゆる變化、換言せば廣義に於ける運動の原因なるが、已に運動ある以上、運動を起すべき原動力と、並びに之れを受けて運動するものとの、二者の關係を研究せざるべからず。而して一つの實體に於て運動が成り立つとせば、能動者と受動者とは各相異なりたる元素に存在すること、恰も人體に於ける身體と精神との關係あるが如くなるべし。即ち相は能動者にして現勢力を代表し、素は受動者にして「潜勢力」を意味す。斯く素と相とを以て、身體と精神との如く對峙せしめたる點より云へば、一見して一元説の如く感ぜらるゝ彼れの説は、或る點に於ては、著るしく二元論に傾けるを見るなり。

相は貴く
素は賤く
し。

斯く素と相とを二元的に考へ來たりし結果として、事物の階級に説き及ぼして曰はく、素即ち潛勢力は、相即ち現勢力を待ちて、始めて運動を起し、現勢力に移り行くものなるが故に、彼れは受働にして此れは能働なり。加ふるに潛勢力の中には、種々の反對せるもの含まれ居るが故に例へば健康體たるべき性を具有せる人も、時に疾病を起すことあるが如し。現勢力は、遂に潛勢力に優る。(現に健康體なる人は、同時に病體たる能はず。)されば事物に於て、素の方面多き程、位卑しくして、素より相の方面に進むにつれて、益其の位を高むるものなり。素のみありて相全く發現せず、隨ひて毫も動力を有せざる物を、原始の素 *ἡ πρώτη ἕξις* と云ひ、最下級のものなり。之れに反して純粹の相のみありて、毫も素の方面を含まず、隨ひてよく他を動かすも、他より動かさるゝ事なき者を、原始の相 *ἡ πρώτη εἶσις* と云ひ、最上級に位し、是れ即ち萬物の生起を司る神明なりとせり。蓋し他をして動かしむべき最初の原動力たるものは、必ずや、自から不動のものたらざるべからず。何んとなれば、若し動きつゝあるものならんには、是れ即ち已に最初の原動力と云ふべきものにあらずして、其の運動の原因は他に求めざるべからざるを以てなり。故に神明は不動なり。又た、あらゆる變化の最終の原因たるべきものは、必ずや非物質的の者たら

原始の素
及び原始
の相

ざるべからず。何んとなれば、變化の最初の原因たるべきものは、前に述べしと同じ理によりて、自から不變なる者ならざるべからず。然るに凡ての物質は已に變化を伴ふを以てなり。又た宇宙に於ける運動は極めて整調にして、且つ統一的なることより考ふれば、運動の最終の根源たるべきものは、必ずや單一ならざるべからず。

斯く單一にして不動不變、相の方面のみありて、毫も素の方面を含まざるものは、純粹圓滿なる靈智にして、神明は即ち靈智に外ならずとなし。最も進歩せる神學的思想を唱へ出だせり。而して斯く單一純粹なる相、即ち神明によりて支配せられ且つ動かさるゝ、宇宙間に於けるあらゆる變遷流轉の現象は、素が相に變じ、潛勢力が現勢力に轉化する事にして、其極致は、純粹の相、即ち神と一體となることにある。諸物の變化は一として此目的によりて生起せられざるはなし、彼れ曰はく、「自然は一事物と雖ども決して目的なしには行はず」*die Natur tut Nichts zwecklos*。又た曰はく、「自然は常に出來得る限り最も善美なる者を爲さんと力む」*die Natur strebt immer nach dem Besten*。Sie macht nach Möglichkeit immer das Schönste. 蓋し此語は、彼れが宇宙觀人世觀を通して一貫せる思想なりき。而して此の目的論が、プラトーンの「イデア説に於ける目的論と相應じて、科學的研究を阻碍せしは、已に述べたるが如し、

自然は一
事物と雖
ども目的
なしには
行はず。

蓋し希臘の自然哲學者に於ける物質的機械的學説は、「アトム論に至り大成せられし」と雖ども、其の後プラトーン、アリストテレースの如き二大哲學者出でしがために、其の目的論によりて壓倒せられ、未だ驥足を伸ばすに至らずして止みたりしは頗る惜むべし。

吾人は暫らく彼が創成説を措きて、直ちに其の生物論に入らんと欲す。蓋し生物の研究は、彼れの最も熱中せし所にして、彼れは一面に於て大なる哲學者たりしと同時に、一面に於ては偉大なる生物學者なりしなり。凡そ現今に於ける動植物學と稱せらるゝ者は、彼れに於て悉く其の根源を發せりと云ふべく、驚くべく多數なる材料につきて、精細なる生物學的の觀察を遂げたり。

已に述べたる如く、彼によれば、事物に於けるあらゆる變轉は、素が相を實現し來ることにして、自然界は、此の目的を追ひて活動しつゝある一團として見るべきものなるが、就中其のことは、生物界に於て最も明瞭に視ることを得べし。生物にありては、素は即ち受働的のものにして身體、相は能働的のものにして靈魂是れなり。且つ已に素相の關係に於て述べたる如く、靈魂は非物質的のものなれど、別に身體と離れて獨立して存在するものにあらずして、之れと相伴ひ、身體を動かさし之

アリストテレスの生物論

エンテレカイア

植物靈魂及動物靈魂及び精神

プラトーンとアリストテレスの區別

れを變化し形成する本源となるものなり。彼れは之れを身體に對して有機體の「エンテレカイア」*entelecheia*と呼べり。されば、身體は單に靈魂の道具たるに過ぎずして、主たり目的物たるものは靈魂なり。然り而して、素は一般に相の發現に對して障礙たるべきを以て、靈魂の開發の程度は、生物の種類によりて一様ならず。生物の中最も下級に位する植物に在ては、相の方面未だ幼稚なるが故に、其の靈魂の作爲する生活現象は、單に榮養と生殖との二つに過ぎず。進みて動物に至れば、以上二作用の外、更に感覺作用及び移動運動 *Ortsveränderung* を有するに至り、最も進化せる人類に至りては、是れ等の諸作用の外、さらに知識作用 *Erkennendes Vermögen* を表はし、理性の導く所に従ひて、感覺及び運動の統一を司るに至る。斯くして彼れは、先きにプラトーンが、意慾理性なる、三つの靈魂を區別せしが如く、靈魂に三種の別を立てたり。其一は榮養を司る植物靈魂 *Pflanzenseele*。其二は感覺を司る動物靈魂 *Tierseele*。其三は理性を具ふる人類靈魂 *Menschenseele* 即ち是れなり。彼れは特に第三者を前二者より區別せんが爲に、之れを狹義に於ける精神 *νοῦς* と呼べり。斯くてプラトーンを經、アリストテレスに至りて、始めて從來單に身體に對して、漠然或は精神 *Crist* と云ひ、或は靈魂 *Seele* と唱くしものゝ間に、剗然たる區別を設けた

アリストテレスの進化的宇宙觀

り。斯く植物動物人類は、漸次相連続せる階段を形ちづくるものなれば、此の三者に於ける精神は、又た順次に移行行くものにして、全く隔絶せるものにあらず。隨て最高より最下に至る迄、活動するものなり。彼れによれば、宇宙に於ける簡單なる元素より、先づ植物を生じ、さらに之れより動物を現じ、一層進みて自然界に於て最も高等なる人類を造る。如斯にして、漸次に最下級なる原始の素より、最高級なる原始の相、即ち神明に向ひて近くこと、是れ彼れが進化哲學より得たる世界觀及び人生觀の本領なり。

生活作用及び運動作用の中心は心臓なり。血液は感覚作用を傳達す。

植物體にありては榮養生殖の二作用のみにして、統一を司るべき中心なく、隨ひて感覺を缺く物なり。動物體に於ては、既に感覺を有し、生活作用並びに運動作用の中心たるべきものあり。而して彼れは之れを心臓に求めたり。——心臓を以て生命の根源となしし、原始人類の思想が、茲にも亦復活せらるゝを見る。——蓋し靈魂と直接に相ひ結合せるものは、體温の根源たる「ブノイマ」にして、「エーテル」様の物質をなし、肺によりて絶えず空氣中より攝取せられ、心臓に行き、血液と混じて、體の各部に行き生活現象を起さしむ。故に心臓は靈魂の主要器官にして、生命の源なり。且つ血液は感覺作用を傳達するものなり。されば心臓は又た體温及び血液の源をな

消化作用及び榮養作用

搏動。

ノイラ。

自然發生。

無性生殖、兩性生殖

し、胃に於て消化せられ、血管によりて心臓に入り來たりし榮養物を、温を有する「ブノイマ」の働によりて成熟せしめ、血液と共に之を體の諸方に送る。其の際最良の榮養分は筋肉に給與せられ、其の次きは骨格を養ひ、最も粗悪なるものは毛髮羽爪等となるなり。温き「ブノイマ」が、心臓に於て血液と相混する際、之れを沸騰せしめ、以て搏動の原因をなす。彼れは動脈血と靜脈血とを色によりて區別せしも、未だ動脈管と靜脈管との區別を立てざりき。彼れより以前に於て、プラクサゴラス *Praxagoras* は、既に明かに動脈管と靜脈管とを區別せしも、彼れは之れに思ひ至らざりしなるべし。感覺を司るものは筋肉なり。蓋し其の當時にありては「ノイラ」なる名の下に筋及び靱帯を呼び、神經の作用に至りては全く不明なりしなり。腦を以て感覺なき冷たき無血の腺にして、粘液を造るものとなせり。生殖に關してアリストテレスは、三様を區別せり。(一)無機物より、自然發生 *Generatio spontanea, s. aequivoca*。によりて生物を生ずることにして、是れ後世に於て生物學上の大問題となりたるものなり。彼れは昆蟲類、加之、魚類の或る物に至る迄も、猶ほ此自然發生によりて無機物より自然にわき出づることを主張せり。(二)兩性の區別なき一個體より、新個體を生ずること。(三)雌雄兩性の合一によりて新個體を生ずることにして、最も高等

なる生殖法なり。其の際最も主要なる働をなす者は、男性の精液にして、其のものは「プノイマ」を取りて子に傳ふ。故に靈魂を賦與するものは男性の精液にして、女性の精液は、單に之れに身體を造るべき物質を給與するのみ。換言すれば前者は相にして、後者は素なり。蓋し女性は冷にして、其の血液は靈魂を伴ふ「プノイマ」を成熟せしむるに足らざるによる。而して輸精管の甚だしく迂廻せるは、性慾を節せんが爲にして、其の關係は、猶ほ腸管の迂廻によりて長く食物を保ち、以て食慾を制すると同様なりと説けり。

アリストテレースが、解剖學上に於て有しし知識の未だ幼稚なりしは言を俟たざる所なり。然れども彼は、早く已に有血動物と無血動物とを分ち、前者には脊椎なく、後者のみ之れを所有することを説き、又た胎生四足動物、卵生四足動物、鳥類、魚類、鯨類、軟體動物、軟殼動物、硬殼動物、昆蟲類の九目を、其の高下に從ひて叙列せり。又た身體に於て、火風なる能動的二元素と、地水なる受動的二元原の合一によりて、血液、骨髓、筋肉又は骨の如き等質のもの *ophoi pépē* と、手足耳目の如き不等質のもの *anōnō pepē* との二つを區別し、以て今日の組織及び器官に相當せる區別を立てたり。心臟に於ては、只だ三個の區別あるものと記載し、又た人

アリストテレースの解剖學上の知識

等質。不等質。

の脳髓は、動物に比して遙かに大なることを云へり。

以上は主として動物體に關する彼の生理學なるが、然らば人間につきては如何と云ふに、人間にありては、已に述べし榮養生殖を司どる植物靈魂、運動感覺を支配する動物靈魂の外、尙ほ人類に固有なる精神なるものを有し、隨て動物と異なりて、生物界に於て最高の地位を占むべきものとなし、此のことは、身體に於ても、明かに發現せらるゝものにして、其の直立して歩行すること、其の容姿の整調なること、其の頭腦の大なること、發語の器官を有すること、巧妙なる手を具ふることにて、之れを證明することを得べしと言へり。

彼れの心理學によれば、事物の認識は、知覺されしものゝ相が、知覺する者の靈魂に傳達せらるゝことによりて成り立つものなり。而して其の際五官によりて感知する所は、夫々五官に相當せる特殊なる性質に止まり、例へば眼に於ては色、耳に於ては音の如く、夫々、個々の性質を知るに過ぎざれど、吾人は之れを一個の中樞に於て統一し、始めて、數、大さ、形狀、動靜等の如き、事物に於ける一般共通の性質を知ることを得るものなり。又た此の中樞を須ちて、始て吾人は、相異なる五官によりて得たる感覺を、相互に比較し、又た區別し得るものなり。彼れは斯く

人間は生物の靈長なり

アリストテレースの心理學

共通知

して凡ての感覺を綜合する中樞の作用を、共通知覺 Gemeinssinn. と稱し、其坐位を心臟にありとせり。

今若し感覺器の刺激にして、知覺すべき事物の去りし後も、猶持續して止まざる時は、其の運動は中樞に傳達せられて、さらに新たなる感起すべし。之れ即ち *phantasia* なる。想像にして、若しも過去に於て認めたる事物に關はるときは、之を追 *epiphany* と云ひ、又た故意に追想を起さしめ記憶を喚び起す作用を、回顧 *evangelium* と云ふ。されば記憶の行はるゝも亦た、共通知覺に於てす。

睡眠及び
夢
快及び不
快

消化作用の結果として、中樞に一種の變化を起す時は、睡眠を催起す。且つ又た中樞に於て溫氣消失する時は、死を來たす。感覺器が內的に刺激を受け、其の變動が中樞に傳はるときは、茲に夢を來たす。若し又た、知感せられたる者が、善惡の見位より判別せらるゝ時は、快及び不快の感を生ず。其の結果として、之れを得んとし、若しくは之れに遠からんとするの慾望を起す。

理性は獨
立の生存
を保つ

凡て以上陳べし心的作用は、何れも、直接には動物靈魂の營爲する所にして、彼れが之れに對して下しし解釋は、大に今日の生理的心理學の所説に近似する所あり。而して人類に於ては、更に之れに加ふるに精神即ち理性を以てす。此の兩者の區別

理性の作
用は思考
なり

受動的理
性的能働
的理性

は、獨り其作用を異にせるのみならず、動物靈魂は身體と素相の關係を有し、相離るべからざるものにして、隨ひて、身體の死亡と共に消滅に歸するものなれど、理性は身體と離れて獨立に存在し得る者にして、永久不易なる神に近く、靈魂に比すれば一段高等なるものなり。されば精神は、身體死すと雖ども全く消滅する者にあらず。精神の働は思考することなるが、彼れは實際の思考 *wirkliches Denken* に先だちて、必ずや之れが礎地たるべき思考の能力 *Denkvermögen* なかるべからずと見て、理性に於て能働と受働との二様を區別せり。彼は兩者の關係を、白紙と筆とに譬へたり。理性の中、受働的の理性は、身體と共に消滅す。不死不滅なるは獨り能働的理性あるのみ。後者は蓋し最も神明に近き者なればなり。而して此の二様の理性の相互の關係如何につきては、彼れは十分なる解釋を與へざりしなり。將た又た、彼れの所謂神明に近しとなせる遍通不易なる能働的理性の不滅を以て、個性を保有する精神の不滅を説ける、通常の意義に於ける靈魂不滅説と、同一視すべきか否かに就きては、史家未だ定説なし。

アリスト
テレスの
論理學

アリストテレスは論理學の創始者なり。彼は論理學を以て學術研究の大方針を示す者とせり。彼れ以爲らく、學術的研究とは、須らく事物に於ける共通不易の理

ヒッポクラテース
及其の學徒の學
イマの説は
寧ろ物質
的傾向を
有す

ヒッポクラテース及び其學徒の、「アノイマ説に於て生命を説くや、地水火風の四元素を以て、自然物隨ひて又た身體形成の基礎となし、其の中[火]即ち[溫]に重を置きて、之れを以て諸物を結合し活動せしむるものとなししは、正さに是れ、エムペドクレースの思想を紹述せしものとも見るべく、將た又た「アノイマ」を以て溫の根源にして、空氣中より攝取補償せらるゝものと見たるが如き、何れも明かに、自然哲學者に由來しし物質的説明の命脈を傳ふるを見れども、プラトーン及びアリストテレースの理想主義出づるに及びて、生命の根源は全く非物質的なる靈魂の營む所となり、「アノイマ」は單に此の靈魂と直接に結び附きて、其の作用を媒介するに過ぎざるものとなり了はれり。而かも生命の直接の原因として「溫」を重要視する思想は、太古以來茲に至る迄、依然として易はることなかりしは、頗る興味あることと言はざるを得ず。且つ又た忘るべからざることは、アリストテレースによりて、太古以來、唯だ身體に對して説かれたる精神なるものに於て、明かに榮養生殖等、動植物に共通なる生活現象を司るべきものと、運動感覺の如き、動物と人間とに共通なる作用を司るべきものと、又た獨り人間にのみ特有なる理性てふ、三つの區別が始めて設けられ、而かも前二者を以て、身體と離るべからざるものとなし、單に理性のみを、純然たる

純理的の二元論の創立

物質に重きを置くは、
太古の物質的
二元論の一元論
より更に心に
重きを置くに
起るより、
二元論の起る
より

る超越的のものとなして、今日の意義に於ける純理的二元論の始めて樹立せられしことなりとす。

之を要するに太古主觀と客觀との別未だ明かならざりし時に於て、單に五官の到達する範圍に基づける、身體と精神而かも其のものは物質的の傾向を有すと二元論的對峙は、進みて自然哲學者時代に入りては、客觀に重を置き、アトム論によりて其の極致に達せる、物質的一元論によりて統一せられんとししが、時勢の趨く所人事研究時代を起し、主觀に重を置くに至りて、物質的一元論は、さらに轉じてプラトーン及びアリストテレースの二元論を喚び起せり。而して其の二元論たるや、之れを太古の原始人類によりて唱へられたる二元論に比すれば、其の論據の進歩せる月餘も管ならざりしなり。

第三 ヒッポクラテース以後ガレーンに至る迄の時代

吾人は以下ヒッポクラテース以後の時代に於ける希臘醫學の運命を説かんとするに

當りて、之れを「アレキサンドリア時代」、「羅馬時代」、及び「ガレオン時代」に區別せしは、暫らく叙序の便宜に従ひしのみ。然り而して此の時期に於ける希臘哲學は、正さに、アリストテレース以後の哲學に相當し、已に述べし如く、今や組織時代を去りて倫理時代及び宗教時代に入りしものとす。以下先づ此の兩時代に於ける希臘哲學の大勢を説き、次に醫學の歴史に移らんと欲す。

アリストテレース以後に於ける希臘哲學の大勢

アリストテレース以後に於ける希臘哲學の運命を觀察せんには、須からく當時の希臘に於ける政治的局面の變動に注意するを要す。已に述べたるが如く、歴山大王の併呑によりて、希臘政體の特色たりし都市の獨立は全く失はれ、其の結果として人心活動の舞臺なきに至り、人々の眼孔「我」の外に出づる能はず、ひたすら自己の安心立命のみ是れ慮り、又た他を顧みるの勇なく、而して徳を磨き已に克ちて、單に主觀的幸福に達せんとして、茲に倫理時代を惹起し、次で宗教に信頼して、安心立命を求めんとする出世間的思想を懐くに至りて、茲に宗教時代を見るに至りしなり。而して是れ實に希臘哲學の末期にして、そが自然科学及び醫學に對する關係は、

漸く薄らがんとししは言を待たず。唯だ此の間にありて注目すべきことは、アリストテレース以後の諸派の哲學に於て、往々にして古代希臘自然哲學者の思想が復活せられしことにして、此の點に於て、哲學と醫學とが密接なる關係を示ししことゝなす。

倫理時代に於ける學派の主なる者は、ストア學派、エピクロース學派、懷疑學派の三者なるが、是等のものは、其の生起及び盛衰の時期に於て、多少相前後するものあれど、何れも、希臘の末期よりアレキサンドリア時代、次で羅馬の盛時を通じて、思想界を支配せしものとす。

ストア學派の本領

(一) ストア學派 Stoicismus 此學派は已述のソークラテース學徒の一派たるキニツク學派より、其系統を受けたる者と云ふべく、其本領も亦た、キニツク學派と大同小異にして、吾人は獨り、力めて外物の羈絆を脱し、恬淡寡欲、以て満足を内に求むることによりてのみ、眞の幸福及び安心を望み得べしと云ふにあり。

彼等が所論の中、殊に注目すべきは、其の知識論なり、其の説に曰く、吾人の心は本來拭へる板の如く無一物なり。さればこの上に外物の知識によりて得たる印象を描くことにより、始めて、あらゆる知識は成立するものなり。詳しく言へば、感

ストア學派の知識論

覺によりて得たる印象が、其跡を遺すことによりて、茲に記憶を生じ、記憶積みて始めて經驗となる。而して經驗に基づきて推理することによりて、始めて事物の通有性なるものを見出すなり。されば通有性なるものは、單に、吾人が抽象的に考へ出だして言語に發表せし迄のものにして、眞に存在するものにあらず。眞に存在するものは、只だ個々の事物夫れ自身あるのみと、斯の如にして彼等は、プラトーン及びアリストテレス等が、通有性を認めて頗る之れを重要視せるに反對し、後世に於ける感覺論 Sensualismus 乃至經驗論 Empirismus の基を開けり。

創感論の
ストア學派の物理
學
は物と心の
二方面
なり。

殊に科學及び醫學に直接の影響を與へしは、ストア學派の物理學なり。彼等は古代希臘自然哲學者の物質的一元論を復活し、ヘーラクライトスに従ひて、萬物の本源を「火」に求めたり。「火」はエーテル様物質にして、又最も活動するものなり。されば之より成れる各物體に於ても亦た、物質の方面と、活動の方面乃ち精神との二様あり。「物」と云ひ、「心」と云ふも、畢竟するに一物體の二方面に外ならず。彼等は此本源たる「火」を以て、「宇宙の理性」と名づけ、萬物之によりて支配せらるゝが故に、よく調和を保つ者となせり。「火」よりして先づ地水風なる他の三元素を生じ、是等のものは何れも火によりて活氣を賦與せられ、以て種々相ひ結合して萬物をなす。

精神も亦
物質な
り。

人類の精神も亦た、身體と共に物質なり。何となれば、互に相影響すべきものは、必ず同性質のものたらざるべからず。蓋し非物質的の物が、物質の上に働を及ぼすことは、考ふべからざればなり。精神は五官並びに言語思考教化力なる八つの能力を具ふるものにして、其の中樞は心臓にあり、何んとなれば、言語は胸より發するを以てなり。

彼等が倫理に於ける根本思想は、「自然に隨ひて生活せよ」と云ふ彼等の格言に於て、遺憾なく云ひ盡くされたり。此の學派の創立者は、ツエーノン (Zeno, 紀元前三六二—二六四) なるが、之れを大成し、はクリシッポス (Chrysippos, 紀元前約二四〇) なり。而して羅馬の盛時に於て、思想界に最も勢力を占めしは此の學派の所説なり。

エピク
ロの學派
の本領

(一) エピク
ロ學派 Epikureismus 此學派はソクラテース學徒の一派にして、現世の快樂によりて幸福を求むる、斯れ人生究極の目的なりと説くキュレーネ學派より、系統を受けたるものにして、其の根本的思想も亦た相等しけれど、エピク
ロ學派にありては、其の説、キュレーネ學派に比すれば大に圓滿成熟せり。エピ
ク
ロ
ス
(Epikuros 紀元前三四二—二七〇) は、此學派の首唱者なるが、其の物理説は「アトム論の再興にして、醫學思想の發展に向ひて甚大なる影響を及ぼせり。倫理

精神云ひ
ふ皆一つ
の物質な
り。

靈魂消滅
説。

エピクロ
の心
理説。

時代の哲學の一として、彼れが學説の本領とする所も亦た、如何にして一生を安穩に過ごすことを得るかの問題にありしなり。念ふに、世には往々不可思議なる事物ありて、之れが爲めに迷信恐怖の念を起さしめ、吾人の安心を妨ぐる事あり。彼れは此の障礙をなすべき迷信を拂はんが爲に、彼れの物理説を建てたるなり。彼れ以爲らく、「有と物質とは離るべからず、物質なくしては有を考ふること能はず。故に神と云ひ精神と云ふ、是れ亦た物質に外ならず。而して凡ての物質は、「アトム」の偶然的の結合によりて成り。決して一定の目的ありて成れるにあらず。其の形状及び性質の異なるは、結合せる「アトム」の性質、及び其の結合の状態一様ならざるによる。此等の「アトム」にして又た偶然離散せんか、物體は即ち壞類を起すなり。精神は圓くして精微なる「アトム」より成立し、全身に分布するものなるが、死後は再び離散する者なり。斯く靈魂も亦た消滅するものなれば、吾人は死後の生活に關して杞憂を懐くを要せず。

知覺及び表象は、物質より發出する微小體より成れる影像 εἰδωλα, Idole が、五官器の竅孔より體内に侵入することによりて成る。而して凡ゆる知識は此知覺に基くものなり。記憶は曾て起りし原子振動の再起によりて生じ、意思は靈魂に生起せられたる運動が、身體に傳はるによりて成る。如斯く彼れの説く所は、「アトム論者と全く其の趣を同うし、純然たる唯物論感覺論なりしなり。而して是等の所説が、醫學に影響を及ぼし、早くも羅馬時代に於ける固體病理説となりて、醫界に表はれ出でしことは、次に述ぶるが如し。

懷疑學派
の本領。

ピルロン

(iii) 懷疑學派 Scepticismus 及び折衷學派 Eklekticismus 懷疑學派は其系統を「ソフィスト」より得たる者なり。凡そ吾人の知覺は、一切主觀的のものにして、人により、時と處とによりて、同一物と雖も、同一に感知せらるゝものに非ず、されば事物に共通不易なる眞理てふ者は本來あるべからず。故に吾人は事物に對して一切是非の判斷を止めて、無頓着となり。以てひたすら心の安穩ならんことを冀ふべしと云へり。隨て又た痛く目的論を攻撃せり。而して是れが創立者は、ピルロン (Pyrrhon 紀元前三七六—二八八) なれど、此の學説をして大に勢力あるに至らしめしは、アテナに於ける「アカデメイ」の學者なる、アルケジラソス (Arkesilaos 紀元前三一六—二四〇) の力なり。

斯くアリストテレス以後に於ては、諸派分立して軌轢を事とし、歸着する所を知らざりしが、人心漸く之に倦みて、紀元前第一世紀頃には、諸派の長を取りて之

折衷學說の出現。

れを折衷せんとする、所謂折衷學派を出すに至れり。而して其の中最も卓絶せるものを、キケロ(Cicero 紀元前一〇六——四三)なりとす。然り而して醫界に於ても亦た、ヒッポクラテースの没後四分五裂せし諸學派が、恰も此の時に當りて漸く折衷せられんとして、所謂折衷學派なるものを出すに至りしは、蓋し此の氣運に乗じたるものにして、決して偶然にあらざるなり。是等のことは、以下羅馬時代に入りて述ぶる所あらんとす。

新プラトニズム及び其の先驅者の出現。

(四) 新プラトニズム學派と其の先驅者。 Neuplatonismus und die Vorläufer des Neuplatonismus. 倫理時代にありては、徳を磨き己に克ちて、ひたすら自個の力によりて安心立命の地を得んと力めしも、熟々之れを内に省るに、靈と肉との争は到底止むべくもあらず、理想と現實とは到る所に撞着するを見、漸くにして自己以上の力即ち神に信頼して、其の苦痛煩悶を慰藉せんとするに至りて、希臘哲學は宗教時代に入りたるなり。加ふるに歴山大王の遠征以來、東洋との交通は愈々頻繁となりて、東方猶太人の教義も亦た輸入せらるゝあり、さらぬだに出世間的に傾ける思想界は、之れと相接觸して益々宗教的となり、斯くて新プラトニズム學派と稱する、一大組織を有する宗教哲學を出すに至りしが、是れが先驅者として、或はピタゴラスの學說に於

新プラトニズム學派の出現。

1. フヒロ

ける宗教的方面と、プラトニズムの學說に於ける神秘的の方面とを結合せる、新ピタゴラス學徒を出し、或は肉體は靈魂の墓なり、神明の助力によりて肉慾を解説する、是れ人生の本義なりと説きしフヒロ(Philo 紀元前三〇——紀元後五〇)の如きを出し、遂に紀元後三世紀に至りて、新プラトニズム學派を現出するに至れり。

新プラトニズム學派の綱領。

已に新プラトニズム學派の先驅者に於て、哲學の目的は、「神」と「人」とを結び付け、吾人をして圓滿なる「神」に歸せしむるにありしが、新プラトニズム學派に至りては、更に一步を進めて、萬物の太原を神に歸し、神よりして、順次に階段を下りて、「ヌウス」、吾人の靈魂、次に物質が分かれ出でたるものとなし、あらゆる不善不徳は此の最下級なる物質界より起るものなるが故に、之れを脱却して、漸次に階段を昇り神に近づくを以て、人生の目的となし、以て「ストア」學派の一元論に基きて、プラトニズム學派に表はれたる「物」と「心」との對峙を去りて、一切、之れを神なる一元に歸せり。是等の所説の神秘的空想的にして、確乎たる論據を缺けるは、云ふ迄もなきことながら、當時の宗教的に傾ける思想界は、喜びて之れを迎へ、古代より中世紀に至るに及びて、益々其の勢を逞しうせり。

斯くて、宗教時代に入れる希臘哲學は、何等科學に益する所あるなく、單に人心

摘要。

をして神秘的迷信的に傾かしめ、終に中世紀に於ける暗黒時代を惹起せしなり。之れを要するに、アリストテレス以後の希臘哲學は、倫理時代において、其の究極の目的は、人事の上でありしに關はらず、却りて、古代自然哲學者の昔に立ち歸りて、唯物論に傾き、後代に於ける感覺論・經驗論の基礎を翹めしは、大に注目に値すべきことにして、哲學が醫學に影響せしも亦た實に此の點にあり。是れ蓋しプラトーンによりて其の極頂に達しし主心論の、反動とも見るべきか。然り而して宗教時代に入るに及びては、主心主義再び勢力を占め、加ふるに思潮の向ふ所、宗教的教義乃至神祕主義と密接に相結合し、茲にあらゆる冥想迷信の源泉を開き、以て中世紀に於ける暗黒時代を胚胎せり。

アレキサンドリア時代の醫學

アレキサンドリアの文化。

歴山大王 (Alexandros. 紀元前三五六—三二三)。アリストテレスは王が太子たりし時、其の師傅たり。死して墳墓の土未だ乾かざるに、マケドニア大帝國は四分五裂し、是れによりて獨り政治上の局面に於けるのみならず、思想界に於ても亦、大なる變動を來たせり。此の時に當りて、希臘の文化は漸く老ひ去りて新興國に移り、

さらに此の所に於て、新たななる精華を開くに至れり。之れを歴山大王なる豊太閤に於ける徳川家康とも稱すべき、プロトレマイオス、ラギ (Ptolemaios I agi. 紀元前三二三) によりて建設せられたる、プロトレマイオス王國となす、而して首府は實にアレキサンドリアなりしなり。

當時アレキサンドリアは、世界の商工權を握りて、殷富宇内に冠たり。加ふるに國王相繼ぎて科學と藝術との奨励に力め、或は宏壯なる圖書館を設け、或は完備せる博物館を起し、或は廣大なる動植物園を開き、幣を厚くして盛んに四方の學者を招聘せしかば、幾くもなくして文物鬱乎としてこの新都を飾り、アレキサンドリアは實に學術技藝の中心となれり。

アレキサンドリアの文化は、一に之を希臘の文物に仰ぎしが、其の務むる所は創作にあらずして、寧ろ訓姑折衷にありしが如し。而して其の學風は實在主義にして、隨ひて天文、數學、機械學、建築學、造船術、古文書學の如きもの、非常なる發達を遂げたるが、斯く自然科学を奨励しし結果として、醫學殊に解剖學及び藥物學の如きも亦た、大なる進歩を致せり。當時アレキサンドリアの榮華が如何に極頂に達ししかは、國王プロトレマイオス、フィラデルフオス一タ合奏の宴を開きしに、侍す

アレキサンドリアの自然科學。

る所の俗人無慮六百人を數へしと云ふを見ても、之れを推察するに餘りあり。然り而して斯く自然科學發達の原因をなしし所以は、恐らくストア學派並びに「エピクロ」ス學派によりて復活せられたる物理學説が、其の主なる根柢を造くりしによるなるべし。

試みに自然科學の方面に於ける進歩を釋ねんに、天文、數學及び物理學に於ては、太陽を中心とせる宇宙系を組織し、且つ太陽の「バララクセ」 Sonnenparallaxe によりて太陽と地球との距離を計算せしヒッパルコス(Hipparchos 紀元約一六〇)あり。又た是より以前に月の盈虚 Mondphase の助によりて、地球と太陽との距離を測定し、且つ太陽及び月の軌道を計算しし、アリストコス(Aristarchos 紀元前約二八〇)あり。又た幾何學の研究に於て其名を永久にしし、ユイクライデス(Eukleides 紀元前約三〇〇)あり。又た蒸氣の張力を利用して機械を運轉せしめ、以て蒸汽機關の濫觴をなししヘロンの(Heron 紀元前約二五〇)あり。彼れは又た音樂の物理に精通せり。

勢ひ斯の如くなるが故に、醫學も亦少からざる發達をなし、殊に解剖學に於ては、其の進歩非常に著しくして、人體解剖は、實にアレキサンドリアに於て胚胎せしなり。蓋し希臘に於ては、人體解剖は宗教の嚴禁する所なりしが、アレキサンドリア

人間に於ける活體解剖

に於て、始めて且つ盛んに之れを行へり。而かも、獨り屍體に就きて之れを檢せしのみならず、犯罪者を捉らへて活體解剖を施し、或はまた藥物の働を試驗するの用に供せり。無論其の當時に於ける解剖の法たるや、今日とは其の趣を異にし、主として頭、胸、腹の三腔に於ける臟器を檢するに止まり、通常先づ腹部を切開し、次に胸部に移れる者なるが、横膈膜を切り胸腔を開くに及びて、試験に供せられし者の死亡することを述べたり。是れ蓋し當時の王侯が、一面には、科學獎勵者たるの名譽を得んが爲に、且つ一面には一種の好奇心に驅られたる娛樂として、頻りに其の材料を提供せしによる。十六世紀に於て伊太利の王侯の間にも、全く是と同様な風習の存在せしことは、疑ふべからざる事實なりとす。

アレキサンドリアに於ける醫學者にして最も傑出せしは、ヘロフィロス及びエラジストラトラスの二人なり。

ヘロフィロス(Herophilos 紀元前約三〇〇)は、人體解剖學の鼻祖と稱せらる。彼は三腔所の中、頭腔に於て殊に精密なる檢索を遂げたり。彼は頭部に於ける靜脈窩を發見せり。即「トロクラール」、ヘロフィリ「Torcular Herophili」なる頭内靜脈窩に於て其の名聲を永久にせり、其の外、腦膜及び延髓の寫翻 Calamus scriptorius に就きて記

ヘロフィロスの業績

菱形窩は
坐位なり。

載し、殊に、菱形窩に就きては、動物試験を行ひて、此の部を刺せば直ちに死を來たすことを見て、之れを以て靈魂の坐位となせり。且つ又た眞の神經を發見し、此者が知覺作用を司ることを知れり。其の他、眼に就ては、早く已に脈絡膜毛様突起、且つ恐らくは水晶體並びに網膜をもしりしが如し。彼は又た動脈管と靜脈管とを區別し、且つ脈搏は心臟より與へらるゝものとせり。乳糜管及び淋巴管につきても亦た記載する所ありたり。また肝を検査し、及び十二指腸に命名せり。其他肺動脈が、靜脈血を運ぶものなることを知れり。且つ又た精囊輸尿管副腎攝護腺を發見し、精液は睪丸に於て血液より造らるゝことを述べたり。脈搏に就ては、精細なる研究をなし、年齢及び疾病によりて如何なる變狀を呈すべきかを叙せり。而して動脈の内容物としては、「ブノイマ」なりと考へたり。是れ、死後、動脈管壁の收縮によりて血液を驅逐し、隨ひて空虚となりし屍體の動脈管を見しによる。彼れは又、ヒッポクラテースの信仰者にして、ブノイマ説及び液體病理説は、彼れが實地醫術を施すの指針となれり。又た藥物療法につきて、少なからざる功績を遺せり。

エラジスト
トラーツス
の業績

エラジストトラーツス(Erasistratus、紀元前二八〇年に死す)も亦、解剖學に關して大なる業績を遺せり。彼れは腦の廻轉を記載し、且つ之れと智力との關係を論述し、殊

運動及び
知覺神經
の神

に小腦を以て、思考及び精神病の宿る所となせり。最も記憶すべきは、彼れによりて始めて運動神經及び知覺神經の區別せられしことにして、前者を以て腦膜より出で、後者を以て腦自己より發する物とせり。淋巴管及び乳糜管は、時としては乳を入れ、時としては空氣を満たす物と考へたるが如し。彼れはプラトーン以來の説に反對して、飲食物が肺に入ることを否み、會厭軟骨の働を以て、飲食の際喉頭の入口を閉塞する者となせり。消化作用は、胃壁の運動と、並びに「ブノイマ」の作用とに基く。動脈管と靜脈管との間には連絡ありて、平時は其の連絡絶せられ、動脈管は「ブノイマ」を、靜脈管は血液を充たすものなるが、一朝、動脈管を損傷するときは、「ブノイマ」は外方に向ひて出で、其の空所を充たさんが爲に、血液は動脈管内に入り來たり、次で之れより外方に進出する者となせり。又た疾病あるときは、其の連絡の閉鎖は弛緩し、血液が靜脈管より動脈管に入りて、以て鬱血 Plethora を起し、其結果として熱を發す。故に治法としては、四肢を緊縛して、血液が其際動脈管に流入することを防ぐにあり。彼はヒッポクラテースを尊崇せざりしも、猶ほブノイマ説を信じ、加之ならず之れに靈魂の「ブノイマ」 *νεψυχη ψυχικη*、Seelenpneuma 及び生活の「ブノイマ」 *νεψυχη ζωτικη*、Lebenspneuma なる二様の別を設け、前者は腦に、後者は

靈魂の
ブノイマ
生活の
ブノイマ

心臓に其坐位を占むるものとなせり。是れ蓋しプラトーン及びアリストテレースによりて明かに區別せられたる、生活現象を司るものと、精神作用を司るものとの對峙を、「プノイマ」に結び附けたるものにして、プノイマ説は茲に至りて、更に一步を進めたるものと謂ふべし。

エラジストラーツスは、嘗てシリヤ王ゼロイクスの侍醫たりし時、其の王子會、不治の病に罹りて、百法手を盡くせども效なかりしが、彼れの慧眼なる、其の病原の失戀にあることを察し、其の戀人の誰なるかを知らんが爲に、王子の病牀を訪ふ者ある毎に、病者の脈と狀貌とを注視し、遂に王子の病原は、妙齡にして且つ美麗なる其の繼母を戀ひしにあることを知り、機を見て、王に説きて二人を婚せしめ、病を癒やししにより、其の恩賞として、約我が二十五萬圓に相當せる巨額の金を得たりと云ふ。以て彼れが犀利の眼光を見るべきなり。

羅馬時代に於ける醫學

羅馬の文物

アレキサンドリアの榮華も、槿花一朝の夢と消え、羅馬は、馬上新たに天下を取りたりと雖も、馬上直ちに文物を作る能はず、羅馬の文化は一に希臘文明の輸入に

固體病理現説の出現

アスクレピアス

よりて成れり。詩歌繪畫彫刻の如き、哲學修辭學史學の如き。數學機械學動物學の如き。悉くみな、其の法式を希臘に取らざるはなく、加之、上流社會にありては、希臘語は、實に平常の用語とさへせられたりき。若し其の間にありて、羅馬人の獨創にかゝるものを數ふれば、僅かに、希臘公法に對立して、羅馬私法を編成せしと、羅馬固有の建築學及び軍陣學あるのみ。されば、醫學の如きも亦た、全然希臘より輸入せられしは、當然のことにして、基礎醫學の原則とする所も亦た、大體に於て、希臘の自然哲學者以來、ヒポクラテースを経て成りたる「プノイマ説」並びに液體病理説の外に出づること能はざりしなり。而かも、新興國自から生氣の鬱勃たるものあり。權威あるヒポクラテースの舊説に向ひて、早くも弓を牽く者あるを見る。之れを液體病理説に反抗して起りし、固體病理の説となす。

固體病理説の創立者は、夙に希臘醫法を羅馬に傳へしアスクレピアス(Asklepiades aus Bithynien. 紀元前一二八——五六)なることは、頗る奇異とするに足れり、念ふに、是れ蓋し、斯の如き醫説が、當時勢力を逞うししストア學派及びエピクロース學派の唯物論と相待ちて、羅馬人の心中に最も入り易かりしによるるべし。斯の學説の根據は、デーモクリトス及び近くはエピクロースの、「アトム説」となす。彼曰はく、

ボロイ及
メーレン

宇宙間の萬物は、肉眼にあらすして只だ理性によりてのみ認識し得べき、大小精疎の「アトム」より成る。是等の「アトム」が、自己の有する力によりて、物理的必然的に相ひ集合團結しつゝ、形狀性質を異にせる、肉眼によりて見らるゝ物體を形ち造るなり。動物體にありては、是等の「アトム」は相集合して、粗大なる元素を造り、此の元素は、更に相集まりて一つの感覺ある微竅を具有せる細管 *capilla* をなす。此の細管の空竅即ち其の小孔内に、さらに精微にして、絶えず運動しつゝある小分子、即ち「レプトメーレン」[Leptomeren]なるものを容る。而して此の「レプトメーレン」は、消化せられし食物、或は呼吸によりて攝取せし空氣中より入り來りて、其の運動によりて、生活體に於ける諸官能、例へば溫搏脈及び感覺等を惹き起す者にして、「レプトメーレン」の運動にして其の適度を得、且つ其の調子正しければ、健康を保てども、然らざれば疾病を來たす。熱は運動の餘り強激なるとき、惡寒は之れに反して餘り微弱なるとき發す。又た「レプトメーレン」の大さと、孔の大さと調和せずして、小孔を閉塞することあらんか、忽にして病を惹き起すものなり。されば療法の主眼とする所は、「レプトメーレン」をして、異常状態より平常状態に返へらしむるにありて、隨ひて藥物療法よりも、寧ろ食物の節減、皮膚の摩擦、能動的若しくは受動的運動、水

其の病理
説

浴等の如き、一般に食餌療法若しくは理學的療法に對して頗る重を置けり。今之れを鍼家の所謂經絡孔穴の説に比するに、大に相似たる所あるは、頗る興味あることとなす。

メトロー
ケル

「レプトメーレン」の説を紹介して、固體病理説にさらに一新生面を開きしは、*デミソン* (Thénison, 耶蘇紀元前、約五〇)、*テッサルス* (Thessalus, 耶蘇紀元後五〇)等なり。之れを所謂「メトローケル」[Methodiker]の學派となす。この學派の綱領としし所を擧ぐれば、生活體に於ける固形成分は、收縮並びに弛緩の二力、換言すれば一定の緊張力 *Tonus* を有し、あらゆる生活現象は、この力の發現に外ならず。而してこの收縮並びに弛緩は、或は外界の刺激により、若しくは、體の一部が他部に及ぼす影響、即ち交感作用 *Sympathie* によりて、惹起せらるゝものなり。隨ひて今若し或る原因によりて、常態に於ける緊張力に變化を來すときは、生活現象も亦た、之れにつれて變調を起すべし。是れ即ち疾病なり。緊張力の非常に亢進せるものを、緊張状態 *Status Strictus s. Sclerosis* と云ひ、弛緩せるものを、弛緩状態 *Status laxus s. Atonia* と云ふ、又た一つの器官に障礙を起す時は、續發性の障礙を、他の諸器官に誘起するものなり。この現象を聯關作用 *Communilitäten* と唱へたり。

其の固體
病理説

是等の固體病理説は、一時其の勢力を逞うししが、再び其の影を隠し、之れに代はりて、液體病理の舊説が復活せられ、世に現はるゝに至れり。所謂、「ブノイマチケル」(Pneumatiker 耶蘇紀元後一六〇年迄)とは、即ち是れなり。而して此の間に又た、ツエルズス Celsus 及びプリニウス二世 C. Plinius II の如きは、百科字彙的大著述をなし、醫學に資する所ありたり。史家は之を總稱して「エンチクロペヂステン」(Encyclopädisten) と云ふ。

エンチクロペヂステン

ブノイマチケル

三様のブノイマ

「ブノイマチケル」は、何れも、「ブノイマ」に頗る重を置き、紹きてさらに之れを敷衍せり。其の主唱者たるアテネウス (Athenaeus, 紀元後六〇) は、已にエラヂストラアツスによりて唱導せられたる「ブノイマ」の區別に、更に一つを附加して三つとなし、「靈魂のブノイマ」、「精神のブノイマ」、「生活のブノイマ」(Seelen Geistes- und Lebens-pneumata) なる區別を立てたり。「ブノイマ」は萬物の精氣にして、呼吸につれて體內に入り、心臓及び脈管によりて、身體の各所に瀰蔓す。而して是れが體成分と混和する割合によりて、或は健康を保ち、或は病の原因となる。又た熱病は體液の腐敗によりて發生するものとせり。

折衷學派の出現

斯くて、ヒポクラテースによりて建設せられたる希臘の醫學も、今や四分五裂し、

諸説紛々として歸著する所を知らざりしが、茲に至りて漸く其の弊に疲れ、各學説を參酌して、長を取り、短を捨て、以て一新機軸を出ださんとする者あるに至れり。之れを折衷學派 *eklektische Schule* となす。而して醫學に於ける此の折衷的傾向が、哲學に於ける折衷的氣風と正さに時を同じうししことは已に述べたるが如し。是等折衷學派に屬する醫家にして名聲ありしは、深く藥物療法の研究をなししディオスコリデス Dioskorides (紀元後約五〇)。腦神經の作用は反對側に於て行はれ互ひに交叉すと説きたる、アレテウス (Aretaeus, 紀元後第一世紀の後半等) なりしが、醫學中興の祖たるガレオン其の人も亦た、實に此の學派の間より崛起せしなり。而かもガレオンは、醫學史上頗る重大なる意味を有するが故に、節を改めて之れを説かん。

第四 ガレオンの學説

時勢は實に人物を造り、人物は又時勢を産む。希臘醫學正さに秋風凋落の嘆久しからんとするに際して、ガレオンは、其の英邁の資と絶倫の才とを以て、起ちて之れが攝理の任に當たり、時代の要求は一に學理と實際との調和にあることを觀破し、

ガレインの功績。

ガレインの學說の缺點。

驚くべき巧妙なる方法を以て醫學と哲學とを結び付け、打て一丸となせり。されば如何なる難解の問題と雖も、彼れの前には恰も堅氷の日を迎へて解くが如く、春風春水一時に杏林に來るの觀ありき。斯くてクラウヂウス、ガレーヌス(Claudius Galenus、紀元後一三一—二一〇)の名は、教義に於ける釋迦孔子耶蘇の如く、法典に於けるリツクルグス及びゾロンの如く、一千五百年間の久しき、醫界を獨占したりしなり。ガレインの醫界に遺しし功績は、之を二つに總括するを得べし。其の一つは、觀察と實驗とが、醫學的知識の眞正なる根源なることを明にししこと。其の二は、人體の構造及び其の官能を知ることが、實地醫學に取りて必要缺くべからざる根據なることを認め、極力、解剖及び生理の開発に意を用しこと是れなり。唯だ彼に於て恨む所は、アリストテレスの目的論と、プラトーンの理想主義イデアリズムとに心酔し、往々にして甚だしき獨斷主義に陥り、以て後世を誤らしめたるにあり。而かも彼れの目的論、彼れの獨斷主義たるや、造物者の全智能を認めて、此手によりて創造せられたる天地間の萬物は、一として善美ならざるはなく、一としてよき目的に適應せざるはなしと云ふにあるを以て、今や正さに大飛躍を始めたる耶蘇教、及び中世紀を通じて、醫學の媒姆たりしアラビヤ人の教義と、頗るよく調和し、相呼號して以て



ガレイン (Claudius Galenus)

生活現象
に對する
ガレイン
學說の原
理。

三様のプ
ノイマ。

其の根柢を固うししなり。されば、彼れが所論に於ける短所は、却りて彼れの學說をして永く命脈を保たしむる原因となり、其の長所たる、彼れが創製せし實驗的基礎醫學は、却りて彼れに向ひて反旗を翻へし、復活時代の氣運に乗じて、彼れが鐵壁に肉薄し、一舉にして之れを顛覆せしなり。又た奇なりと云はざるを得ず。

ガレインが學說の根源は、ピポクラテースによりて唱へられたる地水火風の四元素、並びに夫れに相當せる乾濕冷熱の四性質、及び血液粘液黃黒二膽汁なる、四つの原液の說にあり。彼れによれば、生體を活かし、並びに其の統一を司るものは、「プノイマ」なり。「プノイマ」に三様あり。一つは脳髓中に位し、思考感覺並びに隨意運動に關する精神作用を主宰す。是れ即ち靈魂のプノイマ *πνευμα ζωϊκόν*, *Seelenpneuma* なり。其二は心臟に位す。是れ即ち生活のプノイマ *πνευμα ζωτικόν*, *Lebenspneuma* にして、搏動血行並びに溫の生成分布及び調節を司どる。第三は即ち「自然のプノイマ」 *πνευμα φυσικόν*, *Pneuma von natürlichen Geist* と稱すべきものにして、其の位置を肝臓に占め、血液の生成榮養生長分泌生殖等の機能をなす。而して是れ等の「プノイマ」は、ストア學派の所謂宇宙の生靈の氣即ち「エーテル」様の物質にして、空氣中より肺によりて體中に攝取せられ、絶えず補償せらるゝ者なり。而かも是等の「プノイマ」は、本

原動力。

來異なりたる性質を有する物に非ずして、同一物質より成るものなれど、其の座位を異にするに従ひて、夫々異なりたる原動力を有し、異りたる機能を表はすに至るなり。是等の原動力に就ては、牽引力、排出力、生合力、保持力等の種々の力を區別せり。是等の原動力は、夫々三様の「プノイマ」に賦與せらるゝ者にして、何れも地水火風の四元素に於て表はさるゝものなり。且又た是等の原動力の外、尙ほ一個生物全體の物質 *Tota substantia* として、一種特有なる力を表はす。此の力は決して個々の元素に於て見るべからざるものなり。此の生體に特有なる力を以て、彼れは如何なるものを意味せしや不明なれど、要するに此の力に托して、單に五官的又た機械的に理解すべからざる多くの生活現象を説明せし者なるべし。而して斯の如き彼れの所説が、後世に至りて、超自然的神秘的不可思議力を、生活現象の説明に採用するに至らしめしは、言はずして明かなり。

之を要するに彼れは、前代に於けるあらゆる醫學的哲學的知識を綜覽して、一個の大系統を組織せしなり。之を其の「プノイマ説」に徴するも、如何に巧妙なる方法に於てアリストテレース、プラトーン、ヒポクラテース等の思想が結合せられしかを見るに足るべし。而かも同時に、如何に彼れに於て始めて、現今の意味に於ける生

一個生物全體が、
生體として、
異なる力を
表はす。

「プノイマ」
は宇宙の
氣なり。

實驗生理
學の鼻
祖。

理學的思想が、(よし往々にして牽強附會の點ありとするも)一貫せる形式を取りて言ひ表はされしかを知るに餘りあり。

ガレーンは生理學に於て、最も大膽にプラトーン、アリストテレース以來の目的論を應用し、身體を以て、精神の官能を營むに適合して造られたる道具となし、是れに關する著書を公にして、盛んに之れを唱へしも、一面に於ては大に觀察を重んじ、實驗的生理學の鼻祖となれり。彼れは脈につきて、屢活體解剖を行ひ、以て種々の器官に於ける機能を研究せり。例へば、第五頸髓神経を切斷する時は、上下の棘状筋 *M. Supra-und Infra-spinatus* の麻痺すること。回歸神經 *N. Recurrens* を切る時は、發聲作用の消失することを知れり。彼は又た知覺神經、(視神經動眼神經外旋神經顔面神經聽神經迷走神經舌咽神經及び運動神經脊髓神經)並びに混合性神經、(延髓より出づる神經)の別を設け、且又た内臟の感覺は、交感神經によりて起るものとせり。又た神經節を以て、神經の作用を強むる働ありとせり。

彼によれば、腦は骨髄の一種にして、精神の宿る所なり。決してヒポクラテース及び其學徒の唱へし如く、腺と見做すべき物に非ず。「靈魂の「プノイマ」は、脈絡叢 *Plex. Chorioideus* に於て血液の純精なるものより造られ、第四腦室に入り、必要に

腦の作
用。

感覺器。

應じて諸の神經に傳はる。其の際、松葉腺は調節作用を司るものなり。彼れは腦の機能を示さんが爲に、屢脈に就きて活體解剖を施し、腦の層を順次に切除せり。感覺器に就きては、知る所極めて少なく、視力を虹彩及び水晶體の間に存する「ブノイマ」の働に歸し、又た聽官に就きては、波動を聽神經によりて感ずるものとなせり。

ガレインの血行説。

腸管より吸収せられし栄養物は、肝臓に入り、此の所に於て「自然のブノイマ」の作用によりて血液を生成す。其の液體の一部は、直ちに肝臓より體の各處に行きて栄養をなし、他の一部は、肝靜脈より下大靜脈を経て右心に入り、此所に於て不純なる成分は、煤 *Carbon* となりて肺に行き、呼吸に伴ひて體外に排除せらる。左右兩心室の隔壁は、數多の小孔を存し、右心室に入りて純粹にせられたる血液は、この小孔を通じて、左心室に行き、此所に於て、肺靜脈を通じて左心に入り來たれる、「ブノイマ」と相混和し、斯くして温によりて活氣を得るものなり。而して其の混合物は、通常の血液よりも稀薄にして、大動脈によりて身體の諸方に輸送せらる。此等の血液及び「ブノイマ」は、諸種の機能を營むことによりて消費せらるゝものにして、このものが靜脈血となりて再び心臟に歸へること、換言すれば大循環に關しては、未だ

心臟の運動。

何等の知識をも有せざりしなり。小循環に關しては、ガレインは已に其のことを知れりとの説あれど、是れ又た誤にして、ガレインは、肺動脈によりて肺に行きし血液を以て、肺の栄養を司る爲に消費せらるゝ物となし、肺靜脈の作用は、單に空氣中より取りし「ブノイマ」を、左心に輸送するものと考へたり。心臟自個の運動に關して、ガレインは活體解剖によりて精密に是が觀察を遂げ、收縮と擴張とが左右同時に行はれ、收縮に際しては、獨り血液を送り出だすのみならず、又た煤をも肺及び皮膚に送りて、之れを排出し、心臟擴張に際しては、血液のみならず、「ブノイマ」を肺、加之ならず皮膚よりも心臟内に吸収するものとなせり。脈搏につきては、仔細に是れが區別を附し、名稱を與へたり。

呼吸作用の機轉。

呼吸作用の機轉に關しては、脊髄截斷、肋間筋並びに肋間神經、及び肋骨を切除することによりて、早く已に其の真相を明かにし、肋間筋及び横隔膜の收縮によりて、胸腔は廓大を來たし、其の結果として、空氣は胸中に入し、肺は受働的に廣がることを説けり。

消化作用。

消化作用に就きては、胃に於ける消化、肝に於ける消化、並びに血中及び各臓器に於ける消化なる三様を區別せり。而して其際主もなる作用をなすものは、温なり。

消化によりて分たれたる不必要物は、糞尿及び汗となりて身體を去る。脾の作用は、食物中より残滓物を取り去りて之れを純精ならしむるにあり。腎は血中より尿成分を吸収して、之れを外に向ひて排泄す。

生殖論。

生殖に關しては、男子の精液に重を置き、女子の精液は單に榮養を司るものとせり。又た心臟の運動が、「プノイマ」を吸収する爲なりとの考よりして、胎兒に於ては未だ心臟の鼓動なく、生後に於て始めて之れを表はすものとなせり。

ガレインは斯の如くにして、獨り生理學のみに止らず、著々解剖學病理學の研究を公にし、之れを醫術の實際に應用し、基礎醫學の眞の意義を明かにして、以て實地醫學に堅固なる基礎を與へたり。殊に生理學にありては、獨りアリストテレースと同じく、觀察及び實驗によりて、多くの事實を集めたるのみならず、尙ほ進みて一定の哲學的見地より、此の多數の材料を統括綜攝して、一の明晰なる系統を造り、以て複雑なる生活現象に、統一せる説明を試みしなり。人或はこの點に於て、ガレインの餘りに大膽に、餘りに想像的に流れたるを譏る者あれど、是れ未だ其の一を知りて二を知らざるの言のみ。若しガレインをして、單に箇々の觀察と材料の蒐集とに終はらしめば、彼れは蓋しアリストテレースの學說以外に一步を出だすこと能

はざりしなるべく、生理學隨ひて醫學に貢獻する所も亦た尠なりしなるべし。ガレインは實に希臘醫術の最後の華なりき。彼れ一度去りて天下また春なし。

ガレインの末世に當たるや、時將さに、思想界は宗教時代に入らんとし、神祕的、非科學的の風潮は、一般の人心を支配し、復た一人の起ちて觀察と實驗とによりて眞面目なる研究に従事し、彼れが學燈を紹がんとする者あるなし。彼れの慧眼なる焉くんぞよく之を觀破せざらんや。彼れ晩年嘆して曰はく、「今の醫は皆な盜賊なり、唯だ此れは其の掠奪を山野に於てし、彼れは其の貪婪を羅馬に於てするの差あるのみ」と、以て其の當時の醫界に於ける衰運の兆を察するに足るべし。

第五 古代の醫學及び哲學に於ける綜覽

以上述べ來たりたる所によりて、古代に於ける醫學並びに哲學の大勢を通觀すれば、吾人は實に各方面に於て、幾多の興味ある且つ重要なる關係を見出すことを得べし。

先づ醫學及び哲學の關係に就て云はんに、思想界の未だ混沌たりし太古は暫らく

措きて論せず、希臘醫學に就きて之れを観察すれば、其の根本の思想は、一として之れを哲學に仰がざるはなし。自然哲學者時代は云ふもさらなり、ヒッポクラテース出で、醫學を哲學より分離して、之れに獨立の基礎を置きし後と雖ども、猶ほ醫學の大方針を示すべき指南車は、常に哲學たりしなり。ヒッポクラテース及び其の學徒によりて唱へられたる、「プノイマ説たるや、一は之れを前代に於ける自然哲學者の思想、殊にエムペドクレースの四元素説に得、而して一は之れを、其の當時に於けるプラトーン、アリストテレスの學説に倣ひて改竄したるや、又た疑ふべからず。然り而して、ストア學派及びエピクロース學派の、一旦起ちて實在主義物質主義を唱ふるや、忽ちにして、アレキサンドリアに於ける自然科學殊に醫學の隆盛を來たし、延て羅馬時代に入るに及びては、固體病理説を現出して、アスクレピアデスの「レプトメーレンの説となり、「メトーチケル」の緊張論となれり。次で、哲學界に於て漸く分派軌轍の弊に倦み、折衷の氣運正さに至るや、醫學に於ても亦た折衷學派の現出するを見る。其の關係の密接なる、恰も物動きて影之れに隨ふが如し。ガレーンに至るに及びて、基礎醫學は、茲に始めて一貫せる大系統の組織を見たりと雖ども、而かも其の原理たりし者は、エムペドクレースに基づけるヒッポクラテースの學説に

あらすんば、即ちプラトーン、アリストテレス、ストア學派等の哲學思想にして、唯だ彼れは巧みに之れを取捨補綴せしに止まるのみ。由是觀之、希臘哲學の知識なくして、希臘醫學を解せんと欲するは、猶ほ徒らに木に緣りて魚を求むるが如きのみ。勞して而して效なし。而かも希臘醫學は、實に現今泰西醫學の起源たりしことを忘るべからず。

翻りて、生活現象の解釋に關する思想發展の順序を攷ふるときは、更に多大の興味を惹起するものあり、已に述べたるが如く、太古主觀客觀の別未だ明かならざるに當りてや、其の説く所は二元論たりしと雖も、而かもそは未だ純然たる形式に進化せざる原始的の者にして、精神を以て五官の到達すべき範圍内に於ける事物に擬し、或は之れを以て溫となし、或は之れを以て呼吸氣となし、寧ろ物質的傾向を表はししが、進みて自然哲學者時代に入るや、自然界を解釋せんとして、客觀に重を置くに至り、物質界を取りて之れを内に及ぼし、痛く唯物論に傾き、其の極頂に達するや、終に「アトム論を出して、靈魂も亦た「アトム」の振動に外ならずとする物質的一元論を現はせり。さらに轉じて人事研究時代に入るや、主觀に重を置きて、茲にプラトーン及びアリストテレスの主心主義理想主義を起し、「心」と「物」との對峙が初

人事研究
時代に於
ける二元
論

倫理時代
に於ける
物質的一
元論

ガレイン
説に於け
る唯物的
方面

めて明瞭に提唱せらるゝに至り、終に純然たる二元論を見るに至りしが、更に轉じて倫理時代に入るや、理想主義の反動として、却りてストア學派及びエピクロース學派の物質論・アトム論の再興を出だすに及びて、「生とは何んぞや」てふ問題は、再び物質的一元論の方向に趨けり。さらに進みて、ガレインの學說に就きて之れを觀察せんに、彼れが、「プノイマ」を以て、「ストア派の所謂萬物の本源たる、一面には物質にして同時に一面には活動を具ふるエーテル様物質と見做し、絶えず空氣中より補償せらるゝと云ひしに徴すれば、確かに彼れは物質論者たりしなり。加之、彼れは明かに、彼れの所謂「プノイマ」なるものが、必ずや、後世に於て空氣中より分析し出ださるゝことを豫言せしなり。

ガレイン
説に於け
る非物質
的方面

而して此の豫言は、實に一千七百年の後ブリストレー、シェーレー、ラボアジエー等の酸素發見によりて、其の眞實なることを證據立てられたるなり。彼れは斯く、一面に於ては明かに物質的一元論者たりしと雖ども、一面に於ては理想主義に基づける目的論を唱へ、且つ又た物質に固有なる種々なる原動力の外、一種不可思議なる生物固有の力の存在を説きしが如きは、明かに、彼れが二元論の見地に立ちしことを證して餘あり。彼れは斯く一面には一元論者にして、他面には二元論者た

人間の思
想は振子
の如し

る點に於て、折衷學派たる特色と、且つ是れに避くべからざる弱點とを示せるものと云ふべし。而して吾人は又、先きにアリストテレースの哲學に於て、同様なる弱點を見たりしなり。

畢竟する
に人は人
たるを免
れず

由是觀之、人間の思想は實に振子の如し。之を生活現象の解釋に關する思想の變遷に徴するも、絶えず一つの極端より他の極端に向ひて動くを見る。而かも其の中自づから不變不易終始一貫せるものあり。何ぞや。曰はく、溫呼吸氣若しくは血液を以て、生命の根源となしし太古人類の思想が、「プノイマ説」となりて、是れ等變轉極りなき思想界に於て、永く其命脈を維持せしことは是なり。之を一元論及び二元論に徴するも、中心主義及び物質主義に就て見るも、「プノイマ」を以て溫の根源となし、空氣中より攝取せられ、血管によりて身體に分布する物と考へし點に於ては、何れも符節を合するが如し。畢竟するに「人は人たるを免れず。是れ即ち知識の程度によりて、其の論據とする所相同じからずと雖も、而かも其所説は一定範圍内に彷徨して、夫れ以外に出づる能はざりし所以なり。

第二編
中
世
紀